河内長野市文化財調査報告書第45輯

河内長野市埋蔵文化財調査報告書ＸＸＶ

烏帽子形城跡
太白遺跡
上原中遺跡
小塩遺跡
三日市北遺跡

２００６年３月

河内長野市教育委員会

河内長野市文化財調査報告書第45輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書ＸＸＶ
烏帽子形城遺跡・太白遺跡・上原中遺跡・小塩遺跡・三日市北遺跡
正誤表

頁	行	誤	正
序文	17	頂ました	頂きました
4		河内長野市遺跡分布図（1／4000）	河内長野市遺跡分布図（1／40000）

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向かう街道の要衝として発展してきた街です。このため、市内には数多くの文化財が残されています。

この様な河内長野市も、大阪市内への通勤圏に位置しているため、住宅都市として発達してきました。この住宅開発がもたらした文化財や自然に対する影響は大きなものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財は、開発と直接的に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、現在の、更には未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市に於いては、重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は、発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達の残したメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めて頂くと共に、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用して頂ければ幸いです。

これらの発掘調査に協力して頂ました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に、末尾ながら謝意を表すものです。

平成18年３月

河内長野市教育委員会
教育長　福　田　弘　行

例　　言

1．本報告書は、平成17年度文部科学省の国庫補助事業として、河内長野市教育委員会が実施した烏帽子形城跡（ＥＢＳ04―６）、太白遺跡（ＴＨＫ04－１）、上原中遺跡（ＵＨＮ05－１）、小塩遺跡（ＯＳＯ05－２）、烏帽子形城跡（ＥＢＳ05―４）、三日市北遺跡（ＭＩＮ00－５）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、河内長野市教育委員会教育部社会教育課太田宏明・同課嘱託職員小林和美を担当者として実施した。

3．本書の執筆は太田・小林が行い、編集は小林が行った。文責については太田が負うものである。

4．発掘調査及び内業整理については、下記の方々の参加・協力を得た。（敬称略）
荒田恵・池田和江・大塚美幸・大西美智子・大西京子・杉本裕子・武田隼希・平野京美・柳光早矢香・平松由紀・山田直子・廣瀬佑美・中村智佳・藤吉里香・酒井祐介・湯浅敬子・河内長野市文化財ボランティア

5．写真撮影は、遺構については太田・小林、遺物については太田が行った。

6．発掘調査については下記の方々の協力を得た。（敬称略）
和泉大樹、藤田哲也、喜多貞裕、毛受建築設計事務所、（株）ジョーコーポレーション

7．本調査の記録は、写真・実測図等の記録及び、カラースライドを作成した。また出土遺物については、市教育委員会で保管し、一部は市立ふれあい考古館で展示している。広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡　　例

1．本報告書に記載されている標高は、T.P.を基準としている。

2．土色については、「新版標準土色帖」2003年度版による。

3．平面測量基準は、国家座標第Ⅵ系による５ｍメッシュを基準に実施したものである。

4．図中の北は、座標北である。

5．本書の遺構名は、下記の略記号を用いた。

ＳＡ…杭列　　ＳＢ…掘立柱建物　　ＳＤ…溝・暗渠

ＳＩ…竪穴住居　　ＳＫ…土坑　　ＳＰ…遺物出土ピット

ＳＷ…石垣・石組・石列　　ＳＸ…落ち込み・不明　　ＮＶ…谷状地形

6．遺構実測図の縮尺は、1/20・1/50・1/60・1/80・1/100・1/150・1/250である。

7．遺物実測図の縮尺は、土器1/4・石器2/3を基準としているが、遺物の状況により変えている。

8．遺物名は、土師質土器を土師質、瓦質土器を瓦質、須恵質土器を須恵質と略称し、器種名を付した。

9．遺物の断面は、土師器・土師質土器・漆器・石製品が白抜き、須恵器・瓦器・瓦質土器・須恵質土器・陶磁器が黒塗り、瓦・木製品・金属製品が斜線である。

10．遺物番号と写真図版の番号は一致する。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表目次
図版目次
第１章　調査の状況……1
第２章　調査の結果……7
　第１節　烏帽子形城跡（ＥＢＳ05－６）
　　1　概略……7
　　2　調査の方法と層序……8
　　3　調査の結果……8
　　4　まとめ……10
　第２節　太白遺跡（ＴＨＫ05－１）
　　1　概略……11
　　2　調査の方法と層序……12
　　3　調査の結果……12
　　4　まとめ……13
　第３節　上原中遺跡（ＵＨＮ05－１）
　　1　概略……14
　　2　調査の方法と層序……14
　　3　調査の結果……15
　　4　まとめ……15
　第４節　小塩遺跡（ＯＳＯ05－２）
　　1　位置と環境……16
　　2　遺跡の概要……17
　　3　調査に至る経緯……18
　　4　調査の方法と層序……18
　　5　調査の結果……21
　　6　周辺の調査……24
　　7　まとめ……30

第５節　烏帽子形城跡（ＥＢＳ05－４）
1　位置と環境……33
2　遺跡の概要……34
3　既往の調査・研究……37
4　調査に至る経緯と目的……37
5　堀割の調査……38
6　横堀の調査……38
7　遺物……42
8　まとめ……42
第６節　三日市北遺跡（ＭＩＮ00－５）
1　位置と環境……46
2　遺跡の概要……47
3　調査の方法……47
4　基本層序……47
5　遺構……47
6　遺物……57
7　まとめ……57

挿　図　目　次

第１図　河内長野市遺跡分布図（1/40000）……4
第２図　調査区位置図（1/2500）……7
第３図　遺構配置図および土層断面実測図（1/60）……9
第４図　出土遺物実測図……10
第５図　調査区位置図（1/2500）……11
第６図　出土遺物実測図……12
第７図　調査区位置図（1/2500）……14
第８図　出土遺物実測図……15
第９図　調査区位置図（1/2500）……16
第10図　遺構配置図（1/150）……18
第11図　土層断面実測図(1/50)……19
第12図　SK１・２・３遺構実測図(1/20)……20

第13図　SX１遺構実測図(1/20) ……21
第14図　出土遺物実測図……21
第15図　出土遺物実測図……22
第16図　第１調査区　遺構配置図（1/150)……23
第17図　第１調査区　出土遺物実測図……24
第18図　第２調査区　遺構配置図（1/150)……25
第19図　第２調査区　SI１出土遺物実測図……26
第20図　第２調査区　SP１出土遺物実測図 ……26
第21図　第２調査区　SX１出土遺物実測図 ……26
第22図　第２調査区　出土遺物実測図……27
第23図　第３・４調査区　遺構配置図（1/250)……28
第24図　第３調査区　出土遺物実測図……29
第25図　第５調査区　遺構配置図（1/100)……29
第26図　第６調査区　遺構配置図（1/100)……29
第27図　第５調査区　出土遺物実測図……30
第28図　調査区位置図（1/1000）……35・36
第29図　第１調査区　北側トレンチ東西土層断面図（1/50）……39・40
第30図　第１調査区　北側トレンチ南北土層断面図（1/50）……41
第31図　第１調査区　南側トレンチ南北土層断面図（1/50）……41
第32図　出土遺物実測図……42
第33図　第２調査区　東西土層断面図（1/50）……43・44
第34図　調査区位置図（1/2500）……46
第35図　第１調査区　平面図・土層断面図（1/80）……49・50
第36図　第２調査区　平面図・土層断面図（1/80）……51・52
第37図　第１・２調査区　遺構断面図（1/20）……53
第38図　出土遺物実測図……55
第39図　出土遺物実測図……56
第40図　出土遺物実測図……56

表　目　次

第１表　発掘届出件数月別一覧表……1
第２表　主な発掘・立会調査一覧表……1
第３表　河内長野市遺跡地名表……5

図　版　目　次

図版１　遺構　ＴＨＫ04－１　第３トレンチ南壁土層
　　ＯＳＯ05－２　調査区全景（東から）
図版２　遺構　ＯＳＯ05－１　第１・２調査区全景（北東から）、第２調査区全景（北東から）
図版３　遺構　ＯＳＯ05－１　第３調査区北半部（北から）、第３調査区南半部（南から）
図版４　遺構　ＯＳＯ05－１　第５調査区全景（東から）、第６調査区全景（東から）
図版５　遺構　ＥＢＳ05－４　第１調査区北側トレンチ北壁東部、第１調査区北側トレンチ北壁西部
図版６　遺構　ＥＢＳ05－４　第１調査区北側トレンチ東壁、第１調査区南側トレンチ
図版７　遺構　ＥＢＳ05－４　上段左：第２調査区調査前状況、上段右：第２調査区全景、下段：第２調査区北壁東部
図版８　遺構　ＭＩＮ00－５　上段：第２調査区、下段：第１調査区
図版９　遺構　ＥＢＳ04－６　第５トレンチ全景（北から）
　　遺物　ＵＨＮ05－１　盛土（１・２）、ＯＳＯ05－２　包含層（３・９）、ＯＳＯ05－１　第１調査区包含層（21・32）
図版10　遺物　ＯＳＯ05－１　第１調査区包含層（35・41・44）、第２調査区ＥＳＩ１（58）ＳＰ１（59）、ＳＸ１（60・61）、（65～67・73）、第３調査区包含層（76・77）
図版11　遺物　ＥＢＳ04－６（１）、ＴＨＫ04－１（１）、ＥＢＳ05－４（１）
　　ＯＳＯ05－２　包含層（１・２・４～８・10～15）
図版12　遺物　ＯＳＯ05－１　第１調査区包含層（22～29・31・33・34・36～40）
　　ＯＳＯ05－１　第１調査区包含層（42・43・45～53）
図版13　遺物　ＯＳＯ05－１　第２調査区ＳＩ１（54～57）、ＳＸ１（62～64）、（68～72・74）
　　ＯＳＯ05—１　第２調査区包含層（75）、第３調査区包含層（78・79）、第５調査区包含層（80～84）
　　ＯＳＯ05－２　ＳＫ１（19）、ＳＫ３（17）、包含層（16・18・20）
図版14　遺物　ＭＩＮ00－５　包含層（１～13・22・23）、包含層（14～21）

第１章　調査の状況

平成17年の文化財保護法93・94・96条による発掘届及び発掘通知の件数は、総数114件、そのうち発掘届96件、発掘通知17件、新規発見通知１件である。

今年の発掘届にみられる原因者の状況は例年並であったが、本発掘調査まで至ることは少なかった。

第１表　発掘届件数月別一覧表

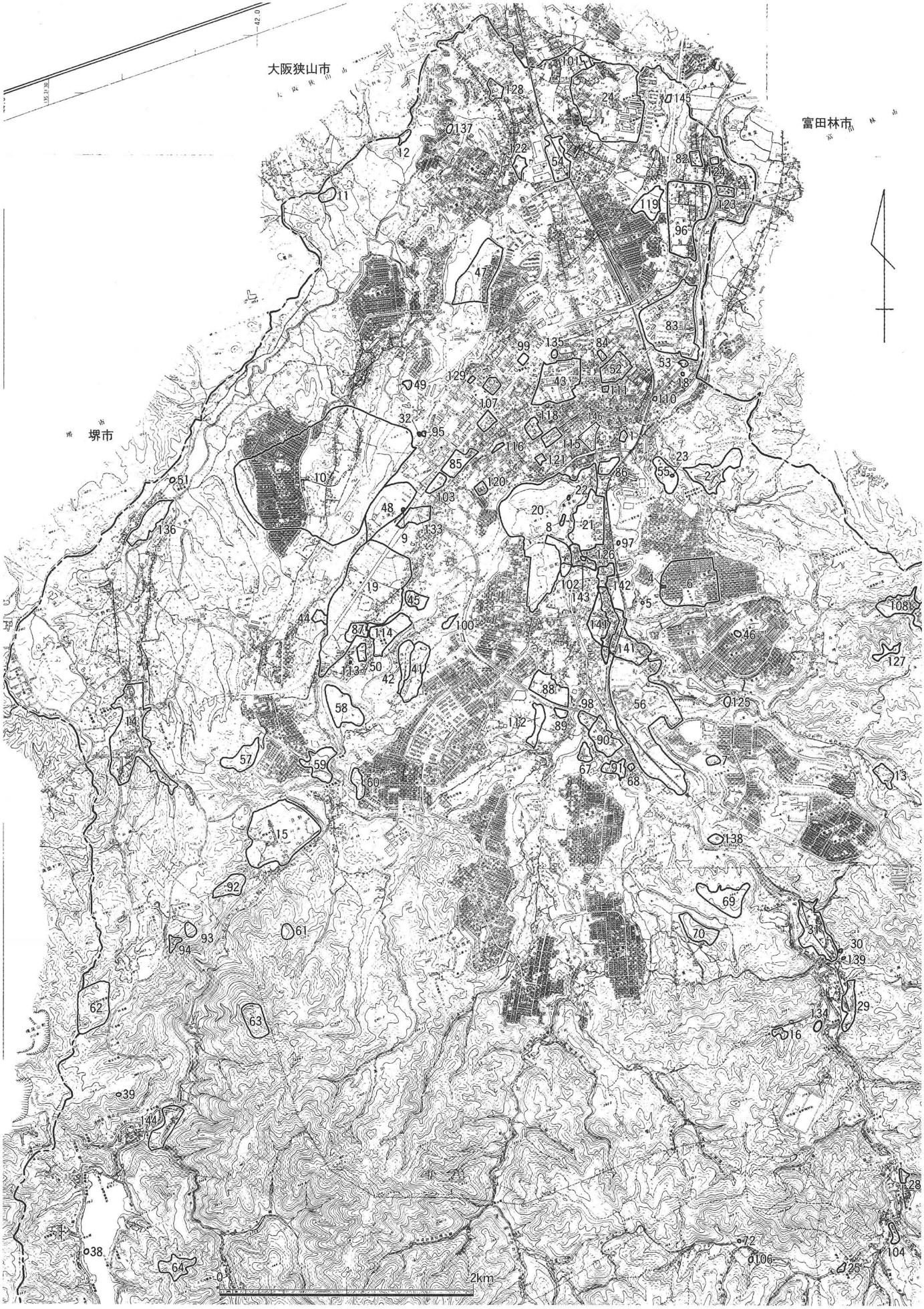
	平成16年度			平成17年度									総数
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
発掘届（93条）	7	5	11	4	10	10	8	7	9	9	7	9	96
発掘通知（94条）	1	0	0	0	1	0	0	5	6	2	1	1	17
発見届（96条）	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
発見通知（97条）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第２表　主な発掘・立会調査一覧表

遺跡名	調査期間	申請者	申請面積(㎡)	用途	種別	区分	備考
西代藩陣屋跡 NDH04-3	H17.1.11～1.13	個人	108.60	個人住宅	発掘	国庫	遺構･遺物なし
西代藩陣屋跡 NDH04-4	H17.1.11～1.13	個人	108.62	個人住宅	発掘	国庫	遺構･遺物なし
膳所藩代官所跡･西高野街道	2005.1.12	個人	259.85	個人住宅	発掘		遺構･遺物なし
三日市北遺跡 MIN04-12	H17.1.13～3.31	河内長野市長	18000	道路	発掘		弥生時代の竪穴住居跡、古墳時代の溝、中世の落ち込みを検出、弥生土器、古墳時代の須恵器･中世の瓦器が出土
烏帽子形城跡 EBS04-6	H17.1.14～2.4	個人	2528.44	宅地造成	発掘	国庫	本書掲載
烏帽子形城跡･烏帽子形八幡神社遺跡 EBS04-7	H17.1.19	(宗)烏帽子形八幡神社	2000.00	防災工事	発掘		遺構･遺物なし
喜多町遺跡 KTC04-5	H17.1.2	河内長野市長	413.00	下水道	立会		遺構･遺物なし
高野街道 KYR04-2	H17.1.24	(有)吉祥	90.74	店舗	発掘		遺構･遺物なし
烏帽子形城跡 EBS04-8	H17.1.26	(株)成旭	44822.05	宅地造成	発掘		遺構･遺物なし
三日市遺跡 MIC04-5	H17.2.3	個人	164.16	個人住宅	立会		遺構･遺物なし
三日市北遺跡･三日市宿跡･高野街道 MIN04-13	H17.2.14	個人	336.14	テナントビル	発掘		遺構･遺物なし
錦町北遺跡 NSN04-1	H17.2.25	個人	99.53	個人住宅	発掘		遺構･遺物なし
上原遺跡 UHR04-1	H17.3.7	(株)四国ツルカメ	3089.11	休憩所	立会		遺構･遺物なし
三日市遺跡 MIC04-5	H17.3.14	個人	125.71	個人住宅	立会		遺構･遺物なし
太白遺跡 THK04-1	H17.3.29	(株)信進ホーム	2869.47	分譲住宅	試掘		溝を検出。瓦器、土師器が出土

遺跡名	調査期間	申請者	申請面積(㎡)	用途	種別	区分	備考
長池窯跡群 NIK05-1	H17.4.4	個人	451.71	個人住宅	発掘		遺構・遺物なし
三日市北遺跡	H17.4.5	個人	285.68	テナントビル	立会		遺構・遺物なし
西高野街道 KYR05-1	H17.4.7	個人	127.39	個人住宅	発掘		遺構・遺物なし
菱子尻遺跡 HKS05-1	H17.4.19	南海不動産(株)	187.92	事務所	発掘		遺構・遺物なし
西高野街道 KYR05-2	H17.4.19	個人	98.57	倉庫付店舗	発掘		遺構・遺物なし
喜多町遺跡 KTC05-1	H17.5.6	ファミティホーム(株)	497.82	分譲住宅・道路	発掘		遺構・遺物なし
三日市北遺跡 MIN05-1	H17.5.10～6.21	河内長野市長	18000.00	道路	発掘		中世の柱穴・土坑を検出。古墳時代の須恵器・中世の瓦器、土師皿が出土
向野遺跡 MKN05-1	H17.5.19	芝池建設(株)	714.95	開発造成	発掘		遺構・遺物なし
西代藩陣屋跡 NDH05-1	H17.5.23	個人	143.47	個人住宅	発掘	国庫	遺構・遺物なし
三日市北遺跡・三日市宿跡・高野街道 MIN05-2	H17.5.25	個人	87.36	個人住宅	発掘		遺構・遺物なし
西高野街道 KYR05-3	H17.5.26	個人	284.78	兼用住宅	発掘		遺構・遺物なし
市町東遺跡・東高野街道 ICE05-1	H17.6.9	個人	378.55	個人住宅	立会		遺構・遺物なし
三日市遺跡 MIC05-1	H17.6.13	個人	1088.48	店舗・共同住宅	発掘		遺構・遺物なし
上原東遺跡 UHE05-1	H17.6.23	個人	1071.81	店舗	発掘		溝を検出
烏帽子形城跡・高野街道 EBS05-1	H17.6.27	個人	216.34	倉庫	発掘		遺構・遺物なし
天野山金剛寺遺跡 KGT05-1	H17.7.4～7.12	(宗)天野山金剛寺	112.00	社寺	発掘		近世の土坑を検出。近世の瓦、土器が出土
三日市北遺跡 MIN05-3	H17.7.5～8.31	河内長野市長	747.05	自治会館	発掘		弥生時代の落ち込みを検出。古墳時代の須恵器、弥生土器が出土
塩谷遺跡 SIO05-1	H17.7.8	個人	185.67	個人住宅	発掘		遺構・遺物なし
上原東遺跡 UHE05-1	H17.7.15	(株)幸楽苑	1071.81	看板	発掘		溝を検出
小塩遺跡	H17.8.12～8.17	(有)アペックス	4990.53	分譲住宅	発掘		古墳時代の須恵器・土師器、中世の瓦器が出土
小塩遺跡 OSO05-1	H17.9.1～10.7	(有)アペックス	4990.53	分譲住宅	発掘		古墳時代の住居跡、奈良時代の建物跡を検出。古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器が出土
市町東遺跡 ICE05-2	H17.9.8	個人	180.03	個人住宅	発掘		遺構・遺物なし
上原中遺跡 UHN05-1	H17.9.9	個人	1660.51	店舗	発掘		本書掲載
塩谷遺跡 SIO05-2	H17.9.12	個人	171.98	個人住宅	発掘		遺構・遺物なし
三日市宿跡・三日市北遺跡 MIN05-4	H17.10.3～10.31	河内長野市長	16000.00	再開発事業	発掘		古代の河道・近世の溝・暗渠・土坑を検出、近世陶磁器・瓦が出土
烏帽子形城跡・高野街道 EBS05-2	H17.10.12	河内長野市水道事業管理者職務代理者	210.30	水道	立会		遺構・遺物なし
小塩遺跡 OSO05-2	H17.10.12～10.22	河内長野市教育委員会	4990.53	範囲確認	発掘	国庫	本書掲載

遺 跡 名	調査期間	申 請 者	申請面積(㎡)	用 途	種別	区分	備 考
向野遺跡 MKN05-2	H17.10.13	(株)福永建設	1073.00	宅地造成	発掘		遺構・遺物なし
膳所藩代官所跡 ZZH05-1	H17.10.21	個人	158.72	個人住宅	発掘		遺構・遺物なし
高野街道・ 三日市遺跡 KYR05-4	H17.10.26	河内長野市水道事業管理者職務代理者	75.89	水道	立会		遺構・遺物なし
天野山金剛寺遺跡 KGT05-2	H17.10.31	個人	133.43	個人住宅	発掘		遺構・遺物なし
日野観音寺遺跡 HKT05-1	H17.11.2	河内長野市長	400.00	下水道	立会		遺構・遺物なし
栄町東遺跡 SKE05-1	H17.11.22	河内長野市長	87.80	下水道	立会		遺構・遺物なし
庚申堂遺跡 KSD05-1	H17.12.5	個人	201.73	個人住宅	発掘		遺構・遺物なし
烏帽子形城跡 EBS05-3	H17.12.12	河内長野市長	195.30	公衆便所	立会		遺構・遺物なし
流谷八幡神社遺跡 NTH05-1	H17.12.26	個人	324.92	個人住宅	発掘	国庫	遺構・遺物なし
烏帽子形城跡 EBS05-4	H18.1.16～ 2.3	河内長野市教育委員会		学術調査	発掘	国庫	本書掲載



第１図　河内長野市遺跡分布図(1/4000)

番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降
3	観心寺遺跡	社寺	平安以降
4	大師山古墳	古墳	古墳（前期）
5	大師山南古墳	古墳？	古墳（後期）
6	大師山遺跡	集落・生産	弥生（後期）・平安
7	興禅寺遺跡	社寺	中世以降
8	烏帽子形八幡神社遺跡	社寺	室町以降
9	塚穴古墳	古墳・墳墓	古墳（後期）・近世
10	長池窯跡群	生産	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	延命寺遺跡	社寺	平安以降
14	天野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降
15	日野観音寺遺跡	社寺・生産	縄文・平安～近世
16	地蔵寺遺跡	社寺	中世以降
(17)	岩湧寺遺跡	社寺	平安以降
18	五ノ木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世
20	烏帽子形城跡	城館・生産	中世～近世
21	喜多町遺跡	集落	縄文・古墳～中世
22	烏帽子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	末広窯跡	生産	中世
24	塩谷遺跡	散布地	縄文～近世
25	流谷八幡神社	社寺	平安以降
26	蟹井淵南遺跡	散布地	中世
27	蟹井淵北遺跡	散布地	中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世
29	千早口駅南遺跡	社寺	中世
30	岩瀬薬師寺遺跡	社寺	中世以降
31	清水遺跡	散布地	中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳？	
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世
(34)	滝畑埋墓	墳墓	近世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(36)	東の村観音堂跡	社寺	近世
(37)	西の村観音堂跡	社寺	近世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世
39	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世
(40)	宮の下内墓	墳墓	古墳
41	宮山古墳	古墳	古墳
42	宮山遺跡	集落	縄文・奈良
43	西代藩陣屋跡	散布地・城跡	飛鳥～奈良・江戸
44	上原町墓地	墳墓	近世
45	惣持寺跡	散布地・社寺	縄文・奈良・鎌倉
46	栗山遺跡	祭祀	中世～近世
47	寺ヶ池遺跡	散布地	縄文
48	上原遺跡	散布地	旧石器～近世
49	住吉神社遺跡	社寺	近世以降
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降
52	膳所藩代官所跡	城館	江戸
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳
54	菱子尻遺跡	散布地・社寺	縄文～近世
55	河合寺城跡	城館	中世
56	三日市遺跡	集落・古墳他	旧石器～近世
57	日の谷城跡	城館	中世
58	高木遺跡	散布地	縄文
59	汐の山城跡	城館	中世
60	峰山城跡	城館	中世
61	稲荷山城跡	城館	中世
62	国見城跡	城館	中世
63	旗蔵城跡	城館	中世
64	権現城跡	城館	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	中世以降
(66)	葛城第15経塚	経塚	平安以降
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降
68	庚申堂遺跡	社寺	近世以降
69	石仏城跡	城館	中世
70	佐近城跡	城館	中世
71	旗尾城跡	城館	中世
72	葛城第16経塚	経塚	平安以降
(73)	葛城第18経塚	経塚	平安以降

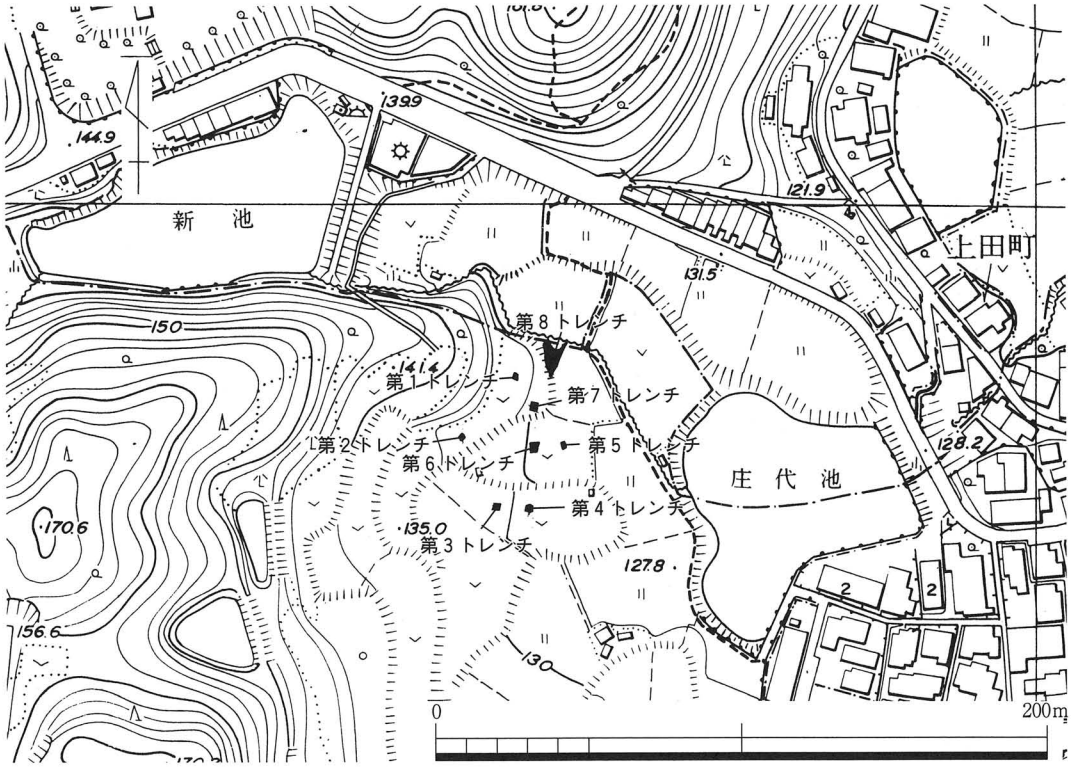
番号	文化財名称	種類	時代
(74)	葛城第19経塚	経塚	平安以降
(75)	笹尾塞	城館	中世
(76)	大沢塞	城館	中世
(77)	三国山経塚	経塚	平安以降
78	光滝寺遺跡	社寺	中世以降
(79)	猿子城跡	城館	中世
80	蟹井淵神社遺跡	社寺	中世以降
81	川上神社遺跡	社寺	中世以降
82	千代田神社遺跡	社寺	中世以降
83	向野遺跡	集落・生産	縄文・平安～近世
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	集落	中世
86	大日寺遺跡	社寺・古墳・墳墓	弥生～近世
87	高向南遺跡	散布地	鎌倉
88	小塩遺跡	集落	縄文～奈良
89	加塩遺跡	集落	古墳（後期）
90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館？	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	タコラ城跡	城館	中世
94	岩立城跡	城館	中世
95	上原近世瓦窯	生産	近世
96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
97	上田町窯跡	生産	近世
98	尾崎北遺跡	集落	古墳～中世
99	西之山町遺跡	散布地	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚遺跡	墳墓	中世
(105)	葛城第17経塚	経塚	平安以降
106	薬師堂跡	社寺	中世以降
107	野作遺跡	生産	中世
108	寺元遺跡	集落・社寺	縄文・奈良・中世
(109)	鳩原遺跡	散布地	中世
110	法師塚古墳跡	古墳	古墳
111	山上講山古墳跡	古墳	古墳
112	西浦遺跡	集落	古墳・中世・近世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	栄町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
116	錦町遺跡	散布地	中世
(117)	太井遺跡	散布地	縄文・中世
118	錦町北遺跡	集落	弥生・中世・近世
119	市町西遺跡	集落	縄文・中世
120	栄町南遺跡	集落	中世
121	栄町東遺跡	散布地	弥生・中世
122	楠町東遺跡	散布地	弥生
123	汐の宮町南遺跡	散布地	弥生・奈良
124	汐の宮町遺跡	散布地	中世
125	神ガ丘近世墓	墳墓	近世
126	増福寺	社寺	中世以降
127	三味城遺跡	墳墓・城跡	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
129	昭栄町遺跡	散布地	中世
*130	東高野街道	街道	平安以降
*131	西高野街道	街道	平安以降
*132	高野街道	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
134	地蔵寺東方遺跡	墳墓	弥生・鎌倉
135	本多町北遺跡	散布地	中世
136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
137	あかしあ台遺跡	散布地	近世
138	岩瀬北遺跡	集落	中世
139	岩瀬近世墓地	墳墓	近世
140	昭栄町東遺跡	散布地・池跡	縄文・中世・近世
141	三日市北遺跡	集落	縄文・弥生～中世
142	三日市宿跡	宿駅に伴う街並	中世～近世
143	上田町宿跡	宿駅に伴う街並	中世～近世
144	滝尻遺跡	散布地	縄文・古代・中世
145	市町北遺跡	散布地	中世
146	太白遺跡	散布地	中世

（　）は地図範囲外　*は街道につき地図上にはプロットせず

第3表　河内長野市遺跡地名表

第２章　調査の結果

第１節　烏帽子形城跡（ＥＢＳ04－６）



第２図　調査区位置図(1/2500)

１　概略

河内長野市の地形を概観すると市の南部を金剛葛城山地が東西にのび、その山地から派生する丘陵と北へと流れる天見川・石川・石見川によって形成された河岸段丘と河川沿いのわずかな沖積地で構成されている。従って市内の遺跡の多くは河岸段丘上に立地する。

烏帽子形城跡が立地する烏帽子形山は標高182ｍを測り、金剛葛城山地から北へ派生した丘陵の先端に位置し、南に広がる低地に突き出た様相を示す。さらに東側を天見川、西側を石川が流れ、烏帽子形山の北東麓で合流し、烏帽子形山は三方を河川によって囲まれていることから地形的に要所であることが看取できる。また山の東側を京都と高野山を結ぶ高野街道が南北に走り、西側では石川を挟んで和泉街道が走るなど交通面においても要所であり、烏帽子形山は地形条件とあわせて中世城郭が立地する場所として最適であることが容易に推察される。

周囲には石川の対岸に栄町東遺跡、栄町遺跡、錦町北遺跡、太白遺跡が位置する。東側の高野街道沿いには大日寺遺跡、喜多町遺跡が位置し、街道を約500ｍ南下すると近世の

宿場町として栄えた三日市宿跡に至る。

烏帽子形城跡は烏帽子形山の山頂部に位置し、昭和63年度に実施された山頂部の調査では主郭と考えられる場所から礎石建物が検出され、平成２年度に実施された主郭の南東にあたる斜面から中世の礎石建物、石垣、埋甕が検出されたが、山裾部の調査においては城郭に関する遺構は検出されていない。

調査地は烏帽子形山の東麓の緩斜面上に位置し、標高は130～134ｍを測る。主郭など城の中心部は新池を谷頭とする谷の北側に位置する。

本調査は宅地造成に先立ち実施した。調査は建物の基礎工事の切土の影響を受けるかどうかを確認するため、確認調査坑を設定した。

2　調査の方法と層序

調査区はトレンチを８ヶ所設定した。調査の方法は包含層直上まで機械掘削を行ない、その後作業員による人力掘削、精査を行ったが第５トレンチを除いて遺構の検出には至らなかった。層序は各トレンチごとに以下述べる。

3　調査の結果

・第１トレンチ

調査区は２ｍ×２ｍのトレンチを設定した。基本層序は現地表から耕土（層厚10㎝）、床土（層厚５㎝）、地山である。

遺構は検出しなかった。

遺物は磁器、土師質皿、土師質羽釜が出土したが、細片のため図化できなかった。

・第２トレンチ

調査区は2.2ｍ×２ｍのトレンチを設定した。基本層序は現地表から耕土（層厚15㎝）、床土（層厚15㎝）、10ＹＲ７/８黄橙色礫混じりシルト（層厚５㎝）、10ＹＲ６/４にぶい黄橙色礫混じり細砂（層厚15㎝）、地山である。

遺構は検出しなかった。

遺物は瓦器、陶器甕、陶器碗、磁器、土師質炮烙が出土したが、細片のため図化できなかった。

・第３トレンチ

調査区は２ｍ×２ｍのトレンチを設定した。基本層序は現地表から耕土（層厚20㎝）、床土（層厚５㎝）、10ＹＲ６/４にぶい黄橙色礫混じり細砂（層厚５㎝）、地山である。

遺構・遺物ともに検出しなかった。

・第４トレンチ

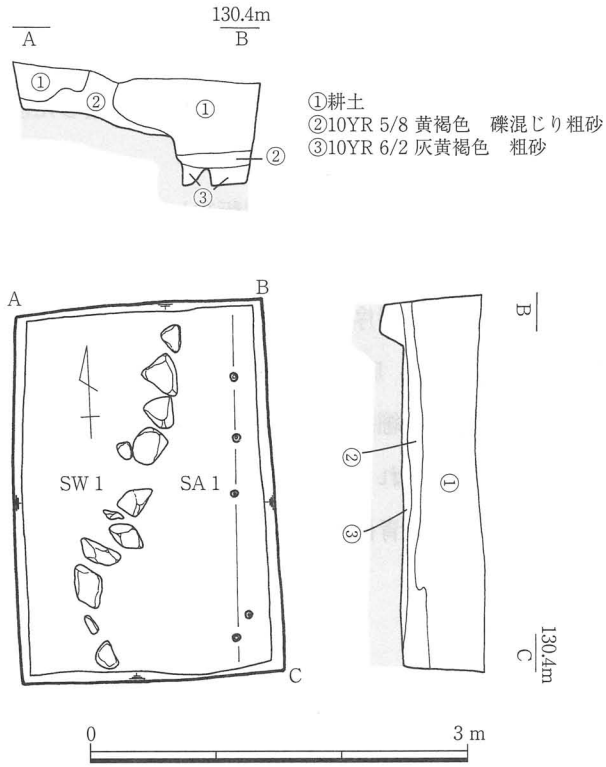
調査区は２ｍ×２ｍのトレンチを設定した。基本層序は現地表から耕土（層厚20cm）、床土（層厚５cm）、10ＹＲ６／４にぶい黄橙色礫混じり細砂（層厚５cm）、地山である。

遺構・遺物ともに検出しなかった。

・第５トレンチ（第３図、図版９）

調査区は2.9ｍ×２ｍのトレンチを設定した。基本層序は現地表から耕土（層厚40cm）、10ＹＲ５／８黄橙色礫混じり粗砂（層厚10cm）、10ＹＲ６／２灰黄褐色粗砂（層厚５cm）、地山である。遺構は石組遺構と杭列を検出した。

遺物は須恵器、磁器皿、磁器碗、土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。



第３図　第５トレンチ遺構配置図および土層断面実測図(1/60)

（１）杭列

［ＳＡ１］（第３図）

ＳＡ１は調査区の東側で南北にのびる形で検出された。両端とも調査区外に続くため詳細は不明であるが、遺構の規模は検出長2.8mを測る。主軸方向はＮ―２°―Ｅである。

遺物は出土しなかった。

（２）石組遺構

［ＳＷ１］（第３図、図版９）

ＳＷ１は調査区の中央で等高線に沿って緩やかに曲がる形で検出された。石はややまばらに並んでおり、このＳＷ１を境に東側は１段下がっていた。両端とも調査区外に続くため詳細は不明であるが、遺構の規模は検出長2.9m、幅0.3m、高さ0.15mを測る。主軸方向はＮ―14°―Ｅである。

遺物は出土しなかった。

・第６トレンチ

調査区は3.8m×2.3mのトレンチを設定した。遺構・遺物ともに検出しなかった。

・第７トレンチ

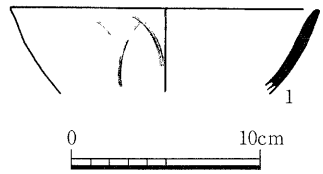
調査区は2.5m×2.3mのトレンチを設定した。遺構・遺物ともに検出しなかった。

・第８トレンチ（第４図、図版11）

調査区は長辺12m×短辺８mの三角形のトレンチを設定した。基本層序は現地表から盛土（層厚１m）、耕土（層厚20cm）、床土（層厚５cm）、7.5ＹＲ６/３にぶい褐色礫混じり細砂（層厚20cm）、地山である。

遺構は検出されなかった。

遺物は中国製青磁碗（１）、瓦器、陶器、土師質羽釜が出土した。



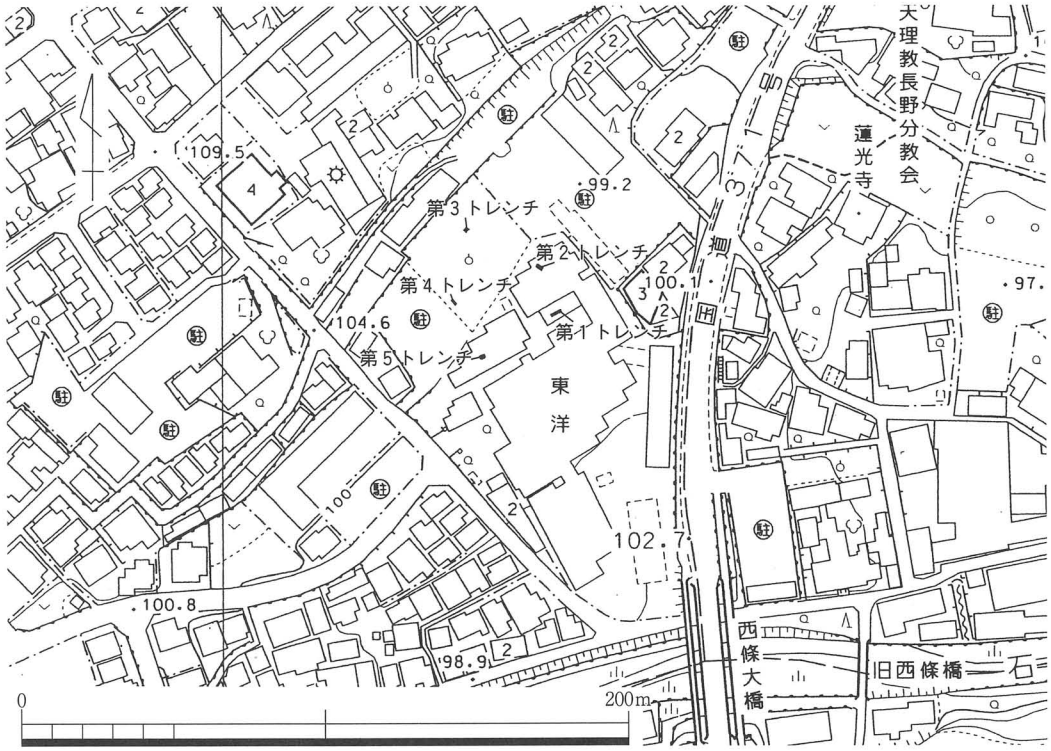
第４図　出土遺物実測図

４　まとめ

第５トレンチで検出した杭列と石組遺構は何らかの区画施設と思われるが、調査地が狭小であるためその性格は不明である。周囲も含めて今後の調査例の増加が待たれる。

（小林）

第２節　太白遺跡（ＴＨＫ04－1）



第５図　調査区位置図(1/2500)

1　概略

太白遺跡は石川左岸の氾濫原上に立地し、標高は100ｍを測る。遺跡に南接して石川が流れ、北西には段丘崖が迫り、その段丘上には栄町遺跡・錦町北遺跡・栄町東遺跡・栄町南遺跡が広がる。錦町北遺跡では弥生土器が出土したほか、中世の石組や近世の屋敷地が検出された。栄町南遺跡ではサヌカイトの剥片が出土したほか、中世の掘立柱建物が検出された。このように石川左岸の太白遺跡周辺では弥生時代と中世の集落遺跡が点在している。また東には京都と高野山を結ぶ高野街道が南北に走り、高野街道沿いに多くの遺跡が存在する。南接する石川の対岸には弥生時代から近世の複合遺跡である大日寺遺跡や中世の城館として著名な烏帽子形城跡が位置する。

調査地は比高約４ｍの段丘崖が北西側に迫っており、氾濫原の中でも最も河川から離れた場所に位置する。

調査地は周知の包蔵地の範囲外であったが、宅地造成に伴い若干の試験調査が実地された。その結果、若干の遺構・遺物が発見され、字名から新規発見遺跡「太白遺跡」と命名された。

2　調査の方法と層序

調査区はトレンチを５ヶ所設定した。調査の方法は包含層直上まで機械掘削を行ない、その後作業員による人力掘削、精査を行ったが遺構の検出には至らなかった。層序はトレンチごとに述べる。

3　調査の結果

・第１トレンチ

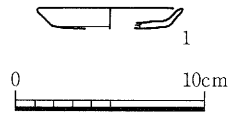
調査区は1.3m×５mのトレンチを設定した。基本層序は現地表から10ＹＲ５/２灰黄褐色細礫混じり細砂（層厚10cm）、10ＹＲ５/３にぶい黄褐色細礫混じり細砂（層厚10cm）、2.5Ｙ４/４オリーブ褐色細礫混じりシルト（層厚10cm）、10ＹＲ５/２灰黄褐色細砂混じり粗砂（地山）である。

遺構は検出しなかった。

遺物は瓦器、土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

・第２トレンチ（第６図、図版11）

調査区は2.5m×１mのトレンチを設定した。基本層序は現地表から10ＹＲ５/２灰黄褐色細礫混じり細砂（層厚20cm）、10ＹＲ５/３にぶい黄褐色細礫混じり細砂（層厚10cm）、10ＹＲ５/６黄褐色中砂混じり細砂（層厚15cm）、2.5Ｙ４/４オリーブ褐色細礫混じりシルト（層厚10cm）、2.5Ｙ４/３オリーブ褐色細礫混じりシルト（層厚10cm）、2.5Ｙ３/３暗オリーブ褐色細砂混じりシルト（層厚15cm）、10ＹＲ５/２灰黄褐色極細砂混じりシルト（地山）である。



第６図　出土遺物実測図

遺構は検出しなかった。

遺物は土師質皿（１）、土師質土器が出土した。

・第３トレンチ（図版１）

調査区は1.7m×1.5mのトレンチを設定した。基本層序は現地表から10ＹＲ３/８暗褐色中砂混じり細砂（層厚20cm）、10ＹＲ５/２灰黄褐色細礫混じり細砂（層厚10cm）、10ＹＲ５/３にぶい黄褐色細礫混じり細砂（層厚10cm）、2.5Ｙ４/４オリーブ褐色細礫混じりシルト（層厚15cm）、2.5Ｙ４/３オリーブ褐色細礫混じりシルト（層厚20cm）、2.5Ｙ３/３暗オリーブ褐色粗砂混じりシルト（層厚15cm）、10ＹＲ５/２灰黄褐色極細砂混じりシルト（地山）である。

遺構は検出しなかった。

遺物は瓦器、土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

・第４トレンチ

調査区は２ｍ×１ｍのトレンチを設定した。基本層序は現地表から10ＹＲ３/８暗褐色中砂混じり細砂（層厚15cm）、10ＹＲ５/２灰黄褐色細礫混じり細砂（層厚５cm）、10ＹＲ５/３にぶい黄褐色細礫混じり細砂（層厚20cm）、2.5Ｙ４/４オリーブ褐色中砂混じりシルト（層厚10cm）、2.5Ｙ３/３暗オリーブ褐色粗砂混じりシルト（層厚15cm）、10ＹＲ５/２灰黄褐色極細砂混じりシルト（地山）である。

遺構・遺物ともに検出しなかった。

・第５トレンチ

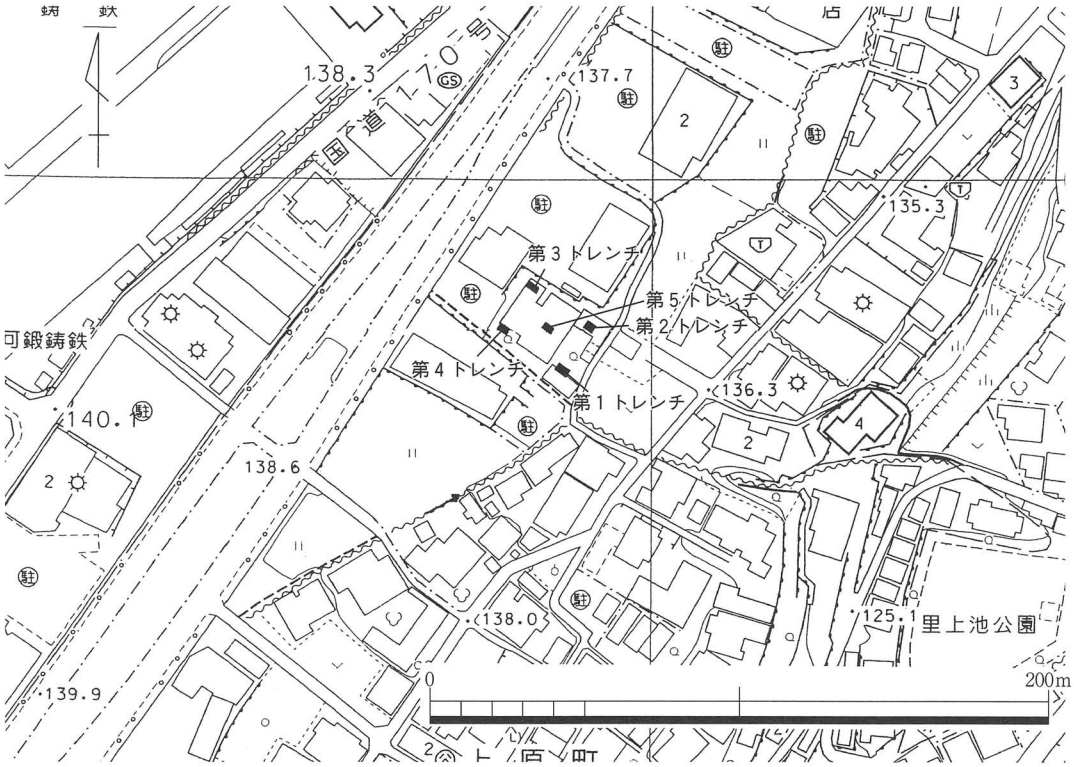
調査区は2.2ｍ×1.5ｍのトレンチを設定した。基本層序は現地表から盛土（層厚４0cm）、10ＹＲ５/２灰黄褐色細礫混じり細砂（層厚10cm）、10ＹＲ５/３にぶい黄褐色細礫混じり細砂（層厚10cm）、2.5Ｙ４/４オリーブ褐色細礫混じりシルト（層厚10cm）、2.5Ｙ５/６黄褐色細礫混じりシルト（層厚５cm）、10ＹＲ５/２灰黄褐色細砂混じり粗砂（地山）である。

遺構・遺物とも検出しなかった。

４　まとめ

今回の調査では遺構の検出に至らず、遺物もわずかであるため遺跡の詳細は不明であるが、包含層を確認し遺物が出土したことから、石川の氾濫原に広がる遺跡の存在が明らかになった。今後の調査例の増加が望まれる。　（小林）

第３節　上原中遺跡（ＵＨＮ05－１）



第７図　調査区位置図(1/2500)

１　概略

上原中遺跡は石川左岸の中位段丘上に立地し、標高は137ｍを測る。北側に位置する上原北遺跡では木炭窯を伴った中世の集落遺構が検出され、農耕以外の生業をもった集落であったことが明らかになっている。南には上原遺跡、上原東遺跡が広がる。上原遺跡では旧石器時代のナイフ形石器や、縄文土器が出土したほか、中世の掘立柱建物や井戸が検出され西側の長池窯跡群とあわせて中世の集落の存在が想定されている。

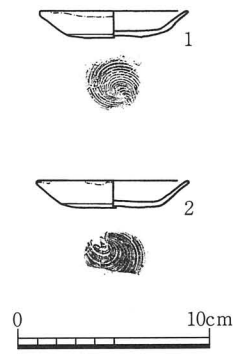
本調査は店舗建設に先立ち実施した。調査は建物の基礎工事の切土の影響を受けるかどうかを確認するため、確認調査坑を設定した。

２　調査の方法と層序

調査区は長辺約２ｍ×短辺約１ｍのトレンチを５ヶ所設定した。調査地は既存建物の基礎により大きく攪乱を受けていたため、地山面上面まで機械掘削し、その後精査を行なったが、遺構は検出し得なかった。基本層序は現地表から盛土（層厚20cm）、褐灰色シルト（層厚10cm）、淡褐色シルト（層厚20cm）、にぶい黄橙色細砂混じりシルト（地山）である。

3　調査の結果（第８図、図版９）

遺構は検出し得なかったが、第１トレンチの盛土中から土師質皿（１・２）が出土した。２点とも内面には柿釉を施釉し、底部外面には糸切り痕が見られる。

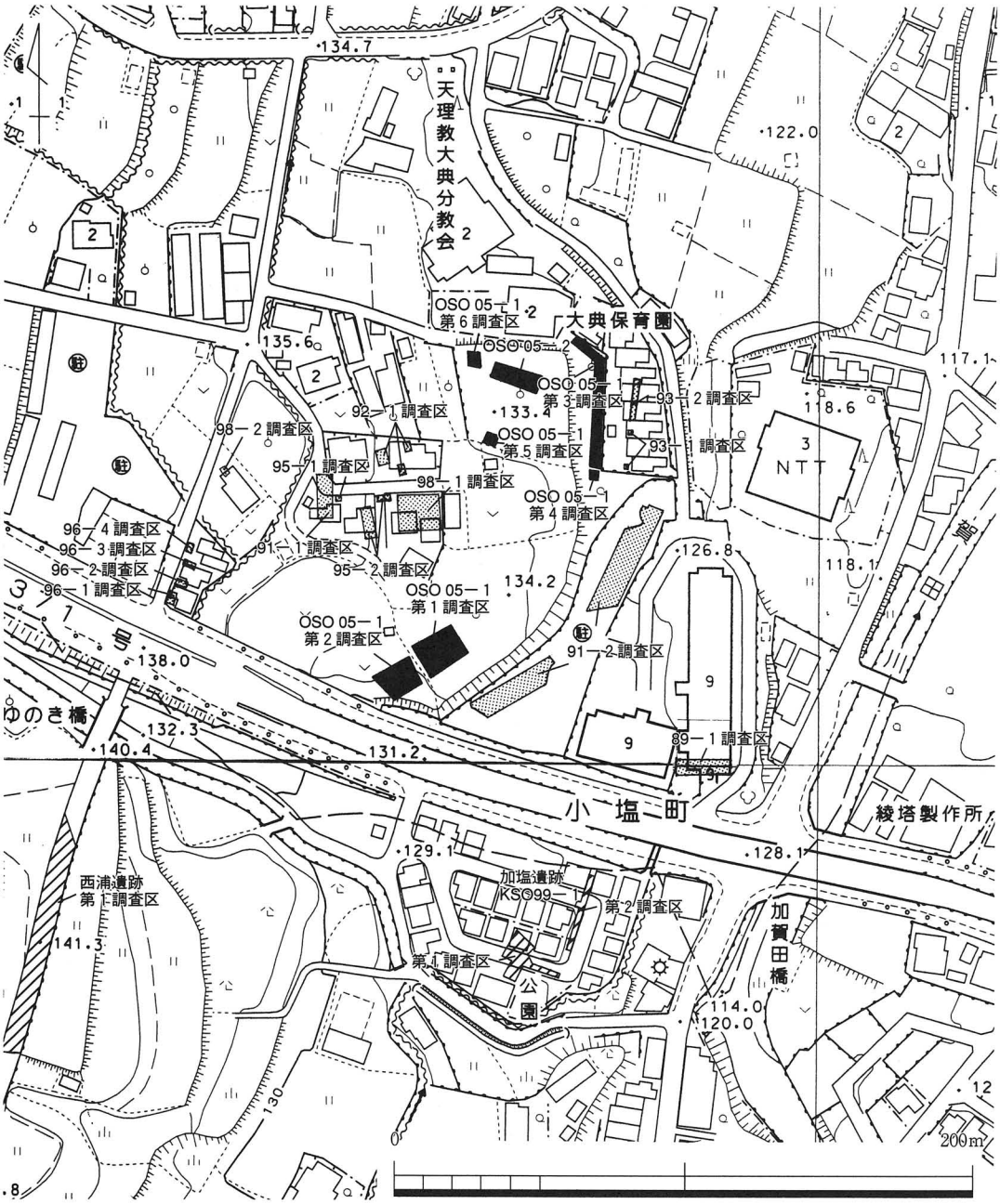


第８図　出土遺物実測図

4　まとめ

今回の調査では既存建物の攪乱を大きく受けていたため盛土中から土師質皿が出土したのみであり、遺跡の詳細は不明である。だが当遺跡の周囲には中世の集落遺跡が広がっており、周囲の遺跡も含めて今後の調査例の増加が望まれる。　（小林）

第４節　小塩遺跡（ＯＳＯ05－２）



第９図　調査区位置図(1/2500)

１　位置と環境

小塩遺跡は加賀田川と天見川合流地点の左岸、河岸段丘上に立地し、標高は120mを測る。

調査地付近は西から東に向かって緩やかに傾斜し、調査地の東は比高約16mの段丘崖をもって加賀田川の氾濫原へと続く。すなわち今回の調査地は加賀田川を見下ろす段丘の縁

辺部に立地する。

本遺跡の南側には谷が東西にのびており、その谷筋に沿って国道371号線が走っている。その谷を挟んだ南側には加塩遺跡と西浦遺跡が広がる。加塩遺跡では古墳時代の竪穴住居1棟と掘立柱建物3棟が検出され、竪穴住居から掘立柱建物に移行する過渡期の様相が確認された。また土師器の焼成窯とみられる遺構も検出された。西浦遺跡では古墳時代末から飛鳥時代の掘立柱建物が8棟検出されている。このように小塩遺跡周辺では段丘の縁辺に沿う形で古墳時代から飛鳥時代の集落が広がっていたことが明らかになっている。

また加賀田川を挟んで対岸には古墳時代から中世の集落である尾崎北遺跡、平安時代の大型建物が検出された尾崎遺跡、中世の城郭の関連遺跡とみられるジョウノマエ遺跡、掘立柱建物とともに中世の瓦が多量に出土した加賀田神社遺跡など多くの遺跡が点在する。

2　遺跡の概要

当遺跡ではマンションや住宅建設に伴って発掘調査が実施され、小規模な調査ではあるが、調査成果が蓄積されている。その結果、古墳時代の遺構・遺物を中心に縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなっている。以下、時代ごとに特記すべき成果について記す。

縄文時代

98－1調査区では土坑やピット内から縄文時代早期の高山寺式とみられる押型文土器が出土している。

91－2調査区では崩落土から縄文時代早期の押型文土器が出土している。

古墳時代

89－1調査区では竪穴住居が1棟検出された。辺の残存長4m、平面プランが方形の住居である。竪穴住居の南側では2間×2間の総柱の掘立柱建物が検出された。この建物は柱の配置から倉庫の可能性が高い。これらの住居や建物は出土遺物から6世紀後半代と考えられる。

91－2調査区では滑石製の子持勾玉が出土している。

飛鳥・奈良時代

98－2調査区では方形の掘形をもつ柱穴が検出された。また円面硯が出土しており、何らかの公的施設であった可能性が指摘されている。出土遺物から8世紀代と考えられる。

中世

89－1調査区では南北に走る溝が検出された。包含層からは瓦器の他、青磁や白磁も出土している。

今年度の調査地は当遺跡の中心部にあたり、押型文土器が出土した98－1調査区と子持勾玉が出土した91－2調査区に挟まれた位置にあたる。

3　調査に至る経緯

本調査は小塩町366－１番地が宅地造成されることになり、原因者から市教育委員会に事前協議があった。市教育委員会は当該地が周知の遺跡、小塩遺跡の範囲に該当するため遺構の存在が予想され、予備調査を実施した。その結果、遺構・遺物が確認され、原因者と埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、切土範囲（約500㎡）については記録保存を実施することになり、市教育委員会が調査を実施することになった。平成17年9月1日から平成17年10月７日まで調査を実施した（ＯＳＯ05－１）。

その結果、古墳時代、飛鳥・奈良時代の遺構が広範囲で認められたため、さらに国庫補助により約85㎡で遺物包含層及び遺構面の広がりを確認することを目的として調査を行なった（ＯＳＯ05－２）。本報告では国庫補助により実施した05－２調査区の調査結果を主として報告を行なう。

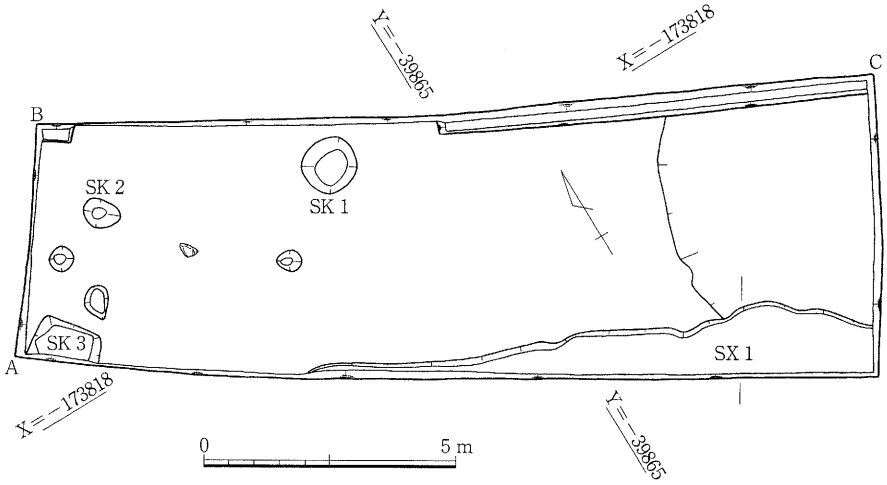
4　調査の方法と層序

調査区は長辺17m×短辺５mのトレンチを設定した。

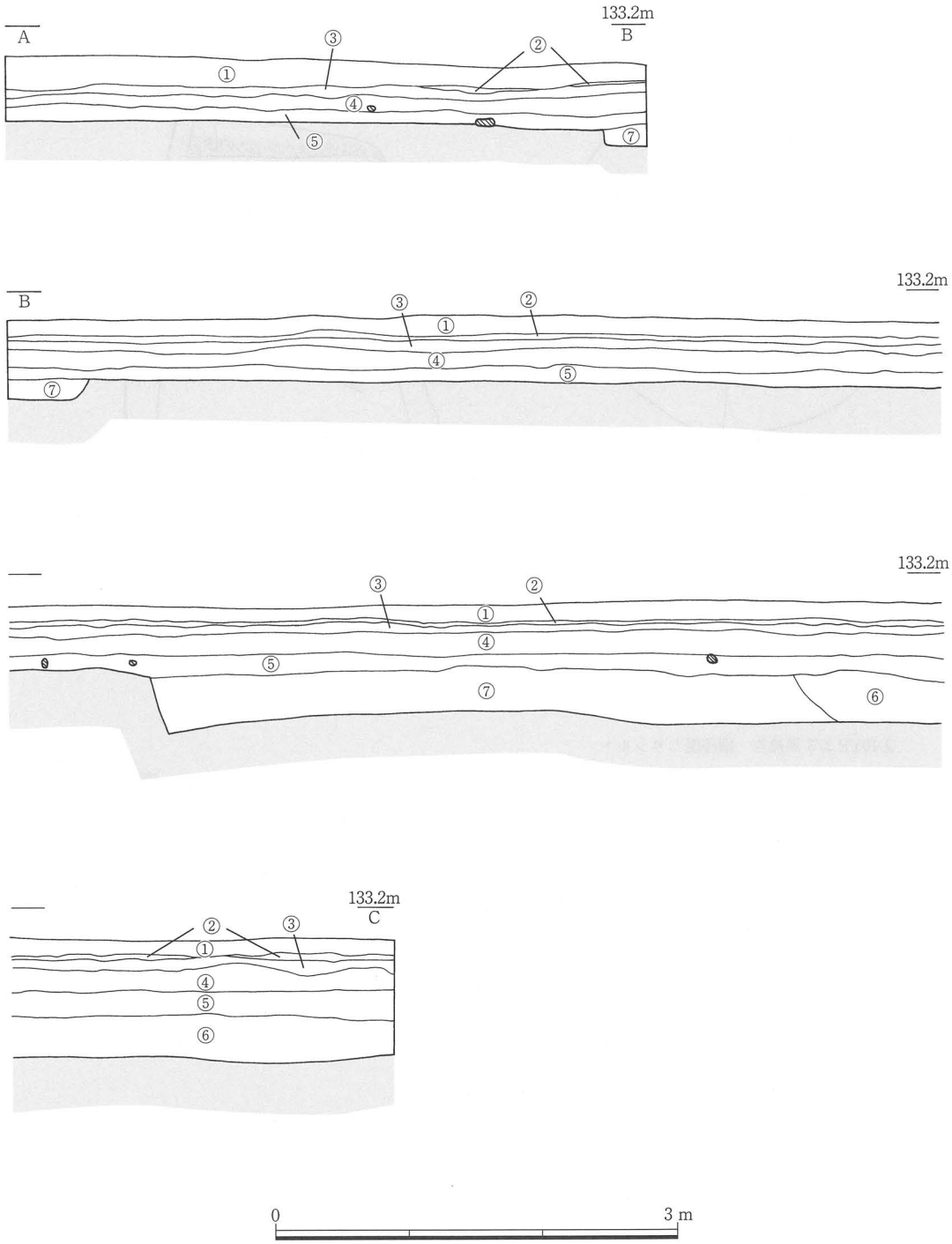
調査の方法は、近代の盛土、旧耕土、旧床土を機械掘削し、その後古墳時代の遺物包含層を人力掘削、精査を行なった。

基本層序は１層（旧耕土）2.5Ｙ６/２灰黄色粗砂混じりシルト、２層（旧耕土）2.5Ｙ７/３浅黄色粗砂混じりシルト、３層（旧床土）2.5Ｙ７/３浅黄色シルト、４層（堆積層）10ＹＲ７/２にぶい黄橙色粗砂混じりシルト、５層（遺物包含層）10ＹＲ５/２灰黄褐色細砂混じりシルト、６層（遺物包含層）2.5Ｙ５/２暗灰黄色細砂混じりシルト、７層（地山）10ＹＲ６/８明黄褐色細砂である。

本調査区は遺物包含層が２層あったため６層上面で遺構面の検出を行ない、古墳時代の遺構・遺物を検出した。さらに下層を確認するため、調査区北東部でトレンチ調査を行なった結果、地山上面で遺構面を検出し、遺構面が２面あることを確認した。

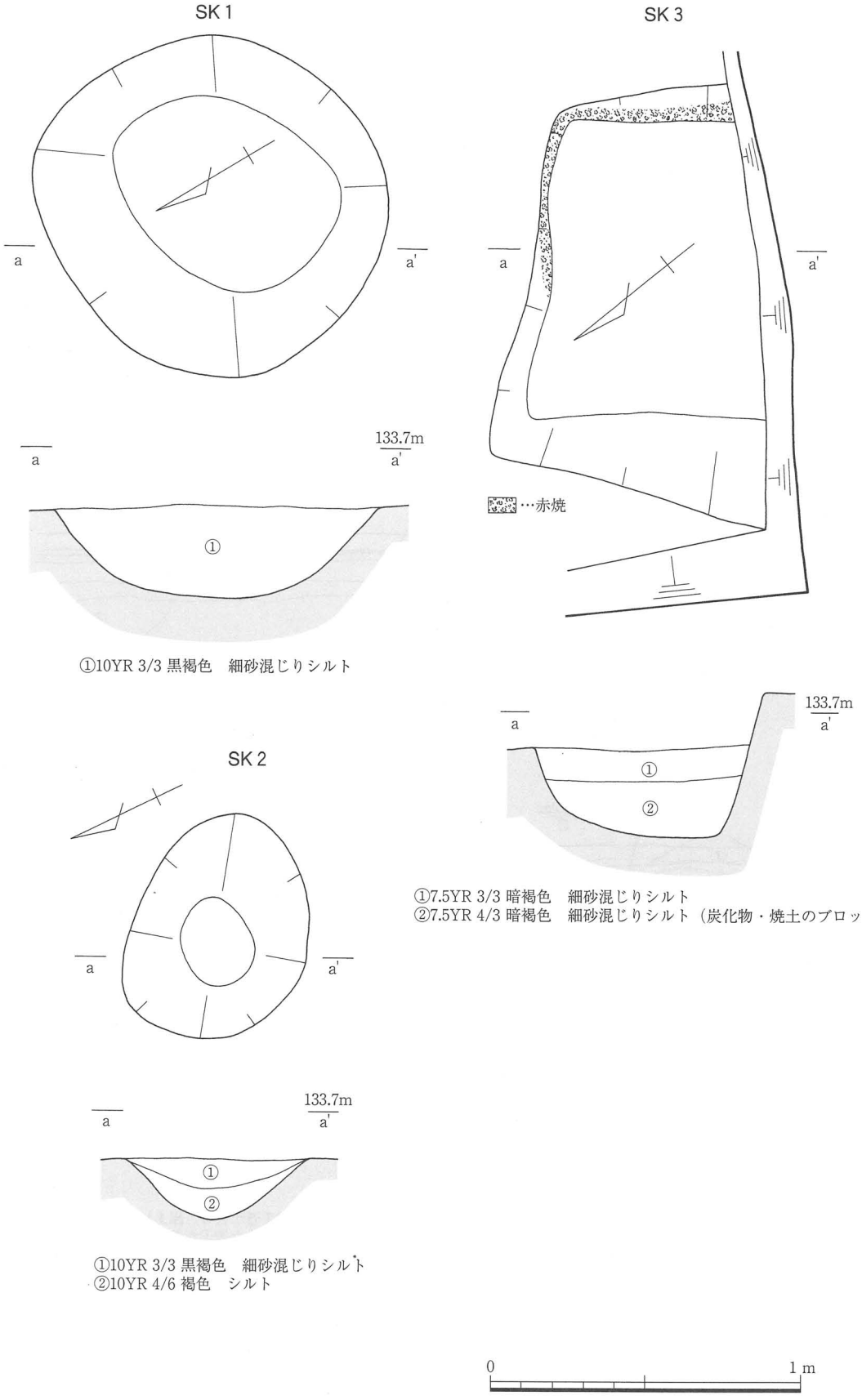


第10図　遺構配置図(1/150)



①2.5YR 6/2 灰黄色　　粗砂混じりシルト（耕土）
②2.5Y　7/3 浅黄色　　粗砂混じりシルト（耕土）
③2.5Y　7/3 浅黄色　　粗砂混じりシルト（マンガン・炭化物を若干含む、床土）
④10YR 7/2 にぶい黄橙色　粗砂混じりシルト（マンガン・炭化物を若干含む）
⑤10YR 5/2 灰黄褐色　細礫混じりシルト（炭化物を多く含む）
⑥7.5YR 4/3 褐色　　細礫混じりシルト（マンガン・炭化物・焼土を含む）
⑦2.5YR 5/2 暗灰黄色　細礫混じりシルト（炭化物を多く含む）

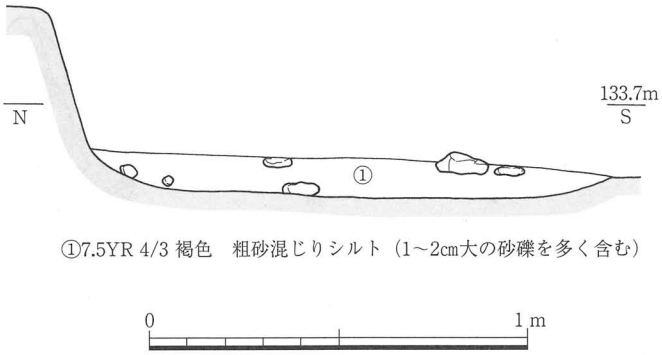
第11図　土層断面実測図(1/50)



第12図　ＳＫ１・２・３遺構実測図(1/20)

5　調査の結果（図版１）

調査区は西から東に向かい緩やかに傾斜し、壁面が焼けた土坑などが検出された。



第13図　ＳＸ１遺構実測図(1/20)

（１）土坑

［ＳＫ１］（第12・15図、図版13）

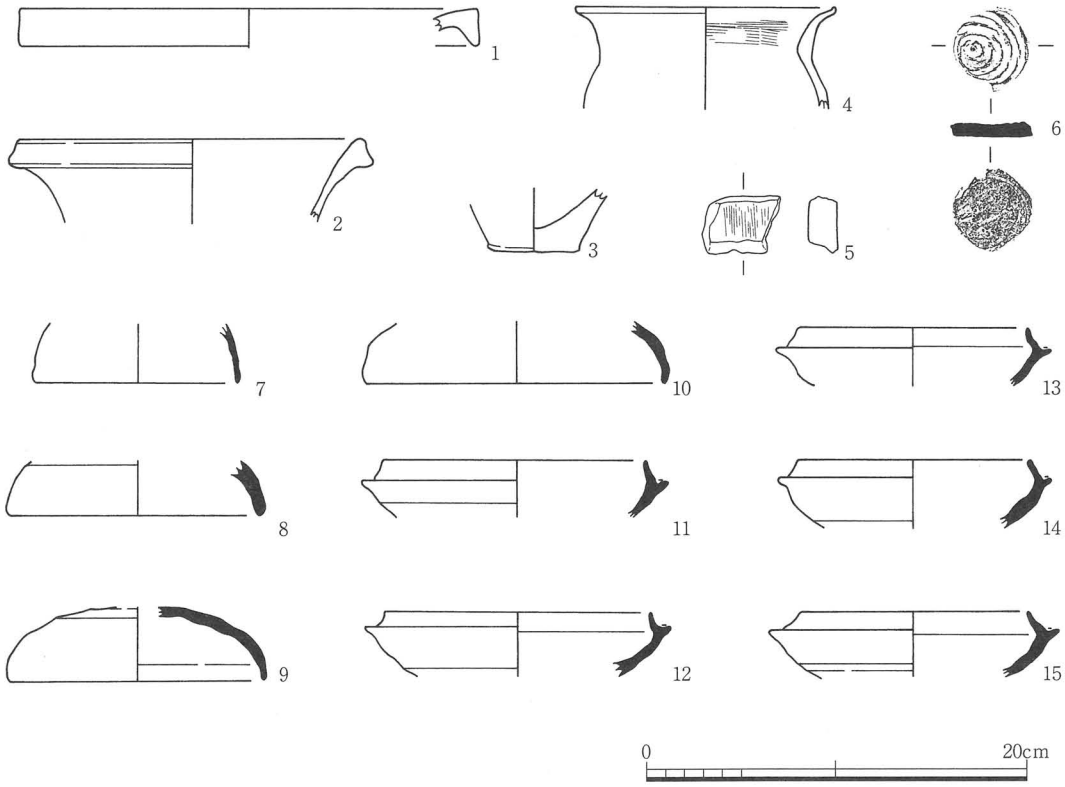
調査区の中央部北側で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、遺構の規模は長軸1.14ｍ、短軸1.10m、深さ0.30mを測る。主軸方向はN―33°―Eである。

遺物はサヌカイト製の削器（19）、須恵器甕が出土した。

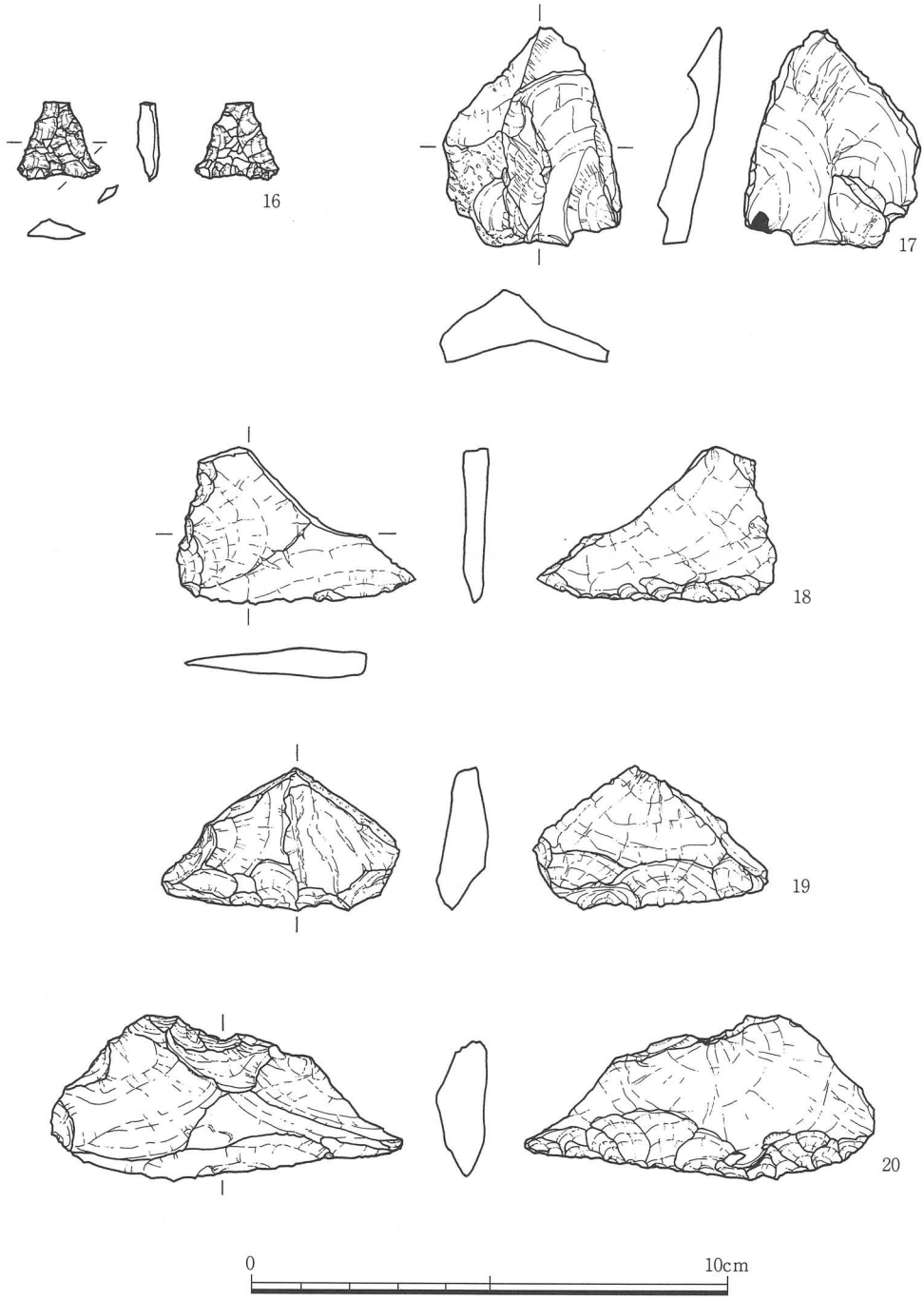
［ＳＫ２］（第12図）

調査区の西端で検出された。平面形は楕円形を呈し、遺構の規模は長軸0.73m、短軸0.57m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN―55°―Wである。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。



第14図　出土遺物実測図



第15図　出土遺物実測図

［ＳＫ３］（第12・15図、図版13）

調査区の南西隅で検出された。南側は調査区外へ続くが平面形は方形に近いと推定される。

遺構の規模は長軸1.28m、残存短軸0.71m、深さ0.27mを測る。主軸方向はN―40°―Wである。東側の壁が赤く焼けており、埋土にも酸化焔で焼かれた明褐色の焼土や炭が多く含まれていた。

遺物はサヌカイトの石核（17）、須恵器甕が出土した。

（2）落ち込み

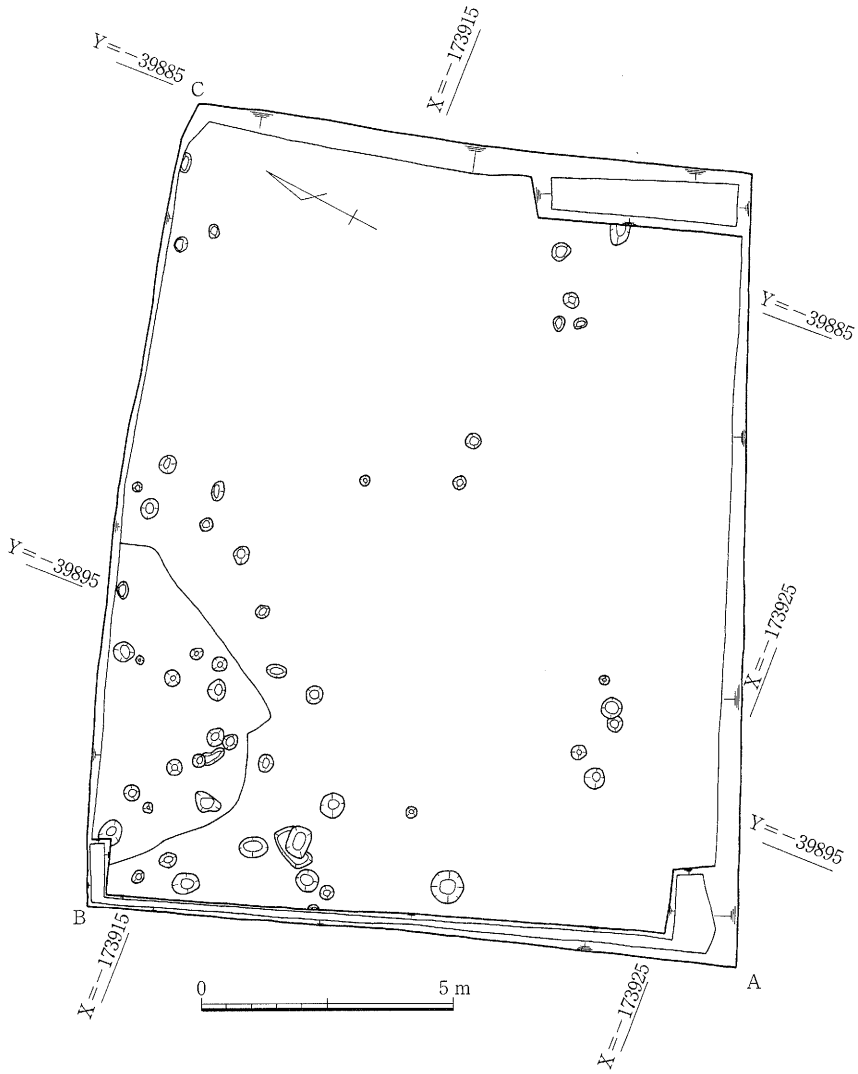
［ＳＸ１］

調査区の南端で検出され、東側と南側は調査区外へと続く。遺構の規模は検出長11.00m、検出幅0.20～1.40m、深さ0.10mを測る。

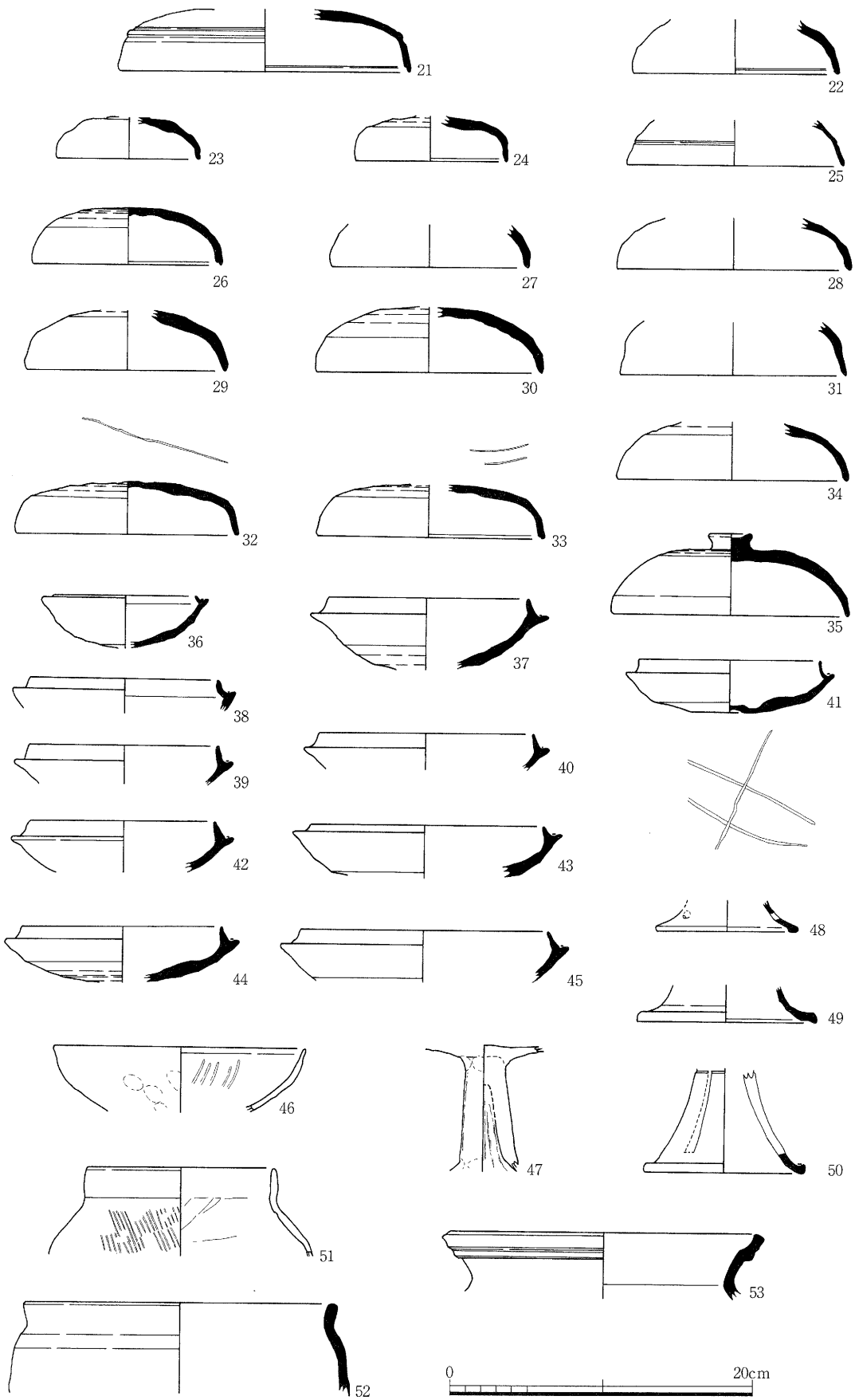
遺物は須恵器、土師器、サヌカイトが出土したが細片のため図化できなかった。

（3）包含層（第14・15図、図版９・11・13）

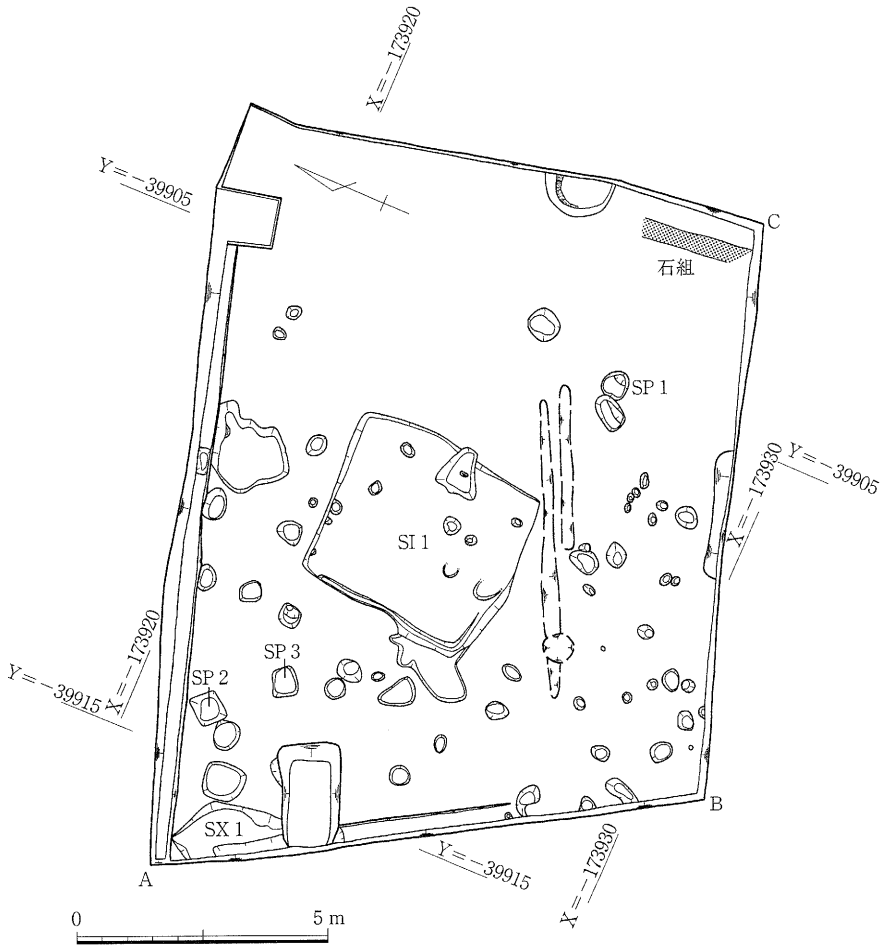
包含層からは弥生土器（１～３）、土師器甕（４）、形象埴輪（５）、須恵器転用円盤（６）、須恵器坏蓋（７～10）、須恵器坏身（11～15）、サヌカイト製の石鏃（16）、サヌカイト製の削器（18・20）、青磁碗、縄文土器が出土した。須恵器（７～15）は陶邑編年Ⅱ型式３～５段階に相当すると考えられる。



第16図　第１調査区　遺構配置図(1/150)



第17図　第１調査区　出土遺物実測図



第18図　第２調査区　遺構配置図(1/150)

6　周辺の調査

ここでは05－２調査区の調査に先立って実施された05－１調査区の調査結果について概観する。

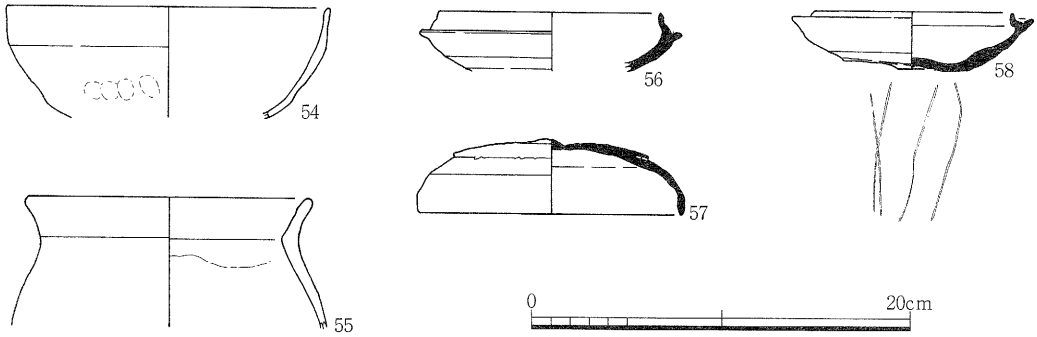
・第１調査区（第16・17図、図版２・９・10・12）

調査区は長辺16m×短辺13mのトレンチを設定した。遺構面はＧＬ－0.30mの地山面上で検出した。遺構面の標高はＡ地点が133.20m、Ｂ地点が133.30m、Ｃ地点が133.34ｍである。基本層序は１層（旧耕土）10ＹＲ７/２にぶい黄橙色粗砂混じり細砂、２層（旧床土）10ＹＲ７/４にぶい黄橙色細砂、３層（遺物包含層）10ＹＲ７/４褐色粗砂混じり細砂、４層（地山）10ＹＲ５/８黄褐色シルト混じり細砂である。

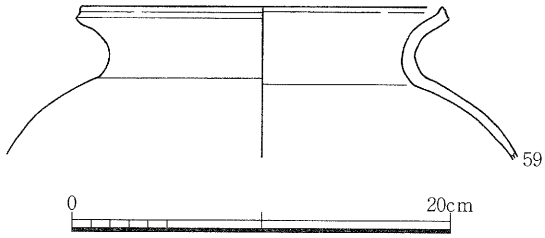
遺構面からは、古墳時代の遺構、遺物を検出した。

遺構は調査区北西部に集中し、包含層の遺物の出土傾向も同様であった。一方、南東部は遺構・遺物が希薄であり、後世に削平された可能性が考えられる。

包含層から須恵器坏蓋（21～34）、有蓋高坏蓋（35）、須恵器坏身（36～45）、土師器高坏（46・47）、須恵器高坏（48～50）、土師器甕（51）、須恵器甕（52・53）、瓦器、磁器、陶器、サヌカイトが出土した。須恵器坏蓋（21）は天井部と口縁部の境ににぶい稜



第19図　第２調査区　ＳＩ１出土遺物実測図



第20図　第２調査区　ＳＰ１出土遺物実測図

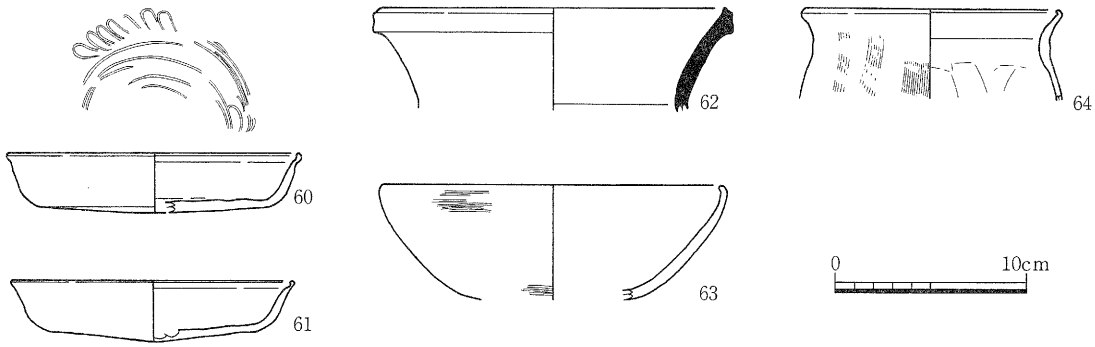
をもち大型の坏蓋である。一方、須恵器坏蓋（23）の天井部はヘラ切り未調整で新しい様相を示す。従って全体的に須恵器は陶邑編年Ⅱ型式３～５段階に相当すると考えられる。

・第２調査区（第18～22図、図版２・10・13）

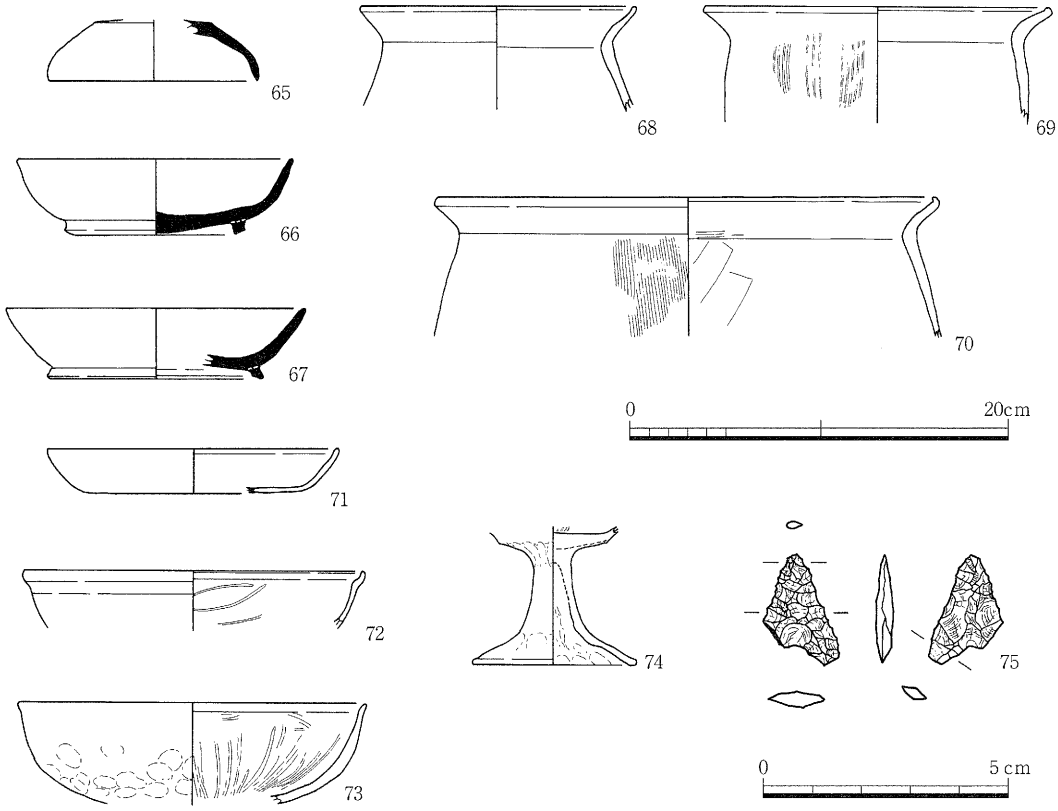
調査区は長辺15m×短辺11mのトレンチを設定した。遺構面はＧＬ－0.40mの地山面上で検出した。遺構面の標高はＡ地点が132.98m、Ｂ地点が132.66m、Ｃ地点が132.62mである。基本層序は１層（旧耕土）2.5Ｙ５/３黄褐色細砂、２層（旧床土）10ＹＲ６/３にぶい黄橙色細砂、３層（遺物包含層）2.5Ｙ６/４にぶい黄橙色細砂、４層（地山）10ＹＲ６/８明黄褐色細砂である。

遺構面からは、古墳時代、飛鳥・奈良時代、近世の遺構、遺物を検出した。

古墳時代の遺構としては竪穴住居、ピット、土坑が検出された。竪穴住居（ＳＩ１）は方形の平面プランを呈しており、規模は一辺約４ｍであった。遺存状況は悪く、床面から10cm程度残っていた。東辺にある焼土坑はカマドの残存遺構と思われる。遺物は土師器椀（54）、土師器甕（55）、須恵器坏身（56・58）、須恵器坏蓋（57）が出土した。土師器椀（54）は住居内南側の床面に貼りついた状態で出土した。須恵器は陶邑編年Ⅱ型式４段階に相当すると考えられる。



第21図　第２調査区　ＳＸ１出土遺物実測図



第22図　第２調査区　包含層出土遺物実測図

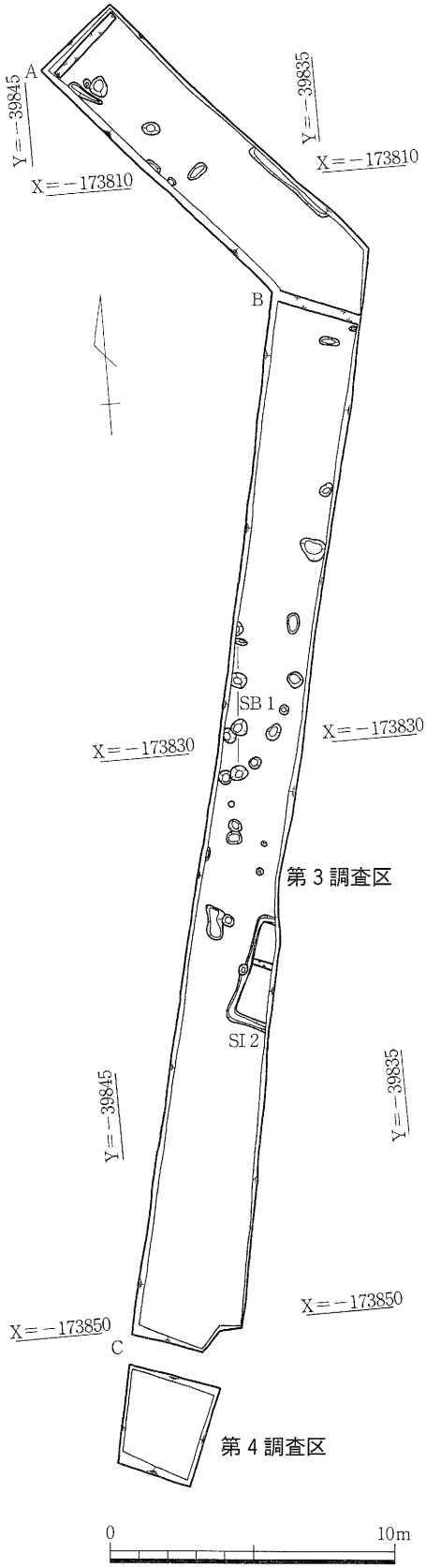
飛鳥・奈良時代の遺構としては、調査区北西端で落ち込み状の遺構（ＳＸ１）を検出した。調査区外へ続いていく様相であった。遺物は土師器皿（60・61）、須恵器壺（62）、土師器坏（63）、土師器甕（６４）が出土した。土師器皿（60・61）は平城Ⅲ型式に相当すると考えられる。柱穴（ＳＰ１）からは口縁を下にした状態で土師器甕（59）が出土した。ＳＰ２・３は堀形の平面形が方形を呈する大型の柱穴である。

近世の遺構としては、調査区南東隅で埋桶と石組を検出した。どちらも耕作用施設と考えられる。

包含層からは須恵器坏蓋（65）、須恵器坏（66・67）、土師器甕（68～70）、土師器皿（71・72）、土師器坏（73）、土師器高坏（７４）、チャート製の石鏃（75）、須恵器甕、土師器羽釜、黒色土器、瓦器椀、サヌカイトが出土した。須恵器、土師器は飛鳥Ⅱ～平城Ⅲ型式に相当すると考えられる。

・第３調査区（第23・24図、図版３・10・13）

調査区は長辺４０m×短辺４ｍのトレンチと長辺12m×短辺４ｍのトレンチをくの字につなぐ形で設定した。遺構面は北側でＧＬ－1.00m、南側でＧＬ－0.50mの地山面上で検出した。遺構面の標高はＡ地点が132.74m、Ｂ地点が132.78m、Ｃ地点が133.40mである。基本層序は１層（旧耕土）10ＹＲ５/３にぶい黄褐色細砂、２層（旧床土）10ＹＲ７/３に



第23図　第3・4調査区　遺構配置図(1/250)

ぶい黄褐色細砂、3層（堆積層）10ＹＲ7/2にぶい黄橙色細砂、4層（遺物包含層）10ＹＲ6/8明黄褐色細砂、5層（地山）7.5ＹＲ4/6褐色シルトである。

遺構面からは、古墳時代の遺構、遺物を検出した。

古墳時代の遺構としては竪穴住居、掘立柱建物、土坑が検出された。竪穴住居（ＳＩ２）は西半部を検出したのみであるが、方形の平面プランを呈し規模は一辺約4ｍであった。遺存状況は悪く、床面から10cm程度残すのみであった。掘立柱建物（ＳＢ１）は検出規模は3間以上、柱穴の平面形は不定円形であり、柱間は1.5～1.8ｍを測る。調査区は北に向かって地山が傾斜しており、北端と南端では比高差が60cmに及び、標高が高い南半部は遺構が希薄であった。

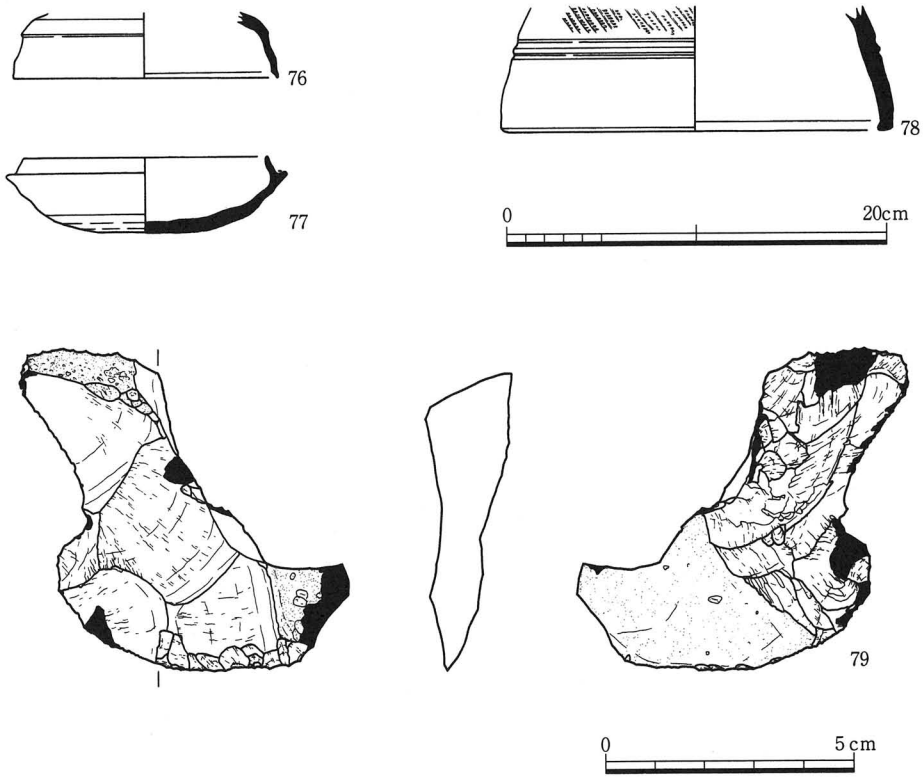
包含層から須恵器坏蓋（76）、須恵器坏身（77）、須恵器器台（78）、サヌカイト製の削器（79）、土師器、瓦器、陶器が出土した。須恵器は陶邑編年Ⅱ型式2～4段階に相当すると考えられる。

・第4調査区（第23図）

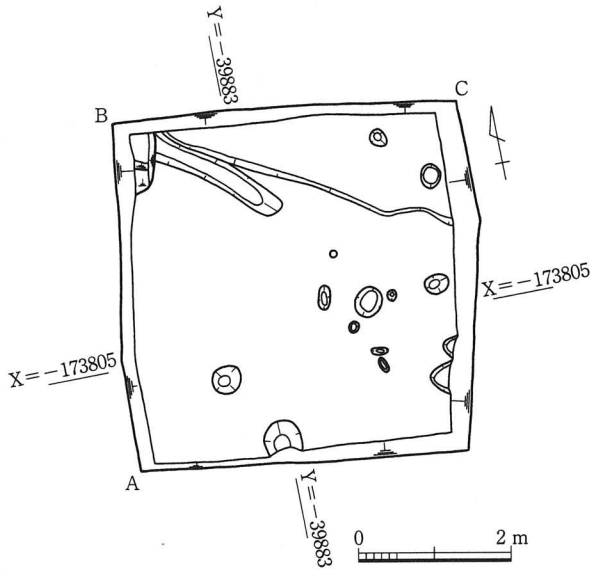
調査区は3ｍ×3ｍのトレンチを設定した。表土直下で地山を検出し、遺構・遺物は検出できなかった。

・第5調査区（第25・27図、図版4・13）

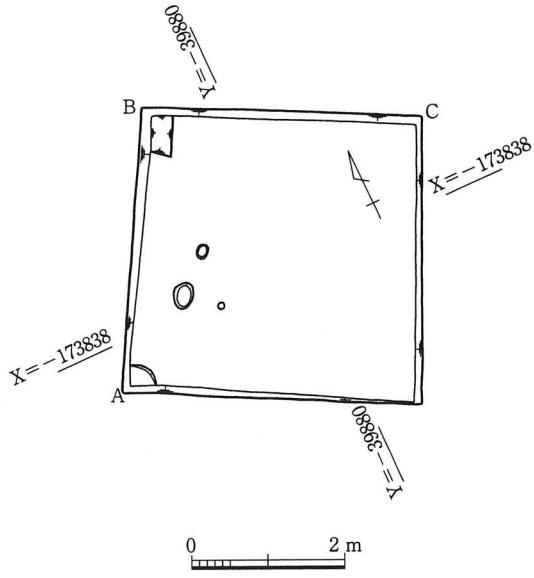
調査区は長辺5ｍ×短辺4ｍのトレンチを設定した。遺構面はＧＬ－0.40ｍの地山面上で検出した。遺構面の標高はＡ地点が133.60ｍ、Ｂ地点が133.50ｍ、Ｃ地点が133.40ｍである。基本層序は1層



第24図　第３調査区　出土遺物実測図



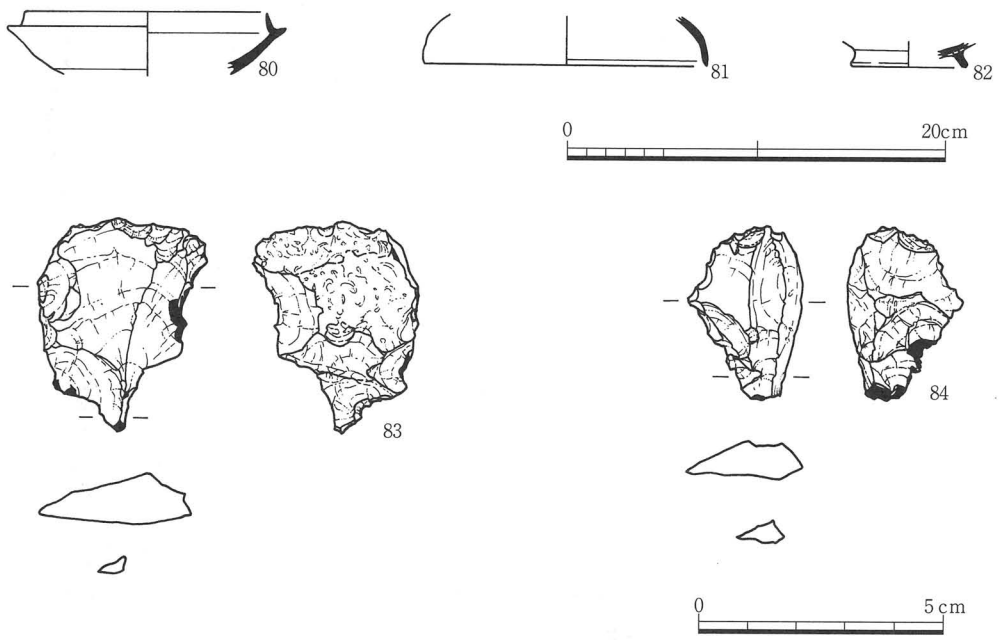
第25図　第５調査区　遺構配置図(1/100)



第26図　第６調査区　遺構配置図(1/100)

(旧耕土) 10ＹＲ５/２灰黄褐色シルト、２層（床土）10ＹＲ５/６黄褐色粗砂混じり中砂、３層（遺物包含層）10ＹＲ４/６褐色粗砂混じりシルト、４層（遺物包含層）7.5ＹＲ７/４にぶい橙色シルト、５層（地山）10ＹＲ５/８黄褐色粗砂混じり粘土である。

遺構面からは、古墳時代の遺構、遺物を検出した。



第27図　第５調査区　出土遺物実測図

包含層から須恵器坏身(80)、須恵器坏蓋(81)、瓦器埦(82)、サヌカイト製の石錐（83・84)、土師器が出土した。須恵器は陶邑編年Ⅱ型式３～４段階に相当すると考えられる。

・第６調査区（第26図、図版４）

調査区は４ｍ×４ｍのトレンチを設定した。遺構面はＧＬ－0.40mの地山面上で検出した。遺構面の標高はＡ地点が133.93m、Ｂ地点が133.92m、Ｃ地点が133.85mである。基本層序は１層（旧耕土）10ＹＲ５/２灰黄褐色シルト、２層（旧耕土）2.5Ｙ５/２暗灰黄色粗砂混じりシルト、３層（床土）10ＹＲ７/２にぶい黄橙色粗砂混じりシルト、４層（遺物包含層）7.5ＹＲ７/４にぶい橙色シルト、５層（地山）10ＹＲ５/８黄褐色粗砂混じり粘土である。

遺構面からは、古墳時代の柱穴を検出した。

包含層から須恵器、土師器、瓦器、サヌカイトが出土したが、細片のため図化できなかった。

７　まとめ

今回の調査では、縄文～飛鳥・奈良時代と中世の遺構・遺物が検出でき、広範囲にわたって遺物包含層及び遺構面が存在することが明らかになった。特に05－１第２調査区や第３調査区は遺構の保存状況が良好であり、竪穴住居やピット、土坑などが検出できた。これは周辺の調査結果とも符合し、古墳～飛鳥・奈良時代の集落が広範囲にわたって存在したことを改めて裏付けることとなった。一方、他の調査区より１段高い面にある第１調査区では地山上面まで浅く、遺構が希薄であった。しかし包含層から残存状態が良好な遺物

がまとまって出土していることから、遺構が存在しなかったのではなく第１調査区が立地する面が全体的に削平された可能性が高い。以下、時代ごとに調査成果を概観し、若干の検討を行なう。

縄文時代

遺構は検出しなかったが、05－２調査区において縄文土器が出土した。いずれも細片でかつ表面の摩滅が著しいため所属時期などは不明であるが、胎土・焼成からみて縄文土器と思われる。また同じく05－２調査区から出土したチャート製の石鏃は縄文中期末と考えられる（註１）。この他、図化できなかったがサヌカイトの剥片が57点出土しており、土器の出土量に対して石器の出土量が多い点が指摘できる。05－２調査区では上層の遺構面の調査にとどまり、下層の地山上面の遺構面は調査していないため、縄文時代の遺構の様相は不明である。しかし05－２調査区の西側には高山寺式の縄文土器が出土した98－１調査区が位置し、東側の段丘崖下の91－２調査区では段丘崖の崩落土の中から縄文土器が出土していることから、今回の調査地付近に縄文時代の集落が存在した可能性が考えられる。

弥生時代

今回の調査では05－２調査からのみ弥生土器が出土した。今までの調査においても弥生土器は98－１区から出土したのみであり、全体的に希薄である。

古墳時代

古墳時代は当遺跡において遺構・遺物量ともに最も増加する時期にあたり、今回の調査でも古墳時代の遺物量が最も多かった。主な遺構としては05－１第２・３調査区で検出した竪穴住居と掘立柱建物があげられる。竪穴住居はいずれも一辺４ｍの方形であり、従来の調査で検出された竪穴住居と大差はない。所属時期もＳＩ２は不明であるが、ＳＩ１は６世紀後半であり従来のものとほぼ同時期である。したがって南接する加塩遺跡・西浦遺跡とあわせて広範囲に古墳時代の集落が存在したことが明らかになった。

また05－２調査区において形象埴輪の破片が出土したことから、調査地周辺に古墳が存在した可能性が高い。

さらに05－２調査区において検出したＳＫ１は壁面が焼けており、このような土坑は河内長野市内の遺跡では検出例が多く、土師器焼成遺構や木炭窯と考えられている。南側の加塩遺跡においても同様の遺構が検出されているが、小塩遺跡での検出は始めてである。

奈良時代

奈良時代の遺物は05－１第２調査区から出土している。特に調査区北西隅のＳＸ１からまとまって出土しており、包含層の奈良時代の遺物も北西部からの出土が多かった。また

ＳＸ１の東側にあるＳＰ２・３は掘形の平面形が方形を呈する大型の柱穴であり奈良時代の遺構と考えられる。

他の調査区では奈良時代の遺物の出土が希薄であったことや、奈良時代の硯が出土し方形掘形をもつ柱穴を検出したことから何らかの公的施設の存在が想定される98－２調査区や出土遺物の大半が７世紀前半から８世紀中頃の遺物で占められていた96－１・３・４調査区が第２調査区の北西方向に位置することから、98－２調査区と第２調査区の間に奈良時代の何らかの施設が存在した可能性が指摘できる。

今回の調査では縄文時代から奈良時代にかけて従来の調査成果を裏付ける結果をえることができた。当遺跡は今後、宅地開発が行なわれる可能性が高い地域であり、調査の積み重ねによって遺跡の様相が明らかにされると考えられる。　（小林）

註１　石器に関しては酒井祐介氏よりご教示をいただいた。

第５節　烏帽子形城跡（ＥＢＳ０５－４）

１　位置と環境

烏帽子形城跡は、市内南部に位置する金剛・葛城山系より北方向に派生する烏帽子形山の山頂部に位置する。烏帽子形山の標高は、182mであり、それほど高くはないが、部分的に急な斜面を有する腰高い丘陵であり、市内を一望することができる。烏帽子形山の西側は石川が南西から北東へ向かって流れており、東側は天見川が蛇行しながら南から北へ流れている。両河川は、烏帽子形山の北東300mで合流している。したがって、南側を除いた東・西・北の３方向は、これらの河川に囲まれている。

烏帽子形城跡の東側裾部には、高野街道が南北に走っている。高野街道は烏帽子形城跡の北１kmの地点で、東高野街道と西高野街道が合流し一本化した後、この城跡に向かって一度、西方向に折れた後、東方向に再び折れて、烏帽子形城跡の南500mにある近世に宿場町として栄えた三日市宿跡へ至る。その後は、国境の紀見峠を越えて紀伊へ至る。
烏帽子形城跡の西山麓には和泉街道が走っており、両街道を押さえる交通の要衝に位置しているといえる。

周囲には、北方向に、栄町遺跡、栄町東遺跡、北東方向に大日寺遺跡、東方向に喜多町遺跡、南東方向に上田町遺跡が、西方向にはやや離れるものの上原東遺跡が位置している。南方向には小塩遺跡が位置している。

栄町遺跡・栄町東遺跡は、弥生時代・中世の遺物散布地であり、その性格については不明な点が多い。大日寺遺跡は、これまでの調査で、弥生時代の溝、古墳、中世の墓、建物跡などが検出されている。平成11年度の調査で検出した中世の墓からは、多くの12～13世紀にかけての貿易陶磁が出土している。喜多町遺跡は古墳時代の集落遺跡であり、中世の遺構・遺物も若干検出されているが、内容には不明な点が多い。上田町遺跡は、古墳時代・中世の遺物散布地であるが、遺跡の性格には不明な点が多い。上原北遺跡は、中世の集落遺跡であり、平成６年と平成12年の調査によって、１４～15世紀にかけての掘立柱建物跡群、炭焼窯群などが検出されている。居住域と手工業生産域が一体となって位置しており、当時の集落の様相を窺う上で重要である。小塩遺跡は縄文～奈良時代の複合遺跡であり、古墳時代後期の集落遺跡が検出されている。

なお、烏帽子形城跡の北東１kmの天見川の対岸には、河合寺城跡が、北東４kmには金胎寺城が位置している。

2　遺跡の概要

烏帽子形城跡は、「高低差のある堀・土塁を効果的に配置し」、主郭と腰郭を一体的に防御する点が特徴としてあげられている（河内長野市教委2001）。城域は、東西200m、南北150mの規模を有する。

最高所を占める中心部には主郭が位置している。主郭の規模は東西15m、南北50mであり、南北に細長い形状を呈している。この場所は、昭和63年度に発掘調査が行われており、礎石建物が検出され、瓦、土師皿、土師器羽釜、瀬戸美濃の天目茶碗、貿易陶磁の白磁が出土している。瓦は、平瓦と丸瓦が中心であり、若干の軒平瓦・掛丸瓦が出土している。丸瓦の凹面に残るコビキ痕はすべてAで、斜位に施されていた。また瓦当に残る軒平瓦の文様はいずれも青海波紋であり、15世紀後半～16世紀前半の技術で製作されている。白磁は、端反皿であり、16世紀第３四半期のものである。瀬戸美濃の天目茶碗は、16世紀第３四半期のものである。羽釜は、土師質に焼成されており、頸部は直線的に立ち上がり、口縁端部は内傾している。16世紀前半の特徴をしめしている。

烏帽子形城跡の構造にあらためて、検討を加えた中井均氏の見解によれば、この主郭は、「東西幅５～15mと非常に狭く、兵の駐屯場所としての郭としてはふさわしくない。」とし、多聞櫓・櫓を配した大土塁として構築された可能性を示唆した。また、城郭に瓦葺建物が導入されるのが、安土城以降であることを述べ、主郭で見つかった15世紀後半から16世紀前半の瓦については、より古い時代に葺かれた近隣の寺院からの転用品と推測した（中井2001）。

主郭の東側及び南側には、腰郭が位置する。腰郭は東西約35m南北約70mの規模を有しており、主郭との高低差は約35mある。昭和63年度の調査では、この場所に２本のトレンチが設定され、複数の整地層が検出されており、瓦、備前の擂鉢、壷、土師皿、砥石が出土している。遺物はいずれも16世紀後半のものである。中井氏は、この腰郭と主郭を合わせた範囲を主郭として把握している。

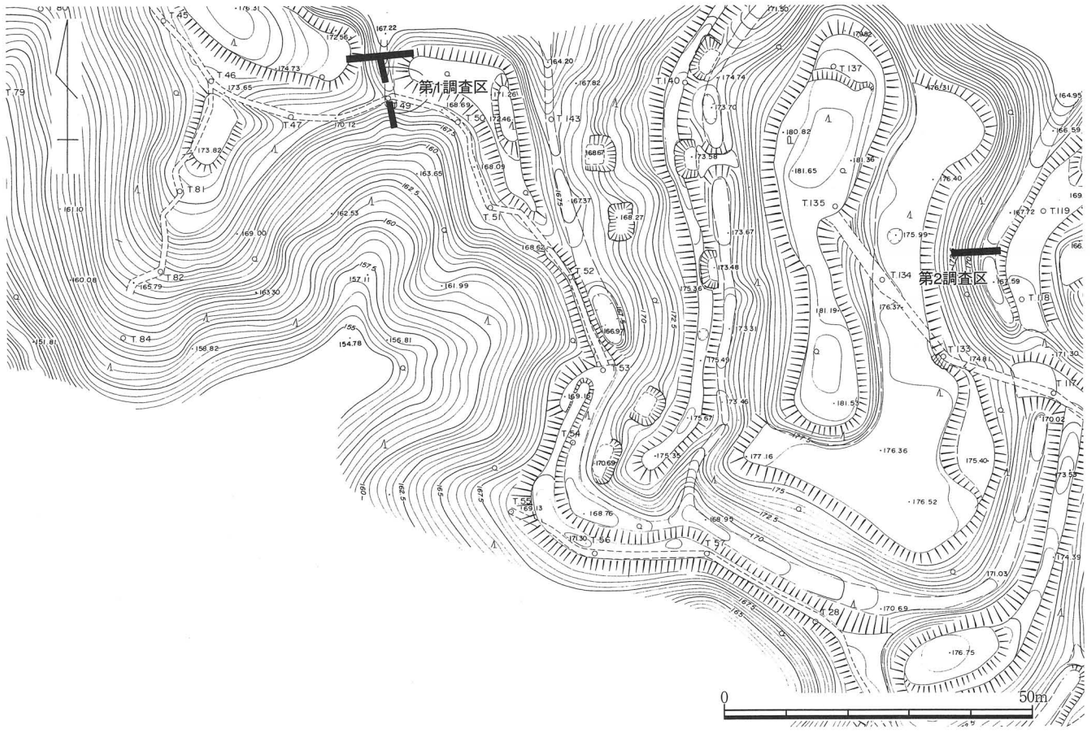
主郭と腰郭の周囲には、横堀が巡っている。横堀は、土橋によって分断されているが、土橋を挟んで食い違いになるように掘られている。堀底部に仕切りなどの施設はない。堀底部と腰郭の高低差は、約３～４m程度存在する。

腰郭に接続する土橋は、幅７～８m、長さ15mである。腰郭に通じる場所は、虎口となっており、ここを通る道が城の大手となっている。

横堀の外周には、土塁が巡っている。土塁は、幅10～15mであり、横堀底部から土塁上面までの比高差は、0.5～0.8m程度である。

土塁のさらに外側には、尾根続きとなる西・東・南部を中心として、部分的にさらに横堀が巡っている。このような外側の横堀は、織豊期に改築された際に増設されたものと推定されている（中井2001）。

２重の横堀のさらに外側には城域の西端と東端に、尾根を切断するために、堀切が尾根



第28図　調査区位置図(1/1000)

筋に直行するように掘られている。

村田氏は、以上のような烏帽子形城跡の基本形が「コ」の字状であることを述べ（村田1987)、中井氏も、郭が方形を呈する古い様相を示す構造が基本となり、改修が後に加えられたものとしている（中井2001)。

3　既往の調査・研究

今回、調査の対象となった烏帽子形城跡は、公園整備事業や個人住宅の建築に伴い、今回までに数次にわたる発掘調査が行われている。

昭和60年度の調査では、城跡と考えられていた烏帽子形山の山頂部の測量調査と、城郭の北裾にあたる駐車場建設予定地が発掘調査された。発掘調査では中世土器や輸入銭が出土したものの遺構は検出されなかった。しかし、山頂部の測量調査では城の縄張りを復元するのに貴重な資料が得られた。

昭和63年度の調査では城郭の中心部と考えられる山頂部にトレンチ調査が行われ、主郭と考えられる場所から、礎石建物が検出された。また、遺物は陶磁器、土師質の土釜瓦などが出土した。

昭和62年には、『中世城郭事典』が村田修三氏によって刊行され、烏帽子形城跡の縄張図が公表された。

平成元年度には烏帽子形山の東裾部で発掘調査が行われた。この際には、山城に関連する遺構は検出されず、かわって古墳時代～中世にかけての遺構が検出され、喜多町遺跡と命名された。この調査で、東側における城の広がりと周辺部における築城以前の様相が明らかになった。

平成2年度に行われた発掘調査では、主郭の南東にある斜面から中世の礎石建物、石垣、埋甕が検出された。

平成8年度には城の東裾部で発掘調査が行われ、平成元年度に検出された古墳時代の遺構と関連する遺構・遺物を検出した他、瓦器や近世の遺物が出土している。

平成10年度には、城の西側の丘陵部が発掘調査された。調査の結果、近世に造成が行われた跡が検出されたが、城に関連する施設や、中世の遺構・遺物は検出されず、城の範囲が西方向にはのびないことが分かった。

平成10年・11年度には、河内長野市内城館調査が行われた。調査は、河内長野市教育委員会が河内長野市城郭調査会に委託して行った。この際には、烏帽子形城跡の構造が改めて検討された。

4　調査に至る経緯と目的

本次調査は、市指定史跡である烏帽子形城跡について今後の保存・活用のための基礎的

な資料を得るために行った。前節で述べたように、烏帽子形城跡は、主郭及び腰郭については、すでに調査が行われており、一定の成果をあげている。しかし、堀切、横堀や土塁については、未だ調査が行われておらず不明な点が多く残されていた。

今回の調査は、主郭と腰郭をめぐる横堀及び、城域を西から続く丘陵部から切断している堀切の本来の形状の把握と、横堀に堆積した流入土の状況の把握を目的として、第１調査区と第２調査区の２箇所の調査区を設けた。第１調査区は、堀切部にＴ字状に設定した。第２調査区は、腰郭にいたる土橋の北側に位置する腰郭の東側に巡る横堀に設定した。

調査は平成18年１月16日に開始し、平成18年２月２４日に終了した。調査では、まず調査区周辺の枯れ木・落ち葉の除去と除草を行い、現況での写真の撮影と測量を行った後、人力により地山面まで掘り下げ、地山面で遺構検出を試みる一方で、調査区壁で土層の観察を行い、記録の作成を行った。遺構については、検出できなかったが、土層の観察や出土した遺物から、従来知られていなかった新たな情報を得ることができた。また。遺物は、層単位で取り上げを行っている。

５　堀割の調査（第29・31図、図版５・６）

烏帽子形城跡には、城域と城域外へ西方向に続く尾根を切断するために、南北方向に堀切が設けられている。現状では、この堀切に、土橋状の高まりがみとめられ、現在これが遊歩道となっている。

今回の調査では、この土橋状の構造物が本来的に山城に伴なっていたのか、あるいは遊歩道の設置にともなって盛土されたものであるのかを明らかにすることを目的として第１調査区を設定した。第１調査区では、遊歩道を挟んで北側と南側の両方に堀切に沿って、２箇所のトレンチを設置し、有歩道北側では、堀切に直交するように、東西方向に拡張を行った。第１調査区南側トレンチは、幅１ｍ、長さ４ｍで設定した。第１調査区北側トレンチは、幅１ｍ、長さ５ｍであり、東西方向へ幅0.5m長さ11mで拡張した。

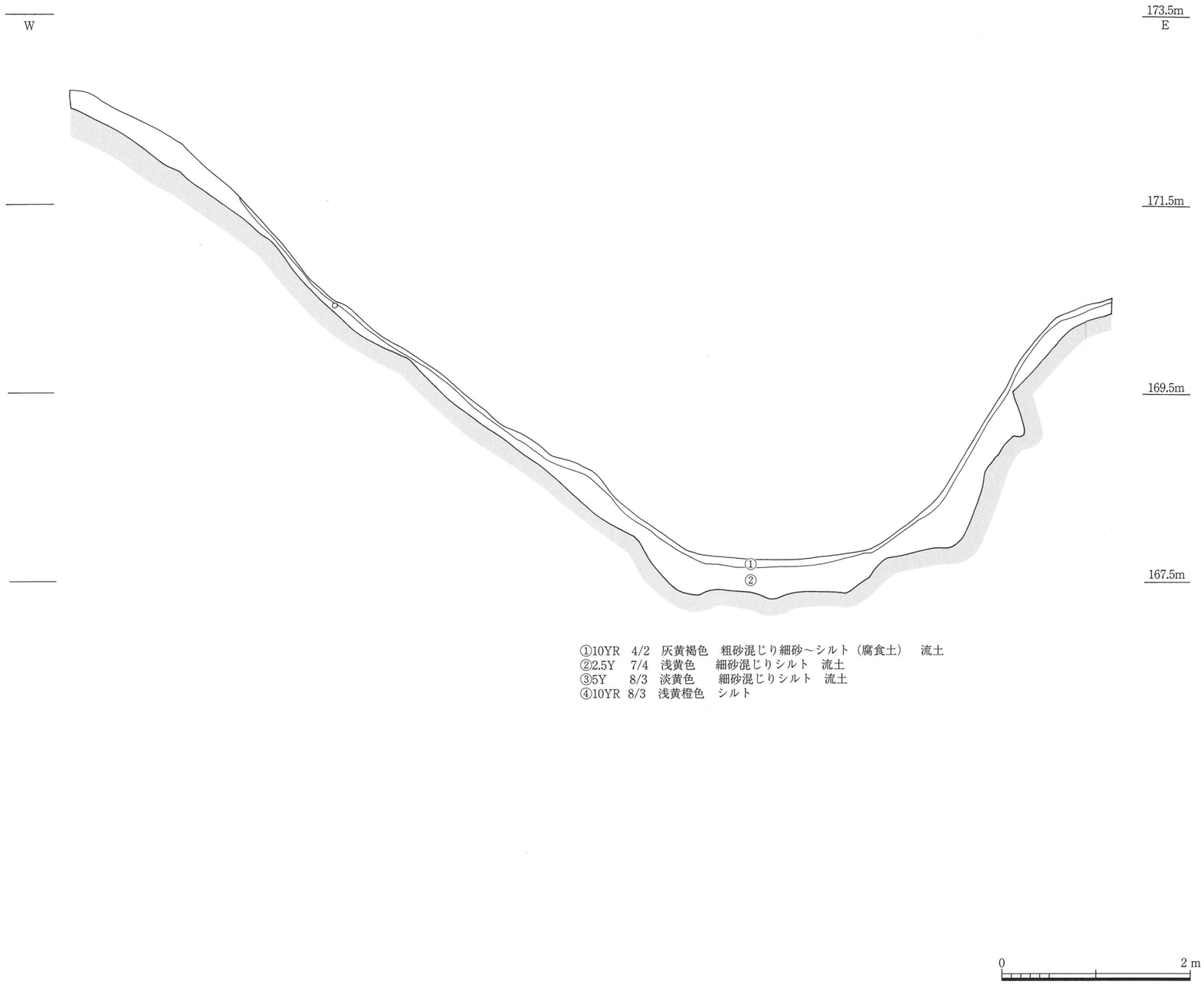
第１調査区付近の調査前の地形を述べると、現状での堀切底部と、烏帽子形城跡側の堀切肩部との比高差が３ｍ、城外側の堀切肩部との比高差が４.5mとなる。堀切の勾配は、烏帽子形城跡側が約55°、城外側が約37°となる。

調査の結果、現状での堀切底面から、約0.1～0.2mで地山面を検出し、堀切本来の断面形状を明らかにできたが、土橋状の高まりの構築時期は明らかにできなかった。

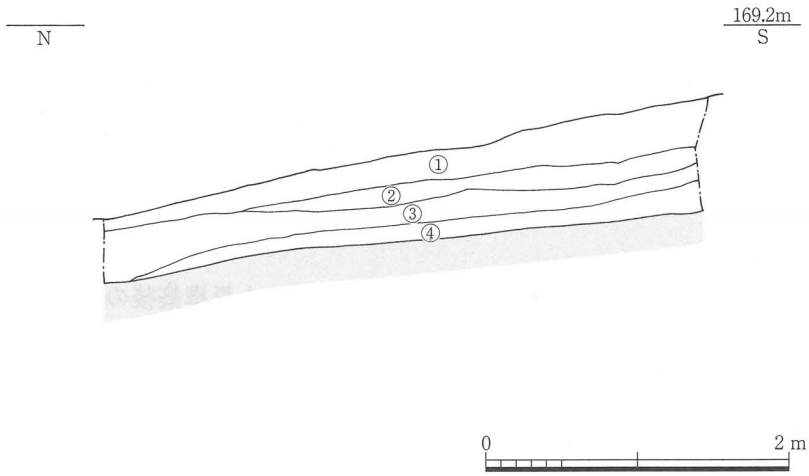
６　横堀の調査（第33図、図版７）

現状での地表面で観察すると、腰郭と主郭を囲み、横堀が巡っており、この横堀の外側には土塁が巡っている。

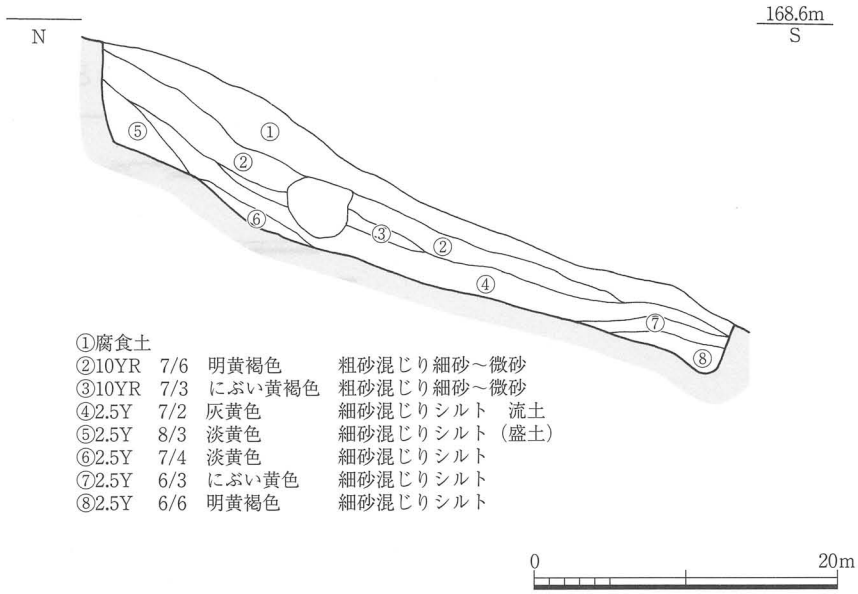
今回の調査では、横堀の規模・形状及び、横堀に堆積した流入土の状況の把握を目的として第２調査区を設定した。第２調査区は、腰郭にいたる土橋の北側に位置し、腰郭の東



第29図　第１調査区北側トレンチ東西土層断面図(1/50)



第30図　第１調査区　北側トレンチ南北土層断面図(1/50)



第31図　第１調査区　南側トレンチ南北土層断面図(1/50)

側に巡る横堀内に設定した。横堀に対して、直行する方向に、幅１ｍ、長さ8.6ｍの規模で設定し、横堀の底面まで掘り下げた。

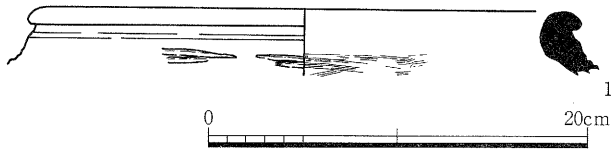
第２調査区を設定した箇所の調査前の状況を述べると、腰郭から現状での横堀底部までの比高差が約６ｍ、土塁から横堀底部までの比高差が約１ｍであった。

調査の結果、現状での溝底から、約1.9ｍの深さで地山面を検出した。地山面は、土塁から４ｍの地点で勾配の変化がみられ、底部の平坦面から横堀の西側法面をなす急斜面にかわっていた。地山直上には、41層が堆積していた（第33図参照）。41層は、他の堆積土に比べて土色に鮮明差を欠き、炭化物を含んでいた。また、また41層からは、瓦をはじめとする遺物が一定量出土している。41層の下層には17層が堆積していた。この41層からは

多くの遺物が出土した。この41層の上面には、土塁の盛土と考えられる32層から４0層が堆積していた。これらは、ほぼ水平に堆積しており、36層から39層までは、茶褐色系の粗砂～細砂と同色系の微砂～粘土が交互に積まれており、堆積土とは土質が大きく異なっていた。３４層から40層までは、堆積層に比較的近似した土色の土が積まれていたが、締りが非常に良く、角ばった５㎜から２㎝大の微砂から粘土のブロックを含んでいた点が堆積土と異なる。このようなことから先に述べた17層・41層は、土塁が築かれる以前に堆積したものといえる。

17・41層及び土塁を構成する32層から４0層の上面が、土塁構築後の横掘の底面となる。土塁構築後の横堀の断面は、Ｖ字形を呈しており、最も深い場所の標高は、166.20ｍとなる。この場所の腰郭からの比高差は8.5ｍ、土塁上面からの比高差は1.5ｍとなっている。土塁構築後の横堀底面の上には、１層から31層・42層が堆積していた。これらの層が横堀に堆積した流入土である。流入土全体の層厚は、もっとも厚みのある箇所で1.9ｍであった。流入土の内、１層は土壌化が著しく進行していた。各層の傾きから、横堀が東西両方向から土の流入があったことが明らかとなった。

第２調査区での調査によって、横堀断面形状と流入土の状況を把握するという、当該調査の目的は達成することができた。土塁については、今回の調査の対象ではなかったので、調査区を拡張して土塁全体を断ち割ることは行なわなかった。



第32図　出土遺物実測図

7　遺物　（第32図、図版11）

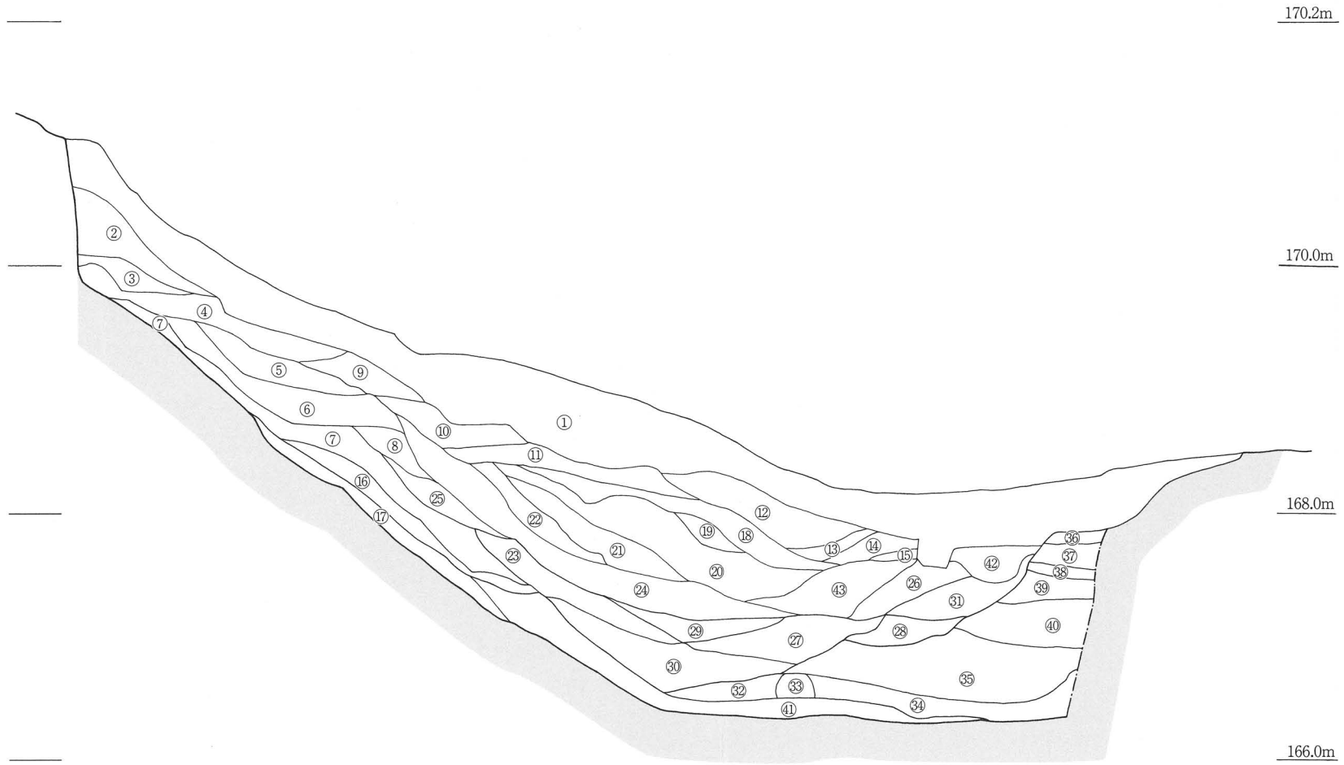
１は、瓦質土器の甕である。鋤柄編年のⅡ－３類であり、15世紀中様のものである。この他、瓦が出土している。

8　まとめ

烏帽子形城跡の築城については、『平家物語』に登場する「長野城」を烏帽子形城跡に比定する説や、南北朝期に楠木正成が赤坂城の支城として築造したとする説があるがいずれも確実な資料ではない。

『経覚私要鈔』文正元年（1466）九月四日条に「押子形城跡」として登場するのが烏帽子形城跡の文献上での初出とされている。ここでは、畠山義就が金胎寺に着陣し、敵対関係にあった畠山政長方の城であった押子形城跡を攻め落としたことが記載されている。その後戦国期になると、畠山氏・甲斐庄氏・碓井氏・橘氏などが拠っていたことが知られている。

その後、織豊期には、『宇野主水日記』八月四日条には「ゑほしがたと云古城普請」と



①10YR　6/4　にぶい黄橙色　礫混じりシルト～微砂（土壌化進む）
②10YR　5/4　にぶい黄褐色　礫混じりシルト～微砂（土壌化進む）
③2.5Y　7/4　浅黄色　礫混じりシルト～微砂
④2.5Y　8/4　淡黄色　礫混じりシルト～微砂
⑤10YR　8/2　灰白色　礫混じりシルト（10YR　7/6 シルトのブロックを多く含む）
⑥10YR　8/3　浅黄橙色　礫混じり細砂
⑦2.5Y　8/2　灰白色　礫混じり微砂
⑧10YR　8/3　浅黄橙色　礫混じり粗砂～細砂
⑨10YR　7/6　明黄褐色　礫混じり細砂～シルト（10YR　8/2 シルトのブロックを含む）
⑩10YR　8/3　浅黄橙色　礫混じりシルト～微砂（7.5YR　7/8 微砂のブロックを少量含む）
⑪10YR　8/3　浅黄橙色　礫混じりシルト～微砂（7.5YR　7/8 微砂のブロックを多く含む）
⑫2.5Y　8/4　淡黄色　シルト（7.5YR　7/8 微砂のブロックを多く含む）
⑬2.5Y　8/4　淡黄色　シルト
⑭2.5Y　8/4　淡黄色　シルト（7.5YR　7/8 微砂のブロックを多く含む）
⑮2.5Y　8/4　淡黄色　シルト
⑯10YR　7/6　明黄褐色　シルト～微砂（10YR　8/3 微砂のブロックを含む）
⑰10YR　8/3　浅黄橙色　微砂
⑱10YR　8/3　浅黄橙色　礫混じり細砂～シルト（7.5YR　7/8 微砂のブロックを少量含む）
⑲10YR　8/3　浅黄橙色　礫混じり細砂～シルト（7.5YR　7/8 微砂のブロックを多く含む）
⑳10YR　8/3　浅黄橙色　礫混じりシルト
㉑10YR　8/3　浅黄橙色　礫～粗砂混じり細砂　（10YR　7/4 シルトのブロックを含む）
㉒10YR　7/3　にぶい黄褐色　礫混じりシルト
㉓10YR　8/2　灰白色　礫混じりシルト（10YR　7/4 シルトのブロックを含む）
㉔10YR　8/2　灰白色　礫混じりシルト
㉕7.5YR　7/6　橙色　礫混じり細砂～シルト
㉖10YR　7/2　にぶい黄橙色　礫混じりシルト～微砂
㉗10YR　8/2　灰白色　礫混じりシルト（10YR　8/4 微砂のブロック<角ばった>を含む）
㉘10YR　8/1　灰白色　礫混じり粗砂～細砂（10YR　8/4 微砂のブロック<角ばった>を含む）
㉙10YR　8/2　灰白色　礫混じり細砂～シルト
㉚2.5Y　8/2　灰白色　礫混じりシルト～微砂（10YR 8/2 粘土のブロックを少量含む、<角ばった>を含む）
㉛2.5Y　6/1　黄灰色　粘土～微砂
㉜7.5YR　7/6　橙色　微砂～粘土（10YR 8/2 シルト～微砂のブロックを含む）
㉝10YR　7/6　明黄褐色　礫混じり粗砂（しまりが悪い）
㉞7.5YR　7/6　橙色　微砂～粘土（10YR 8/2 シルト～微砂のブロック<角ばった>を含む）
㉟2.5Y　8/2　灰白色　礫混じりシルト～微砂（10YR 8/2 灰白色 粘土のブロックを少量含む）
㊱10YR　6/6　明黄褐色　粘土～微砂（炭化物を弱干含む）
㊲10YR　6/6　明黄褐色　礫混じり粗砂～細砂（炭化物を弱干含む）
㊳10YR　6/6　明黄褐色　微砂～粘土（炭化物を弱干含む）
㊴2.5Y　7/6　橙色　礫混じり粗砂～細砂
㊵2.5Y　8/2　灰白色　礫混じりシルト～微砂（10YR　8/4 微砂のブロック<角ばった>を含む）
㊶2.5Y　6/1　黄灰色　2.5Y　7/3　浅黄色　礫混じり粗砂～細砂（しまりやや悪い。瓦を多量に含む）
㊷2.5Y　7/4　浅黄色　シルト～微砂（炭化物を若干含む）
㊸10YR　8/1　灰白色　礫混じり微砂～粘土

0　2 m

第33図　第２調査区東西土層断面図(1/50)

あり、豊臣秀吉の根来攻めの際に烏帽子形城跡が改修されたものと思われる。

このように烏帽子形城跡の山城としての利用は長期間に及び、また改修も行なわれていたことが分かる。また、従来の発掘調査でも複数の遺構面が検出されており、このようなことを裏付けていた。

このような中で、最も問題となっていたのが、主郭で検出された瓦葺の建物の築造時期である。従来、この建物が検出された遺構面から16世紀後半の遺物が検出されていたことや、城郭に瓦葺建物が導入されるのが安土城以降であるということなどから、豊臣秀吉の根来攻めの際に、土塁の構築や外堀とともに構築されたものと考えられていた(中井2001)。しかし、今回の調査では、瓦を大量に含んだ遺物包含層の上に、土塁が構築されている状況が確認できた。

また、堀切、横堀を横断する形で設定した調査区によって、堆積土を除去し、本来の堀切、横堀の断面形状についても明らかにすることができた。今後は、このような今回の調査で得ることができた情報をもとに、分析・検討を進めて行きたい。　　(太田)

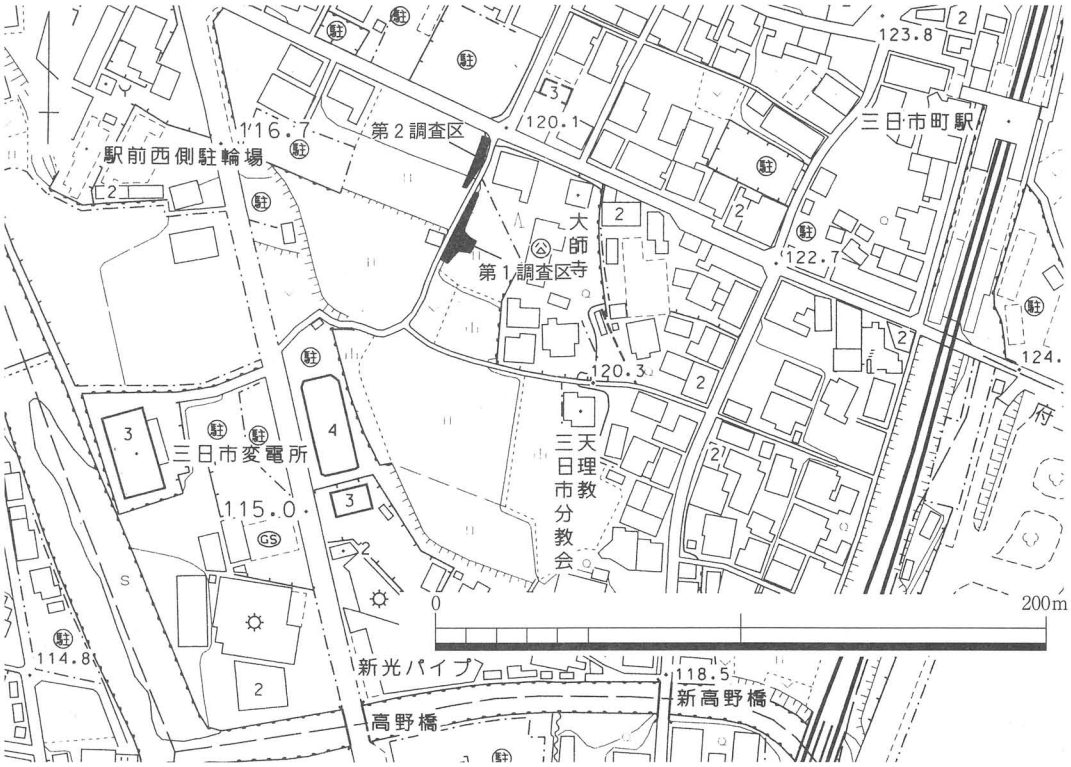
・河内長野市教育委員会2001『河内長野市城館分布調査報告書』
・中井均2001「烏帽子形城跡の構造について」『河内長野市城館分布調査報告書』
・村田修三1987『図説中世城郭事典』第3巻

第６節　三日市北遺跡（ＭＩＮ００－５）

１　位置と環境

三日市北遺跡は、市内のほぼ中央にあり、石川の支流である天見川東岸の河岸段丘上に立地する。当該遺跡の東側には金剛山の西斜面である丘陵部が広がっており、西側を流れる天見川西岸も岩湧山から派生する丘陵もしくは台地となっている。また、南側には、和泉山脈が広がっており、遺跡は天見川流域の低位・中位段丘が続く北側を除いて丘陵に囲まれている。

当該遺跡周辺は、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が密集しており、これらの遺跡がこの時期の地域社会の核としての役割を担っていたようである。遺跡の北東には、弥生時代後期の高地性集落である大師山遺跡、古墳時代前期の前方後円墳である大師山古墳が位置しており、南には、旧石器時代～中世にかけての複合遺跡である三日市遺跡が位置している。三日市遺跡では、古墳時代後期の集落が検出されており、古墳時代中期末葉から後期後半にかけての古墳群も検出されている。周囲の集落遺跡の消長をみると、弥生時代中期（三日市遺跡）→弥生時代後期（大師山遺跡）→庄内期～古墳時代中期（三日市北遺跡）→古墳時代後期（三日市遺跡）と居住域の変遷がみられる。



第34図　調査区位置図(1/2500)

2　遺跡の概要

当該遺跡付近に埋蔵文化財包蔵地が広がっている可能性が高いことは、昭和46年度に河内長野市教育委員会が関西大学考古学研究室の協力を得て行った分布調査で明らかとなった。

昭和60～62年と平成４年には、三日市町駅東側の区画整理に伴い、隣接する三日市遺跡で発掘調査が行われ、旧石器～古代の遺構と中世の遺構面が検出され、遺跡の内容が明らかになった。平成12年には、三日市町駅西側の再開発に伴い行った試掘調査で、駅の西側に弥生時代の遺構面が広がっていることが確認された。この結果を受けて、新規に発見された遺跡は三日市北遺跡と命名された。また、その後に行われた本調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡31棟、溝、土坑などが検出された。今回、発掘調査を行った場所は、弥生時代集落遺跡の南端に位置すると考えられる。

3　調査の方法

事前に行った確認調査により、住宅建設予定地内の遺構の広がりと層所の確認を行った。この結果、建設予定地内のほぼ全域に遺構面と遺物包含層が広がっていることが確認できた。本調査では、調査区を建設予定地内で道路が建設される範囲に第１調査区と第２調査区の２箇所を設定した。無遺物層であることが確認できている地表面から0.35～0.4mまでを機械によって掘削を行った。その後、人力による掘削を行い、地山面で遺構を検出した。遺構検出後は、写真撮影の後、遺構埋土の除去を行い、遺構平面図・断面図及び写真撮影を行った。

4　基本層序

基本層序は５層に分けることができる。１層は層厚が0.2mであり、10ＹＲ６/１褐灰色シルト混じり細砂である。現代の耕作土である。２層は層厚が0.15mであり、7.5ＹＲ８/８黄橙色粘土であり、耕作土に伴う床土である。３層は層厚が0.1mであり、土質は２層と同じであるがマンガンを多く含んでいる。４層は、層厚が0.1mであり、土質は10ＹＲ４/２褐灰色粘土であり、弥生時代の遺物包含層である。包含層に含まれる遺物の密度は高くない。５層は、10ＹＲ８/３浅黄褐色粘土であり地山層である。

5　遺構

・第１調査区（第35図、図版８）

第１調査区では、弥生時代の溝（ＳＤ１～３）、土坑（ＳＫ１）、落ち込み（ＮＶ１）、近世の石組暗渠（ＳＤ４～５）を検出している。

（１）溝

［ＳＤ１］

ＳＤ１は、幅0.3～0.35m、深さ0.13m、長さ２.0mにわたり検出した。検出面の標高は118.90mであった。底部は比較的平坦であった。埋土は１層よりなり、土質は、10ＹＲ３/１黒褐色粘土であった。遺物は弥生土器の小片が出土しているが、細片であったため、図化できなかった。弥生土器が出土していることや、埋土の特徴から弥生時代のものと考えられる。

［ＳＤ２］

ＳＤ２は、幅0.25～0.35m、深さ0.05m、長さ1.7mにわたり検出した。検出面の標高は118.90mであった。浅い溝であり、底部は比較的平坦であった。埋土は１層よりなり、土質は10ＹＲ３/１黒褐色粘土であった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から、弥生時代のものと考えられる。

［ＳＤ３］

ＳＤ３は、幅0.3～0.6m、深さ0.15m、長さ４.5mにわたり検出した。検出面の標高は118.90mであった。溝の断面はＶ字形を呈していた。埋土は１層よりなり、土質は10ＹＲ３/１黒褐色粘土であった。遺物は弥生土器が出土しているが細片のため図化できなかった。弥生土器が出土していることや、埋土の特徴から弥生時代のものと考えられる。

［ＳＤ４］

ＳＤ４は、幅1.15m、深さは0.05m、長さ2.2mにわたり検出した。検出面の標高は118.8mであった。底部は比較的平坦であり、0.1～0.2m大の石が敷かれていた。埋土は１層よりなり、土質は10ＹＲ７/１灰白色礫混じり細砂であった。遺物は出土していない。周辺の調査地では、同様の近世の石組暗渠が検出されていることから、当該遺構も近世のものと考えられる。

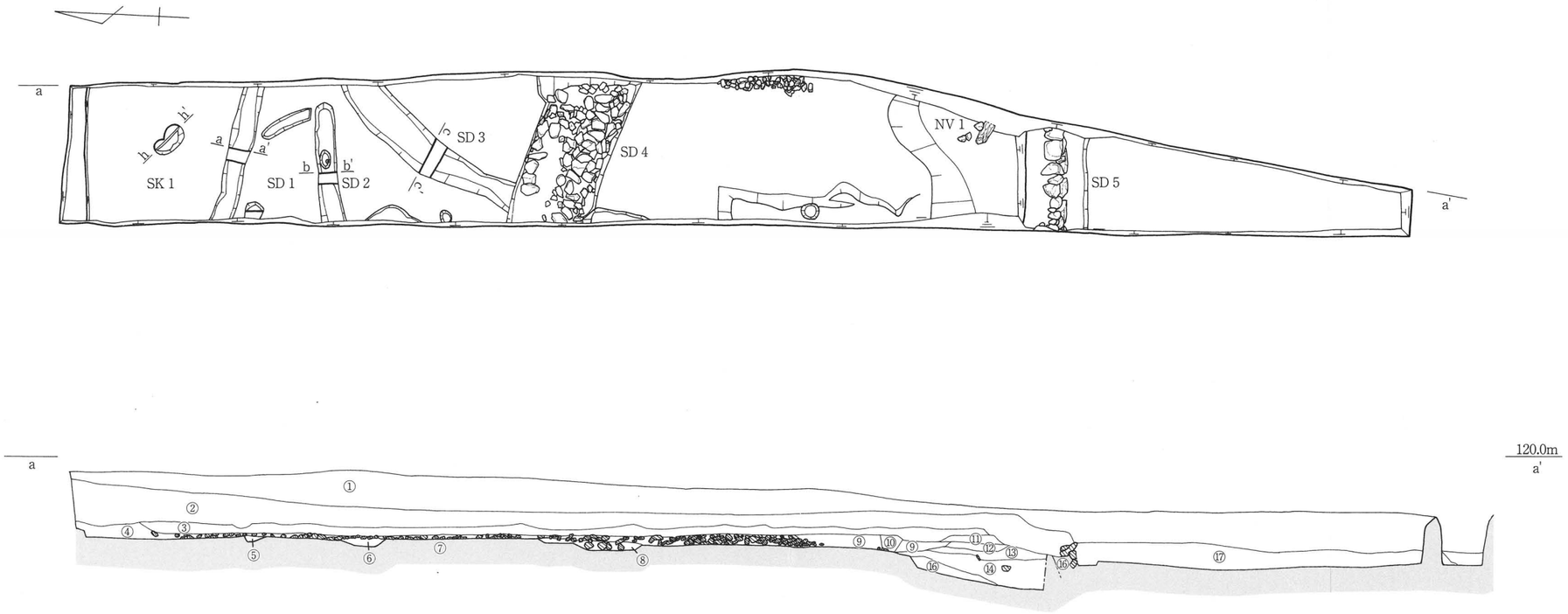
［ＳＤ５］

ＳＤ５は、幅0.４～0.5m以上、深さ0.3m、長さ1.6mにわたり検出した。検出面の標高は118.95mであった。底部は比較的平坦であり、0.1～0.2m大の石が敷かれていた。埋土は１層よりなり、土質は10ＹＲ７/１灰白色礫混じり細砂であった。遺物は出土していない。周辺の調査地では、同様の近世の石組暗渠が検出されていることから、当該遺構も近世のものと考えられる。

（２）土坑

［ＳＫ１］

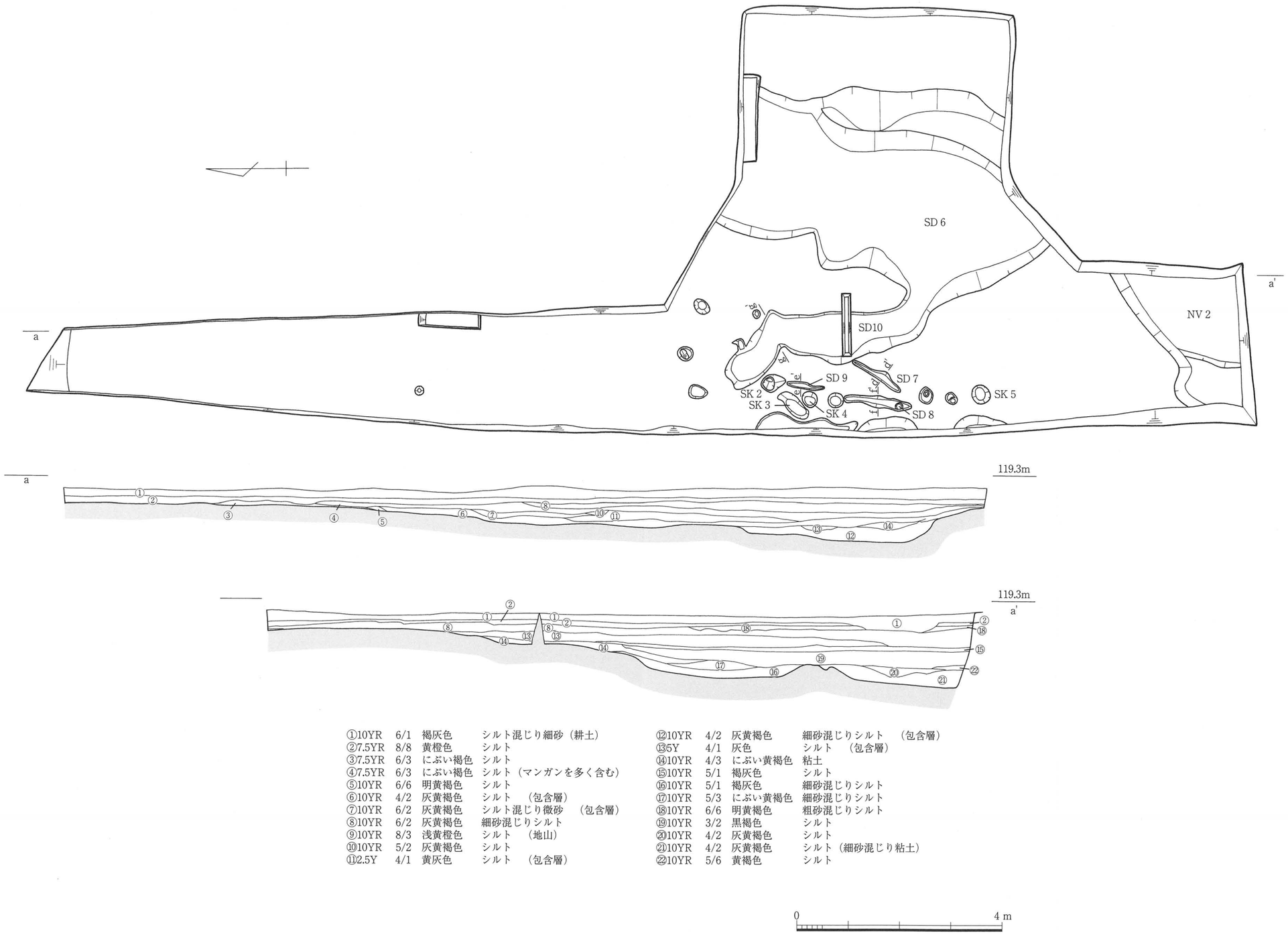
ＳＫ１は、長軸0.5m、短軸0.3mの楕円形の土坑である。検出面の標高は118.8mであ



①10YR　5/1　褐灰色　　細砂混じりシルト（盛土）
②10YR　8/4　浅黄橙色　　粘土 細砂混じり（耕土）
③10YR　5/1　褐灰色　　シルト混じり粘土　（10YR　8/4 粘土のブロックを含む）
④10YR　4/1　褐灰色　　細砂
⑤10YR　3/1　黒褐色　　粘土
⑥10YR　3/1　黒褐色　　粘土
⑦10YR　8/4　浅黄橙色　　粘土
⑧10YR　8/4　浅黄橙色　　粘土
⑨10YR　4/2　灰黄褐色　　粘土
⑩10YR　5/4　にぶい黄褐色　粘土
⑪10YR　5/3　にぶい黄褐色　粘土
⑫10YR　5/2　灰黄褐色　　粘土
⑬10YR　3/1　黒褐色　　粘土
⑭10YR　6/2　灰黄褐色　　粘土
⑮10YR　4/1　褐灰色　　細砂
⑯10YR　4/2　灰黄褐色　　粘土
⑰10YR　5/1　褐灰色　　粘土

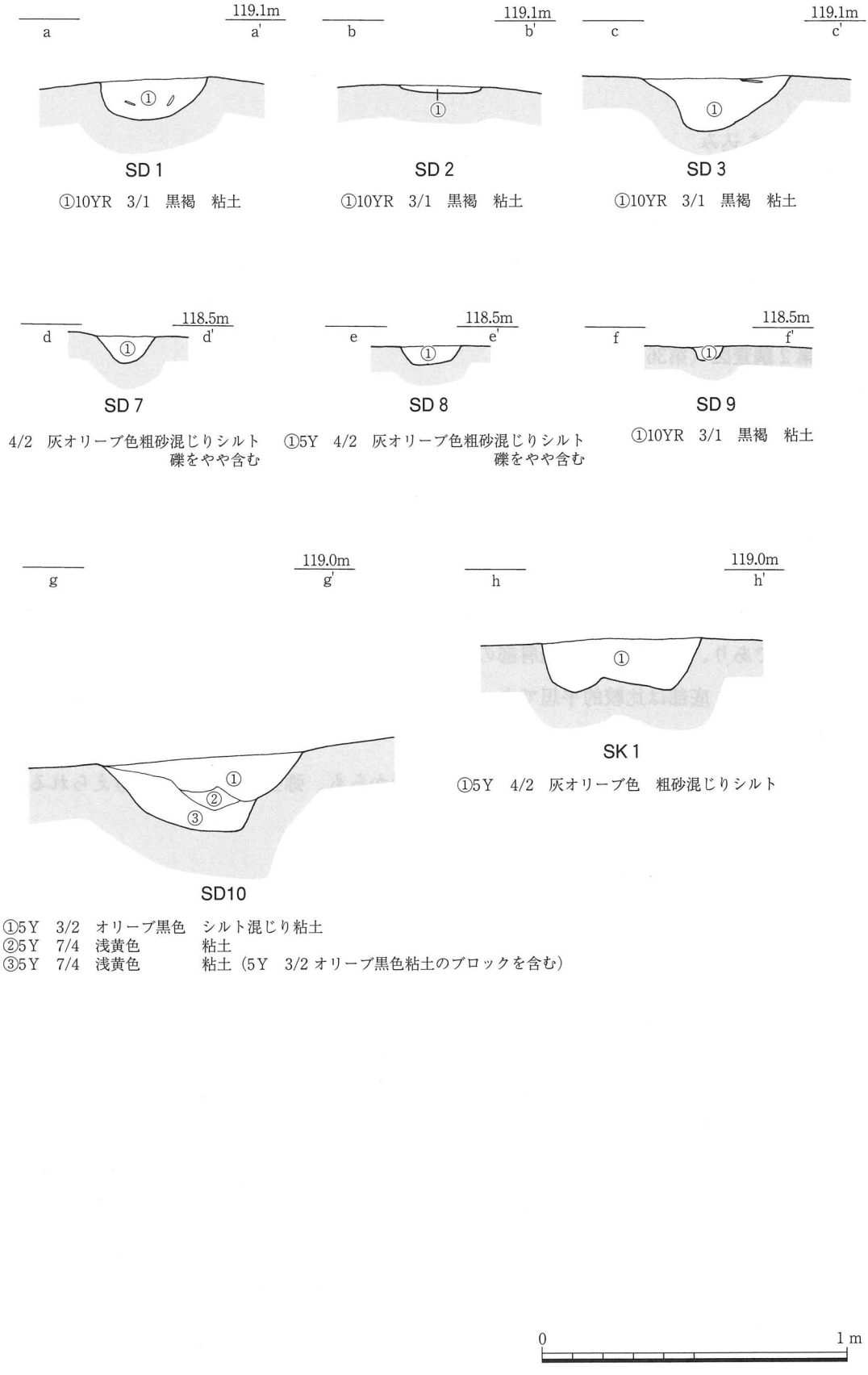
0　4 m

第35図　第１調査区平面図・土層断面図(1/80)



①10YR 6/1 褐灰色 シルト混じり細砂（耕土）
②7.5YR 8/8 黄橙色 シルト
③7.5YR 6/3 にぶい褐色 シルト
④7.5YR 6/3 にぶい褐色 シルト（マンガンを多く含む）
⑤10YR 6/6 明黄褐色 シルト
⑥10YR 4/2 灰黄褐色 シルト （包含層）
⑦10YR 6/2 灰黄褐色 シルト混じり微砂 （包含層）
⑧10YR 6/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト
⑨10YR 8/3 浅黄橙色 シルト （地山）
⑩10YR 5/2 灰黄褐色 シルト
⑪2.5Y 4/1 黄灰色 シルト （包含層）
⑫10YR 4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト （包含層）
⑬5Y 4/1 灰色 シルト （包含層）
⑭10YR 4/3 にぶい黄褐色 粘土
⑮10YR 5/1 褐灰色 シルト
⑯10YR 5/1 褐灰色 細砂混じりシルト
⑰10YR 5/3 にぶい黄褐色 細砂混じりシルト
⑱10YR 6/6 明黄褐色 粗砂混じりシルト
⑲10YR 3/2 黒褐色 シルト
⑳10YR 4/2 灰黄褐色 シルト
㉑10YR 4/2 灰黄褐色 シルト（細砂混じり粘土）
㉒10YR 5/6 黄褐色 シルト

第36図　第２調査区平面図・土層断面図(1/80)



第37図　第１・２調査区遺構断面図(1/20)

った。深さは0.2mであった。埋土は１層よりなり、土質は10ＹＲ３/１黒褐色粘土であった。遺物は出土していないものの、埋土の特徴から弥生時代のものと考えられる。

（３）落ち込み

［ＮＶ１］

第１調査区の北端で検出した。検出面の標高は118.5mであった。検出面と落ち込み底部の比高差は0.3mであった。

・第２調査区（第36図、図版８）

第２調査区では弥生時代の溝（ＳＤ６～９）、土坑（ＳＫ２～５）、落ち込み（ＮＶ２）検出している。

（１）溝

［ＳＤ６］

ＳＤ６は、幅2.8～3.5m、深さ0.8～0.3m、長さ５mにわたり検出した。南北方向にのびる溝であり、東側肩部と西側肩部の比高差が0.3mあり、検出面の標高は118.４～118.7mであった。底部は比較的平坦であった。三日市北遺跡で検出された溝としては大型であるといえる。

遺物は弥生土器が出土している。埋土の特徴からも、弥生時代のものと考えられる。

［ＳＤ７］

ＳＤ７は、幅0.1～0.2m、深さ0.1m、長さ１mにわたり検出した。検出面の標高は118.41mであった。断面はＵ字形を呈している。埋土は１層よりなり、土質は、５Ｙ４/２灰オリーブ色粗砂混じりシルト（礫をやや含む）であった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から弥生時代のものと考えられる。

［ＳＤ８］

ＳＤ８は、幅0.1～0.2m、深さ0.08m、長さ1.25mにわたり検出した。検出面の標高は118.４5mであった。断面はＵ字形を呈している。埋土は１層よりなり、土質は、５Ｙ４/２灰オリーブ色粗砂混じりシルト（礫をやや含む）であった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から弥生時代のものと考えられる。

［ＳＤ９］

ＳＤ９は、幅0.1m、深さ0.05m、長さ0.8mにわたり検出した。検出面の標高は118.４

5mであった。底部は比較的平坦であった。断面はU字形を呈している。埋土は1層よりなり、土質は、10YR3/1黒褐色粘土であった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から弥生時代のものと考えられる。

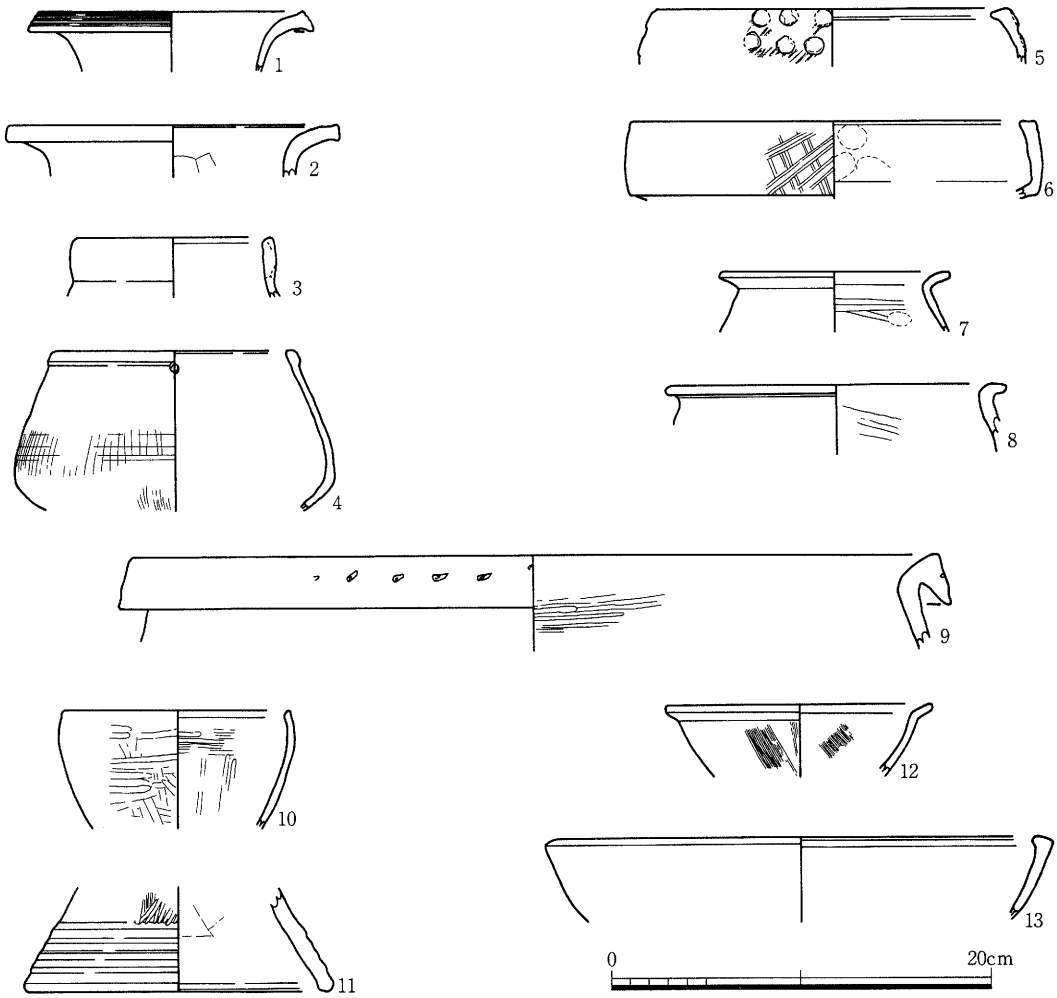
[SD10]

SD10は、幅0.6～10m、深さ0.25m、長さ4mにわたり検出した。検出面の標高は118.4mであった。底部は比較的平坦であった。埋土は3層より、土質は上層から5Y3/2オリーブ黒色シルト混じり粘土、5Y7/4浅黄色粘土、5Y7/4浅黄色粘土（5Y3/2オリーブ黒色粘土ブロックを含む）であった。SD6に接続している。遺物は出土していないが、埋土の特徴から弥生時代のものと考えられる。

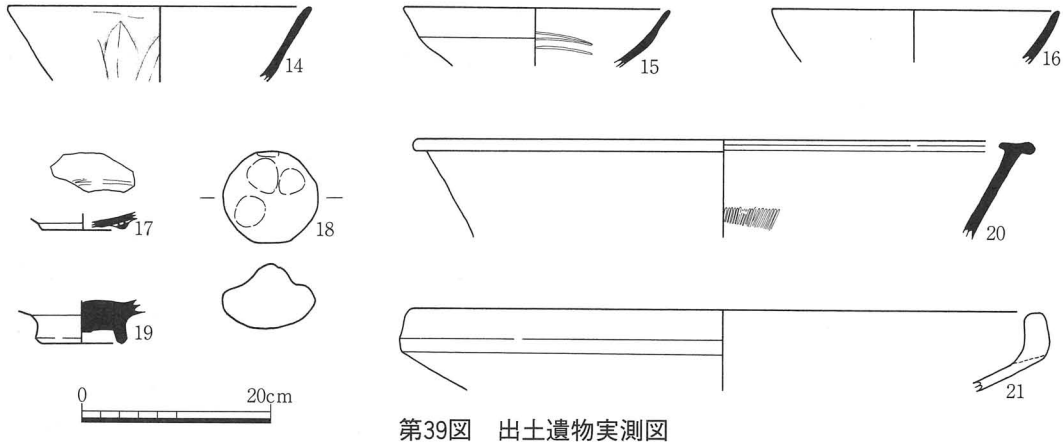
（2）土坑

[SK2]

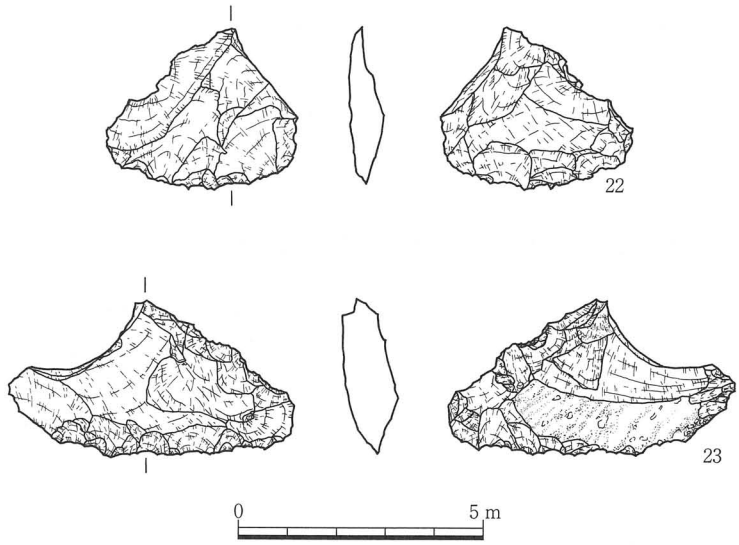
SK2は、長軸0.5m、短軸0.3mの楕円形の土坑である。検出面の標高は118.45mで



第38図　出土遺物実測図



第39図　出土遺物実測図



第40図　出土遺物実測図

あった。深さは0.2mであった。埋土は１層よりなり、土質は５Ｙ４/２灰オリーブ色粗砂混じりシルトであった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から弥生時代のものと考えられる。

［ＳＫ３］

ＳＫ３は、長軸0.7m、短軸0.3mの楕円形の土坑である。検出面の標高は118.45mであった。深さは0.1mであった。埋土は１層よりなり、土質は５Ｙ４/２灰オリーブ色粗砂混じりシルトであった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から弥生時代のものと考えられる。

［ＳＫ４］

ＳＫ４は、長軸0.3m、短軸0.2mの楕円形の土坑である。検出面の標高は118.45mであった。深さは0.15mであった。埋土は１層よりなり、土質は５Ｙ４/２灰オリーブ色粗砂混じりシルトであった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から弥生時代のものと考えられる。

（3）落ち込み

［ＮＶ２］

調査区の南端で検出した。検出面の標高は118.0mであった。検出面と落ち込み底部の比高差は0.3mであった。

6　遺物（第38・39・40図、図版14）

遺物はいずれも遺物包含層から出土している。１は、広口壺である。口縁端部は上下方向に若干拡張しており、外面には凹線文を施文する。２は広口壺である。口縁部は外方向に屈曲する。３は無頸壺である。４は無頸壺である。口縁端部は肥高しており、体部には簾状文を施文する。５は細頸壺である。口縁部には、列点文施文後に円形浮文を施文する。６は受口状口縁壺である。口縁部外面には斜線文を施文する。７、８は、甕である。口縁端部を丸く収めている。９は大型の甕である。口縁部を下方向に拡張しており、刺突文を施文する。10は、細頸壺である。11は、台付鉢の脚部と考えられる。12は、高杯と考えられる。13は高杯である。

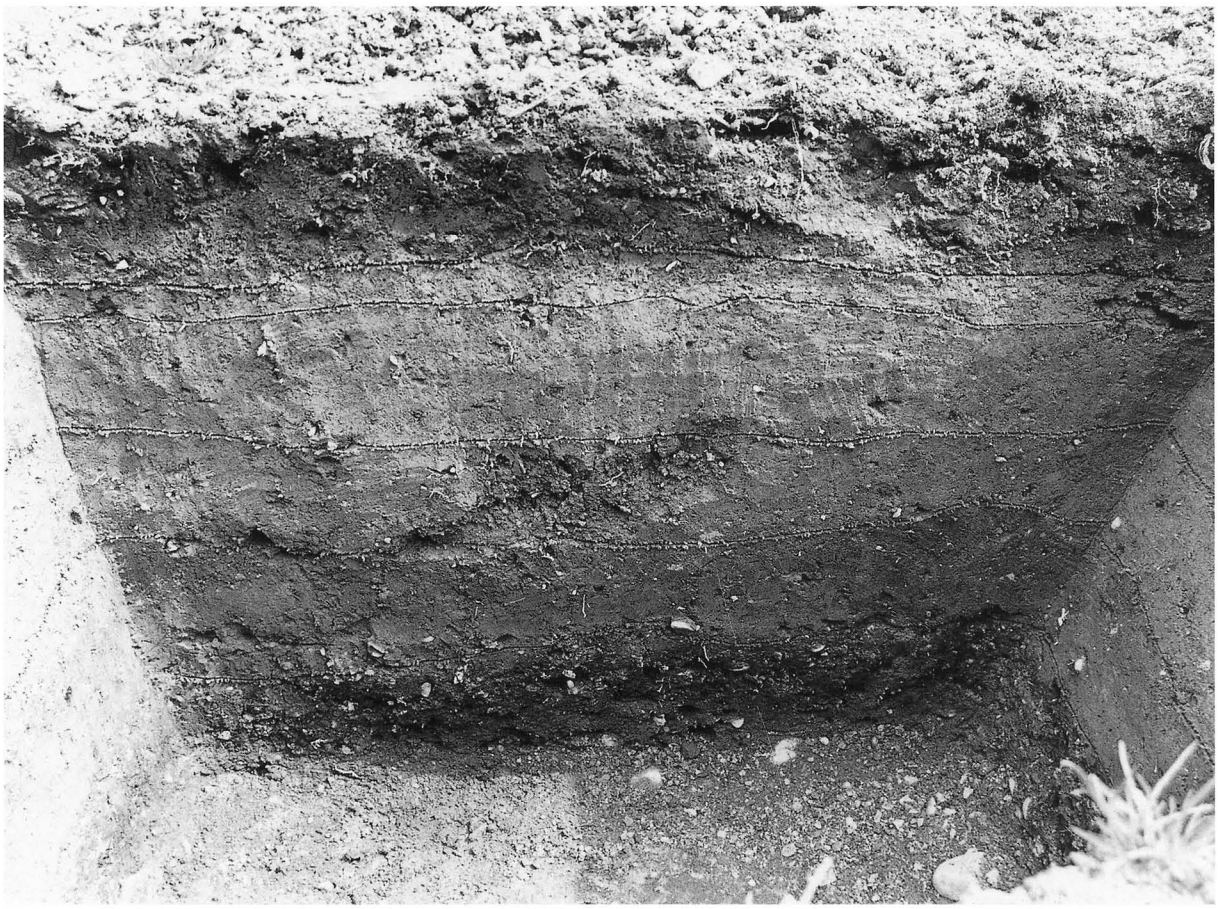
１４は、龍泉窯系の蓮弁文の青磁碗である。15、16、17は瓦器埦である。18は不明土製品である。20は陶磁器である。21は炮烙である。22、23はサヌカイト製の削器である。

7　まとめ

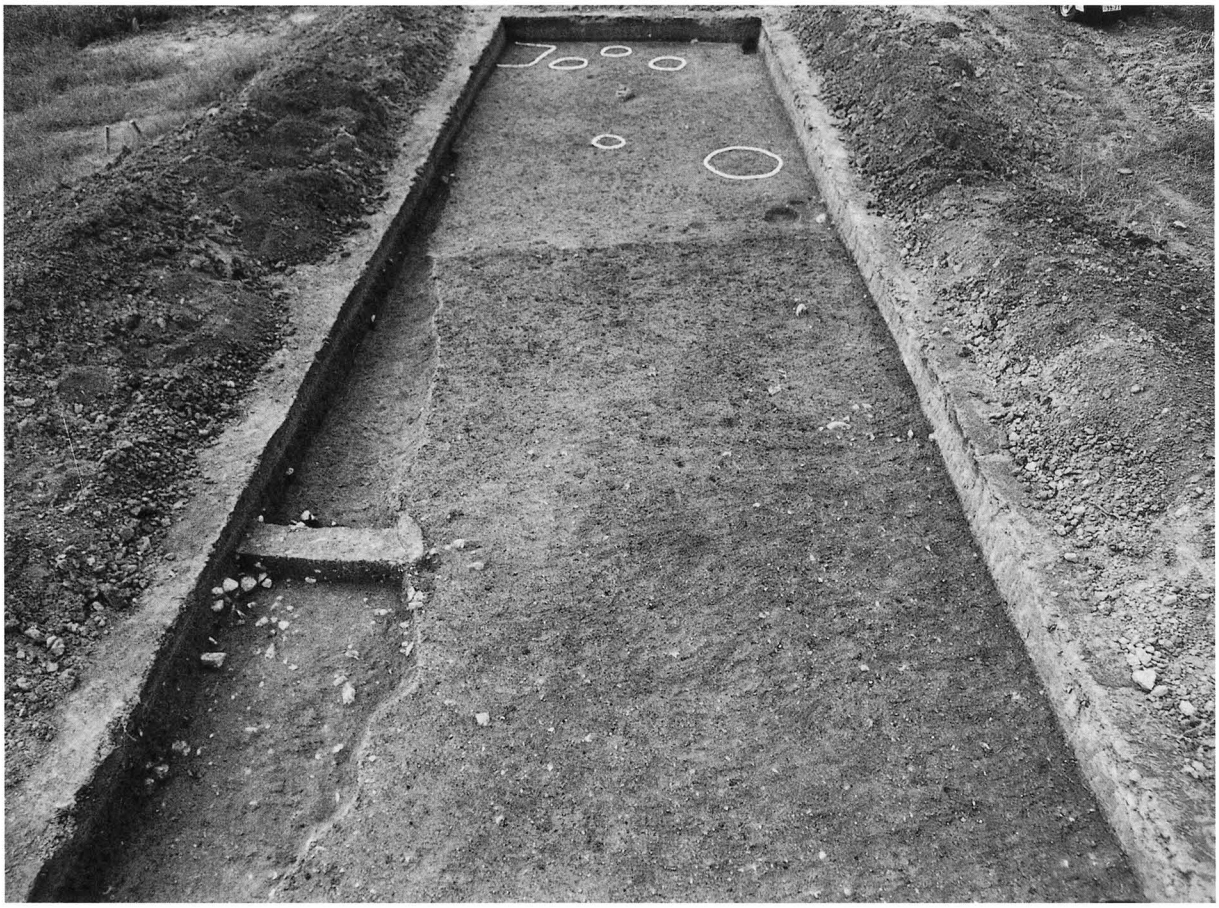
今回の調査では、竪穴住居や掘立柱建物は検出されなかった。北側に位置する第１調査区の北側では、過去の調査で住居群が検出されており、土坑や溝などの遺構の密度も高い。一方で今回の調査では、検出できた遺構の密度や、包含層に含まれている土器の密度ともに低く、集落の南端部である可能性が高い。南側に位置する第２調査区の南側200mには石見川が東西に流れており、この河川までは傾斜面が続いている。このようなことから、三日市北遺跡で検出された弥生時代集落遺跡の南端の状況が明らかになった。当該集落の範囲は東西300m、南北200mと推定できる。（太田）

図　　版

図版1　太白遺跡（ＴＨＫ04―2）・小塩遺跡（ＯＳＯ05―2）



ＴＨＫ04―１　第３トレンチ南壁土層



ＯＳＯ05―２　調査区全景（東から）

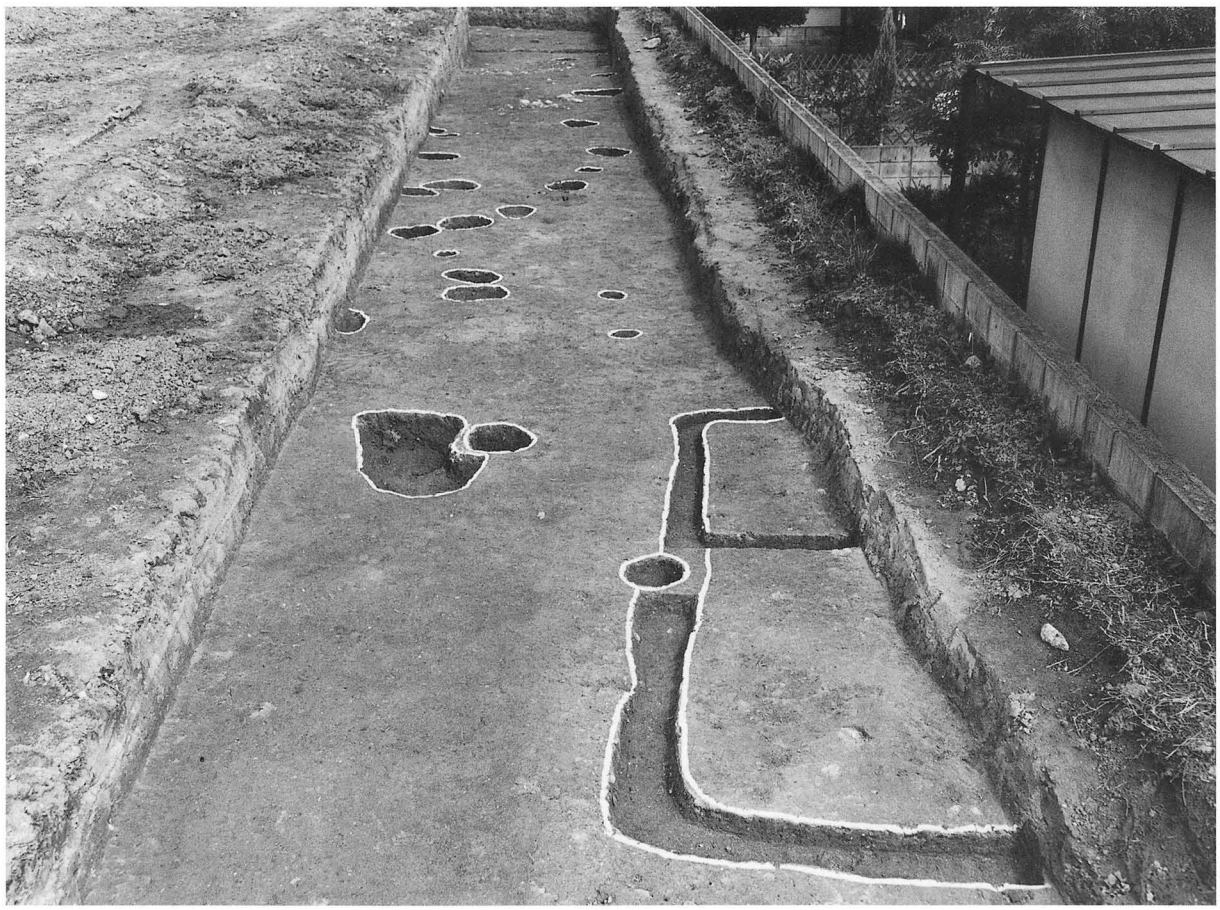
図版2　小塩遺跡（OSO05—1）

第1・2調査区全景（北東から）

第2調査区全景（北東から）

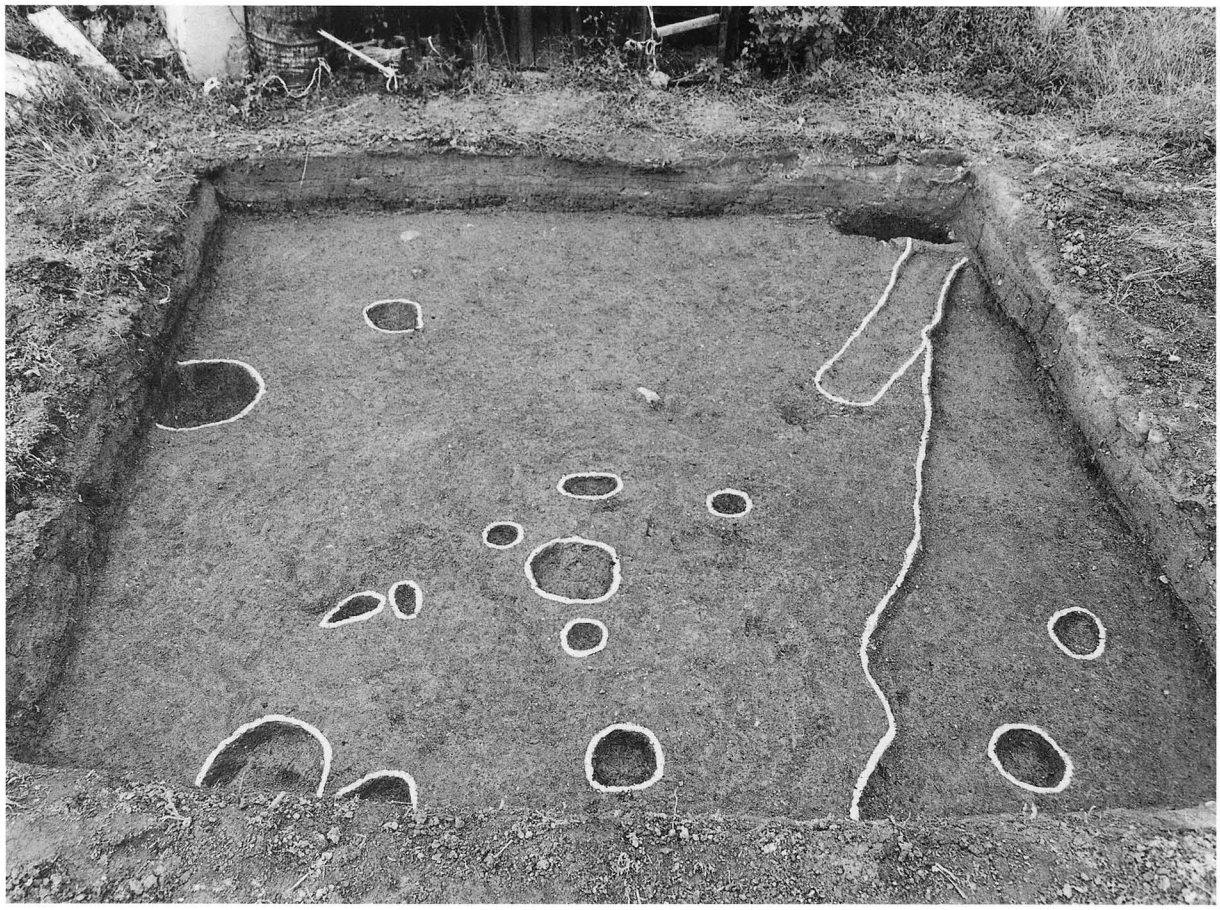
図版3　小塩遺跡（OSO05—1）

第3調査区北半部（北から）



第3調査区南半部（南から）

図版4　小塩遺跡（OSO05—1）



第5調査区全景（東から）

第6調査区全景（東から）

図版5　鳥帽子形城跡（EBS05－4）

第１調査区北側トレンチ北壁東部

第１調査区北側トレンチ北壁西部

図版6　鳥帽子形城跡（EBS05－4）

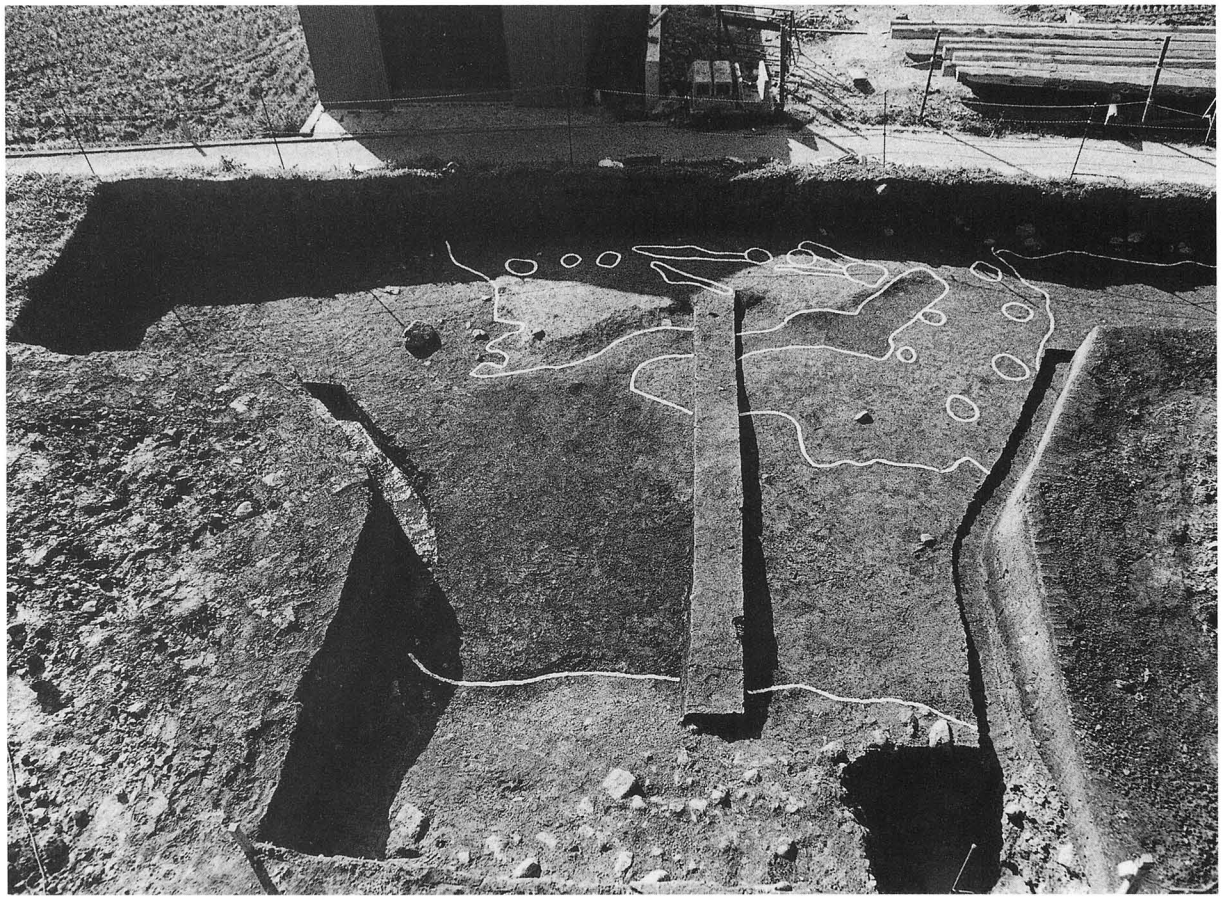
第１調査区北側トレンチ東壁

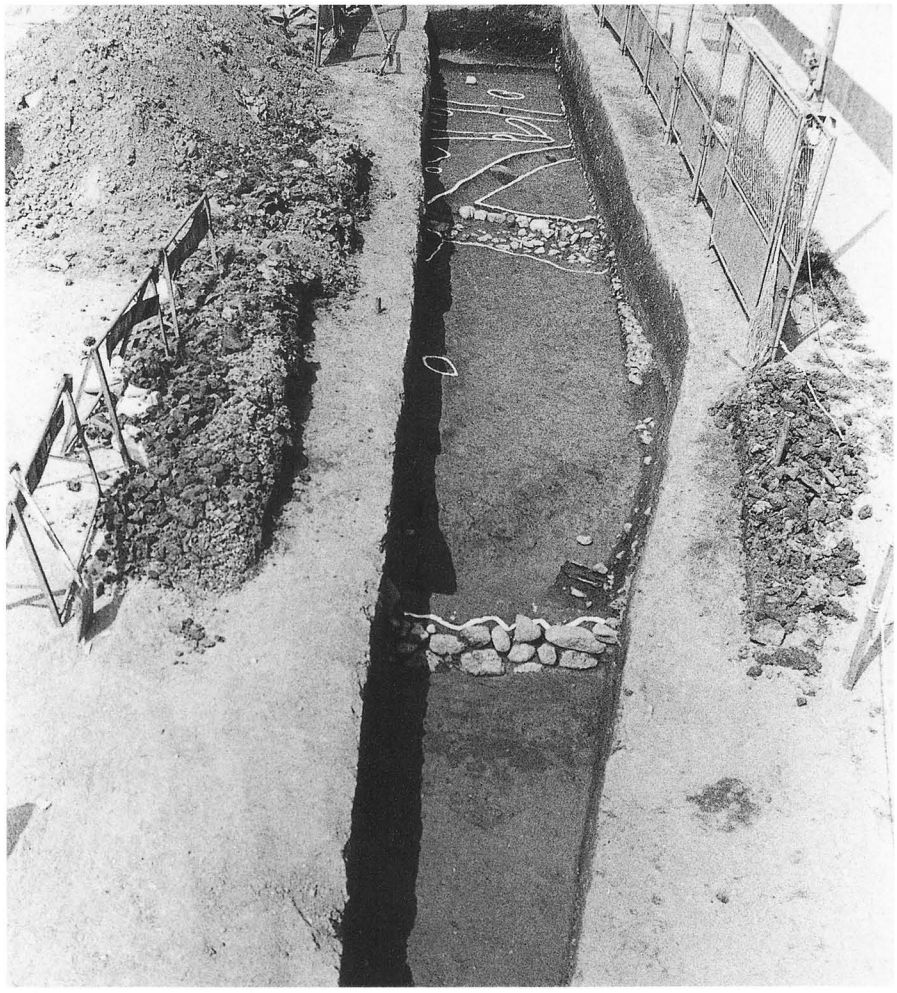
第１調査区南側トレンチ

図版7　鳥帽子形城跡（EBS05－4）

上段左　第２調査区前状況、上段右　第２調査区全景、下段　第２調査区北壁東部

図版8　三日市北遺跡（MIN00—5）

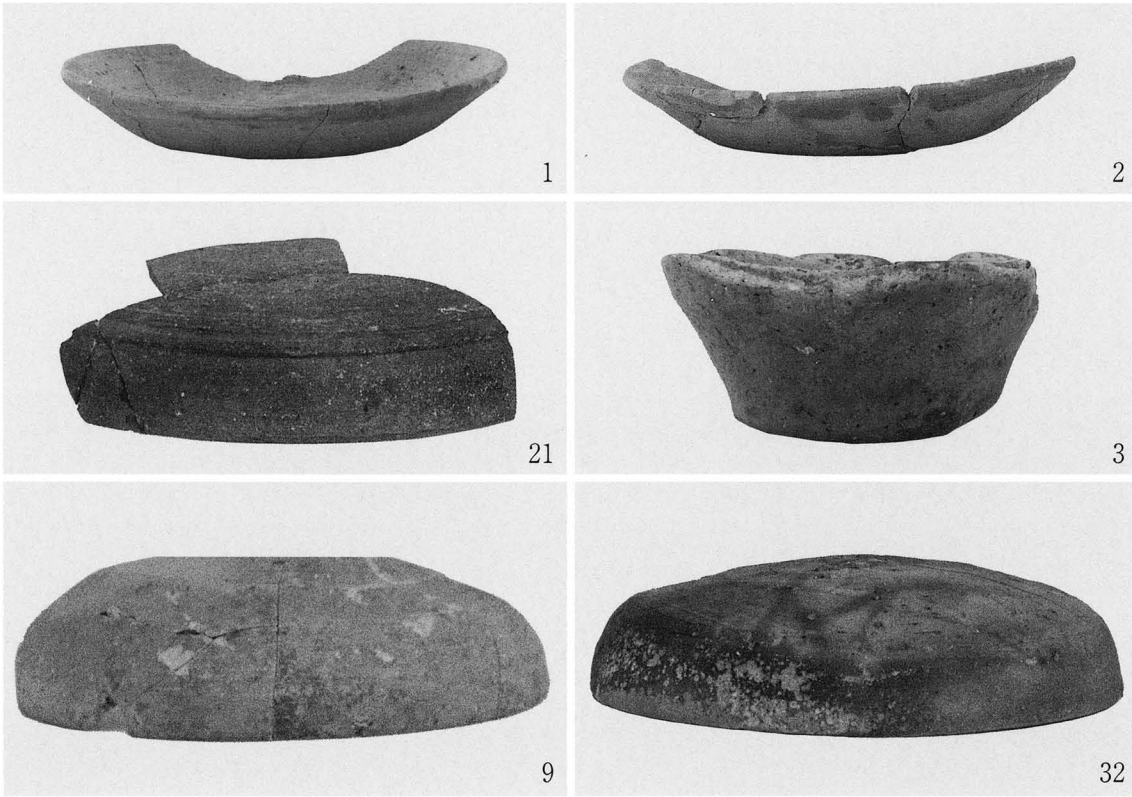




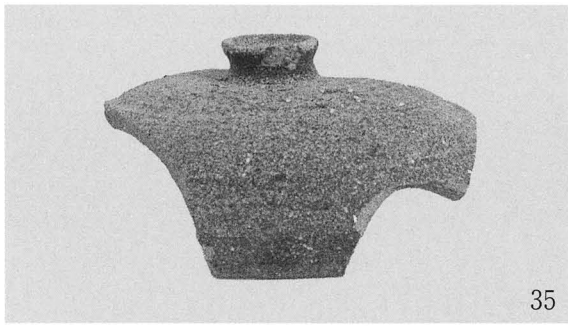
上段：第２調査区
下段：第１調査区

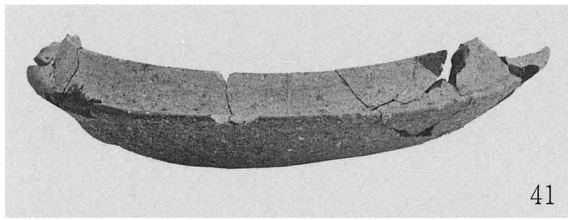
図版9　鳥帽子形城跡（EBS04－6）・上原中遺跡（UHN05－1）・小塩遺跡（OSO05－1・2）

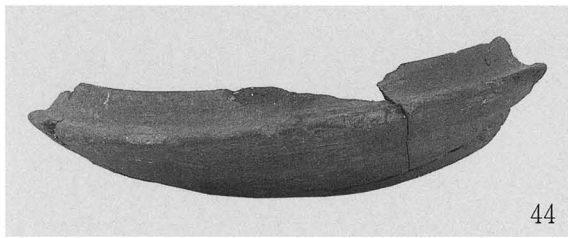
第５トレンチ全景（北から）

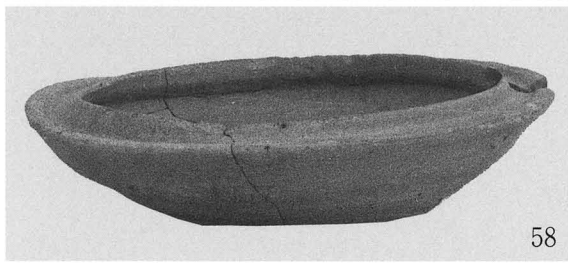


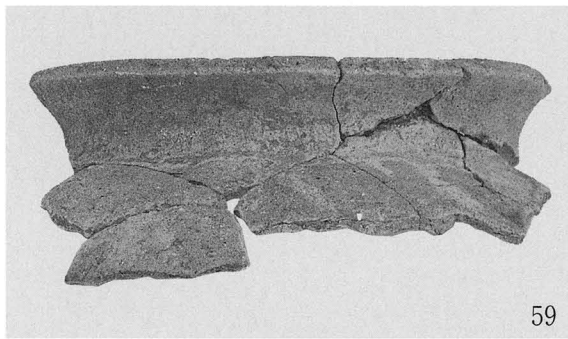
ＵＨＮ05－１　盛土（１・２）、ＯＳＯ05－１　包含層（３・９）、ＯＳＯ05－１　第１調査区　包含層（21・32）

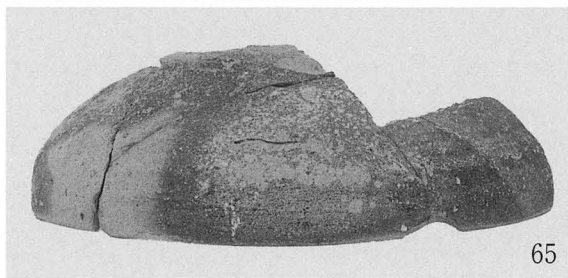


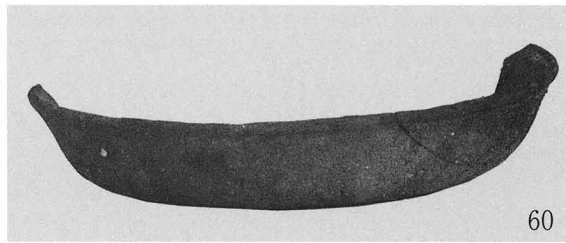


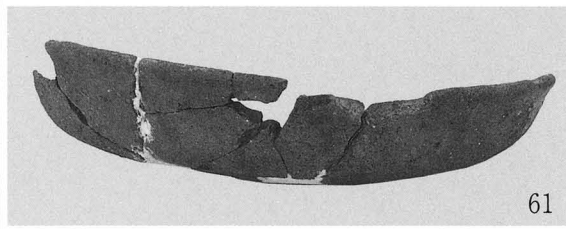


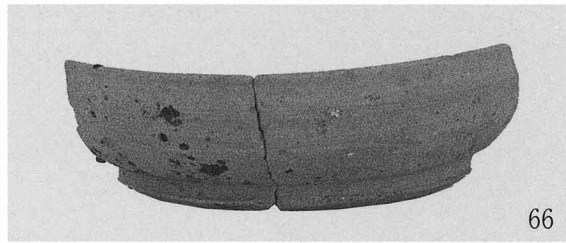


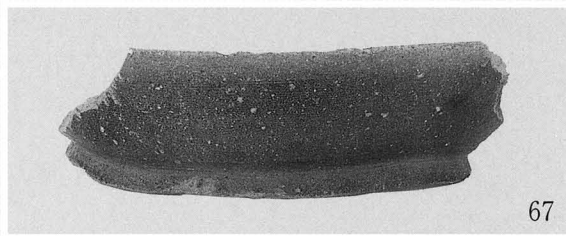


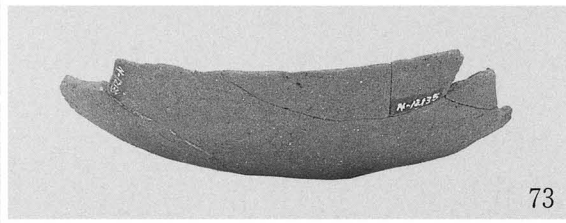


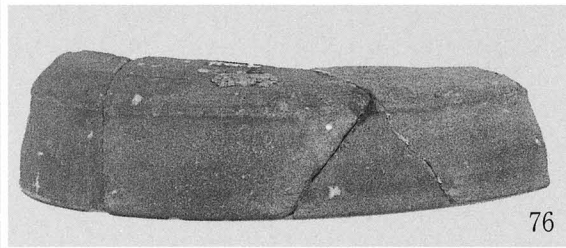


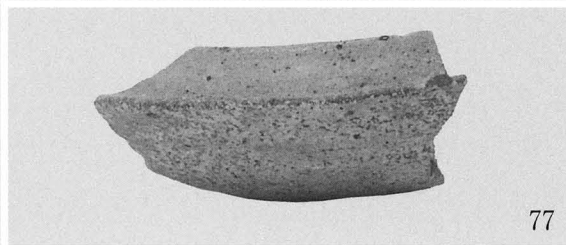






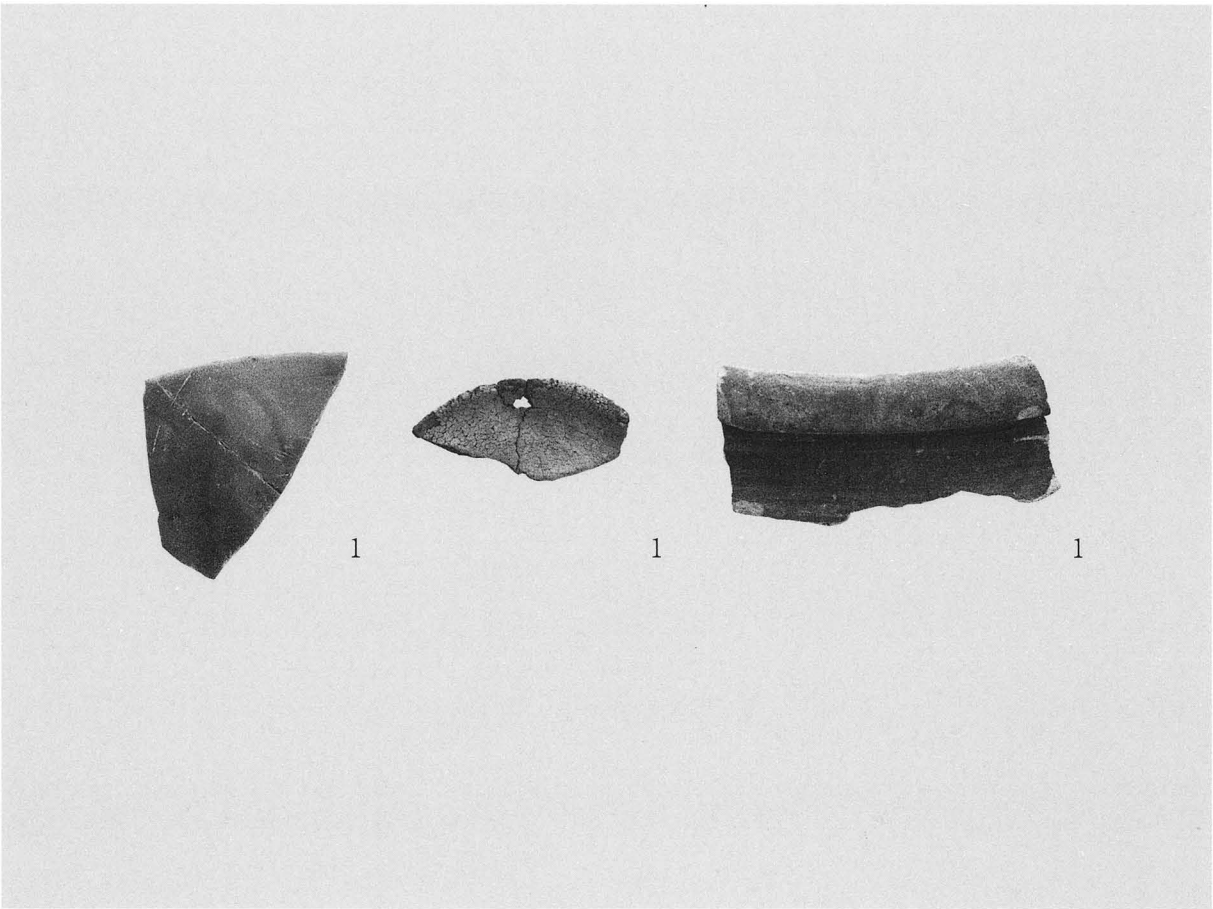




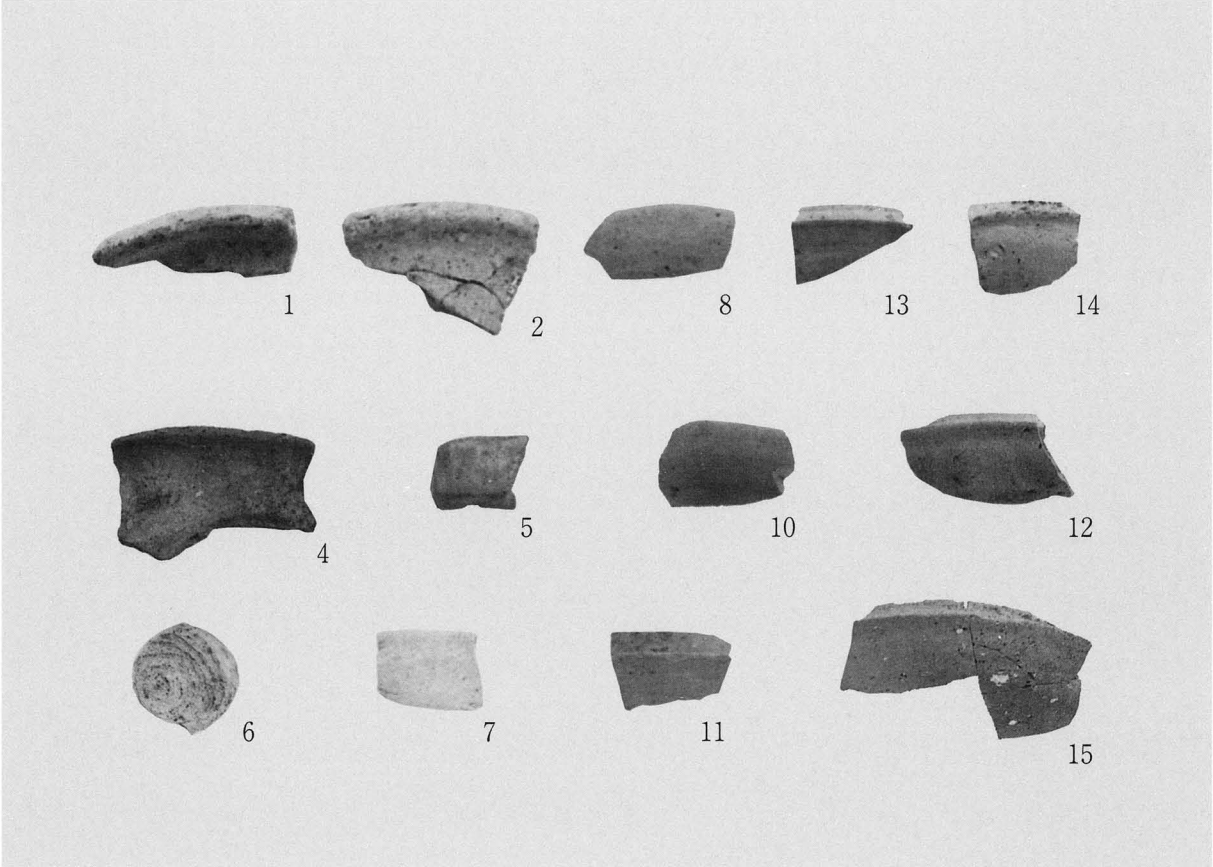


ＯＳＯ05－１　第１調査区包含層（35・41・44）・第２調査区ＳＩ１（58）、ＳＰ１（59）ＳＸ１（60・61）、包含層（65～67・73）第３調査区包含層（76・77）

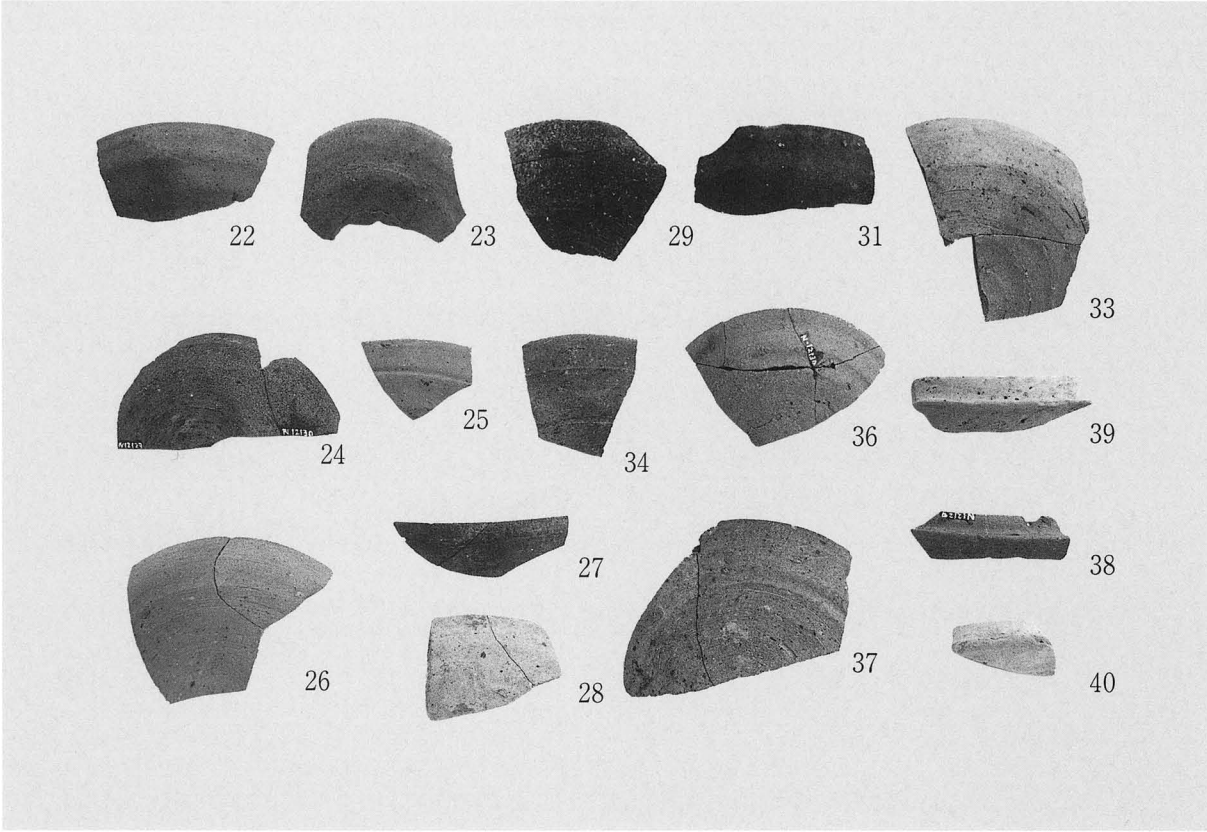
図版11　鳥帽子形城跡（ＥＢＳ04－6・05－4）・太白遺跡（ＴＨＫ04－1）・小塩遺跡（ＯＳＯ05－2）



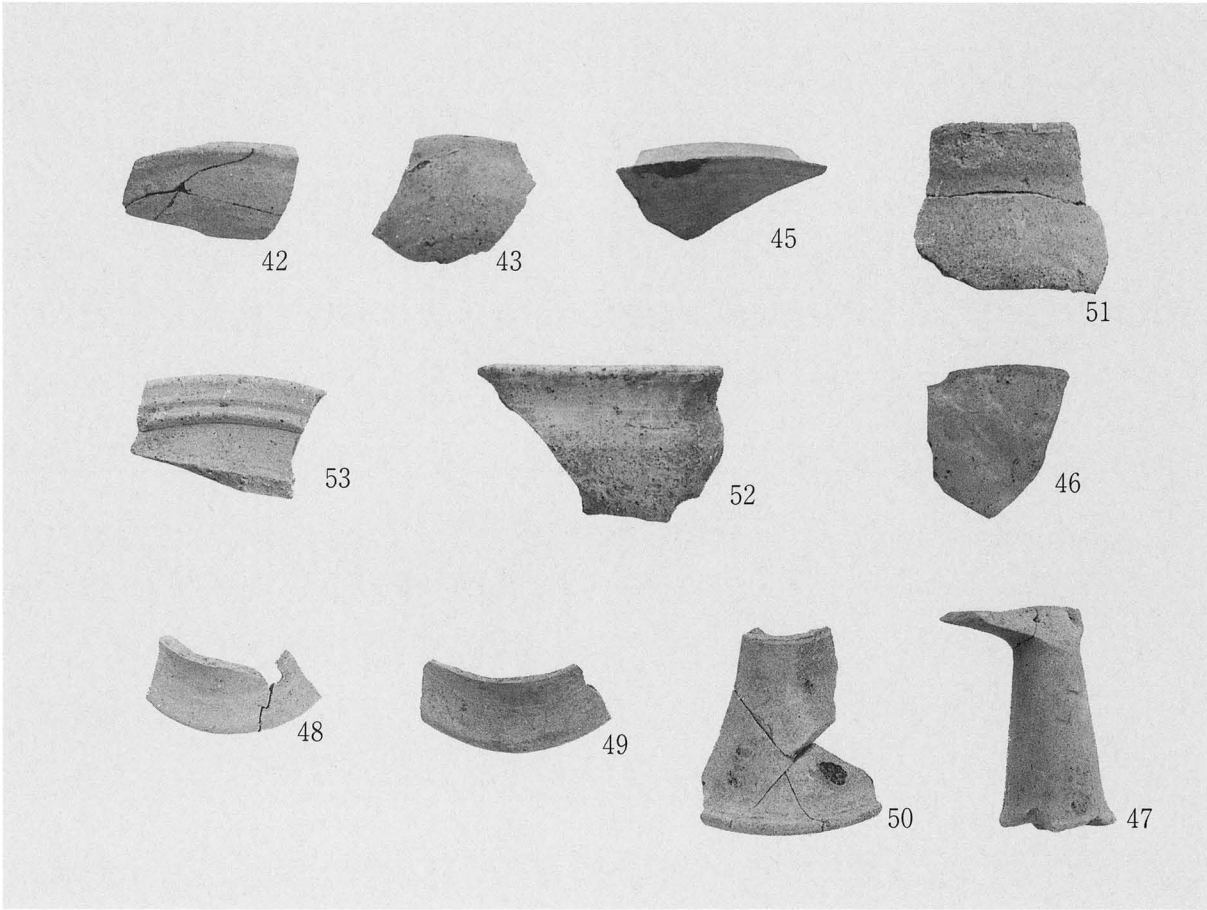
ＥＢＳ04－6（1）、ＴＨＫ04－1（1）、ＥＢＳ05－4（1）



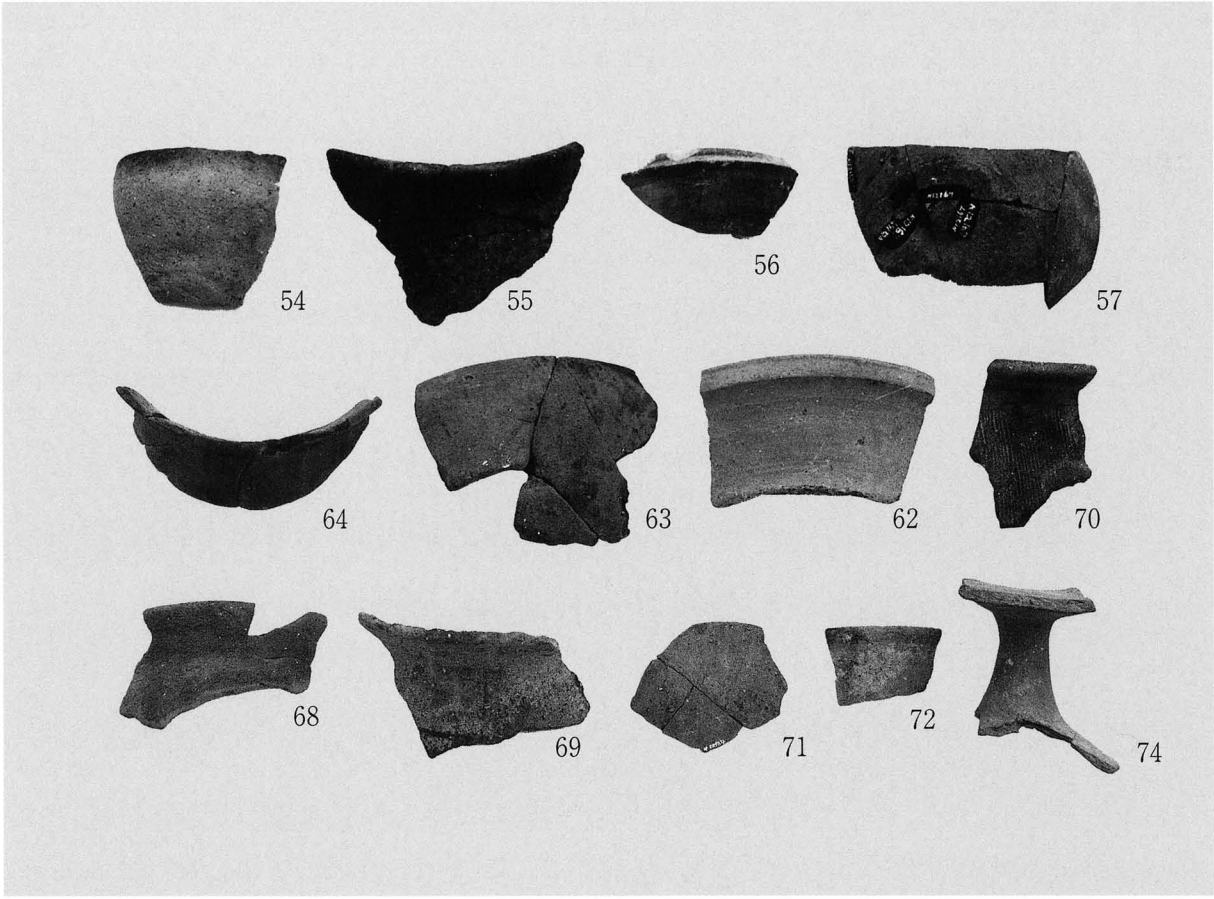
ＯＳＯ05－2　包含層（1・2・4～8、10～15）



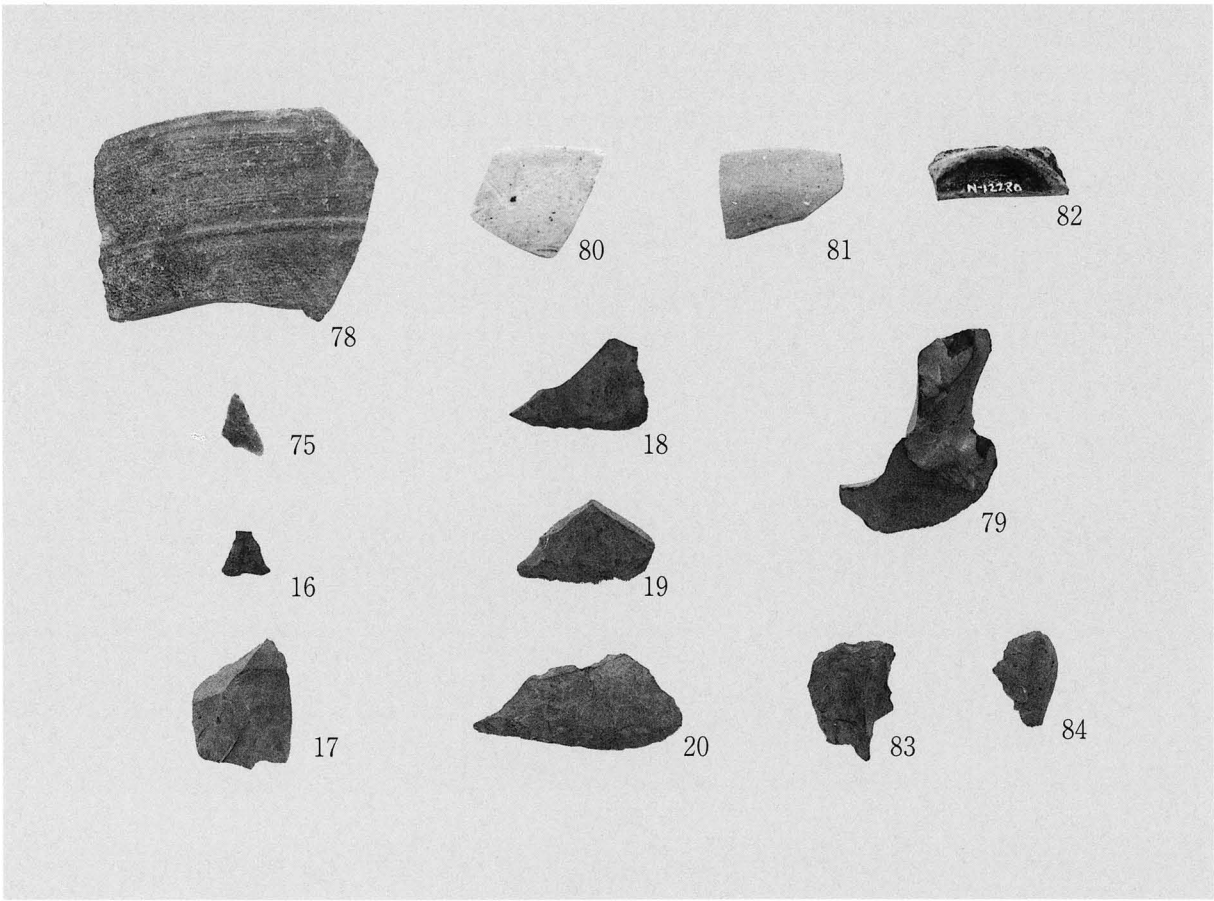
ＯＳＯ05－１　第１調査区包含層（22～29・31・33・34・36～40）



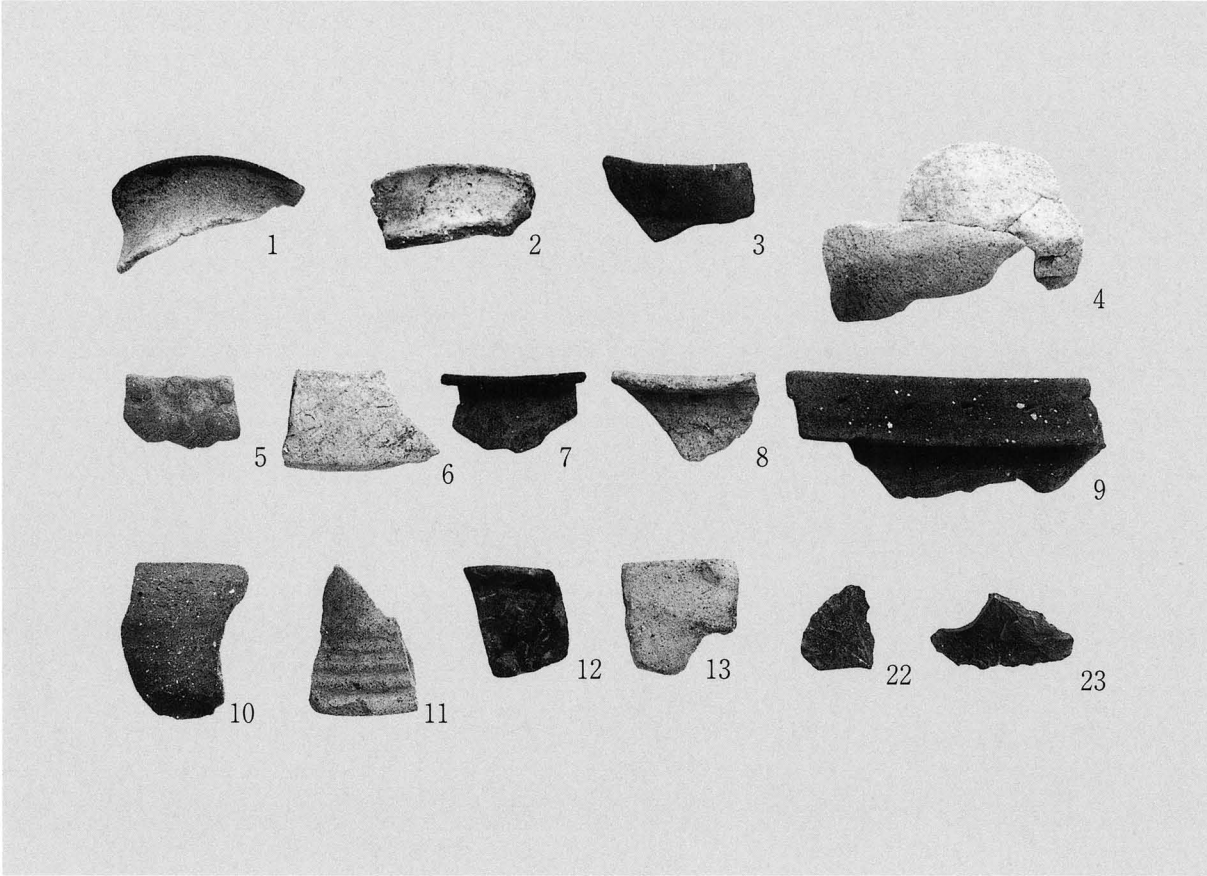
ＯＳＯ05－１　第１調査区包含層（42・43・45～53）



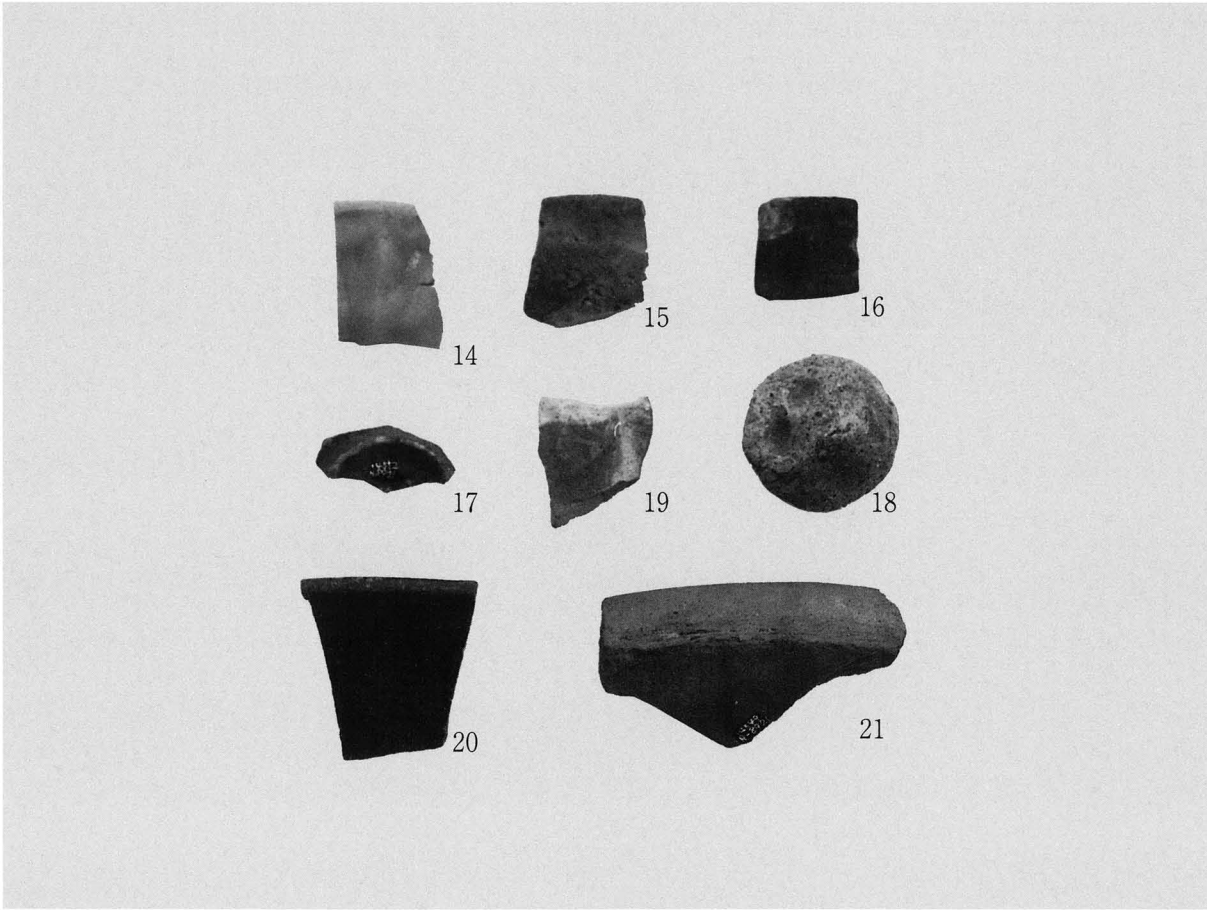
ＯＳＯ05－１　第２調査区ＳＩ１（54～57）、ＳＸ１（62～64）、包含層（68～72・74）



ＯＳＯ05－１　第２調査区（75）、第３調査区包含層（78・79）、第５調査区包含層（80～84）
ＯＳＯ05－２　ＳＫ１（19）、ＳＫ３（17）、包含層（16・18・20）



MIN00－5　包含層（1～13・22・23）



MIN00－5　包含層（14～21）

報告書抄録

ふりがな	かわちながのしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	河内長野市埋蔵文化財調査報告書
副書名	烏帽子形城跡　太白遺跡　上原中遺跡　小塩遺跡　三日市北遺跡
巻次	XXV
シリーズ名	河内長野市文化財調査報告書
シリーズ番号	第45輯
編著者名	太田宏明　小林和美
編集機関	河内長野市教育委員会
所在地	〒586-8501 大阪府河内長野市原町1丁目1番1号 TEL 0721-53-1111
発行年月日	2006年3月31日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
えぼしがたじょうあと 烏帽子形城跡 (EBS04－6)	大阪府 河内長野市 きたちょう 喜多町	27216	府24 河20	34°26′19″	135°34′04″	H17.1.14 ～ H17.2.4	20	宅地造成
たいはくいせき 太白遺跡 (THK04－1)	大阪府 河内長野市 さかえまち 栄町	27216	府24 河146	34°27′00″	135°34′07″	H17.3.29	15	分譲住宅
うわはらなかいせき 上原中遺跡 (UHN05－1)	大阪府 河内長野市 うわはらちょう 上原町	27216	府24 河103	34°26′36″	135°33′31″	H17.9.9	10	店舗
おしおいせき 小塩遺跡 (OSO05－2)	大阪府 河内長野市 おしおちょう 小塩町	27216	府24 河88	34°25′43″	135°34′08″	H17.10.12 ～ H17.10.22	500	範囲確認
えぼしがたじょうあと 烏帽子形城跡 (EBS05－4)	大阪府 河内長野市 きたちょう 喜多町	27216	府24 河20	34°26′27″	135°34′11″	H18.1.16 ～ H18.2.3	20	範囲確認
みっかいちきたいせき 三日市北遺跡 (MIN00－5)	大阪府 河内長野市 みっかいちちょう 三日市町	27216	府24 河141	34°26′00″	135°34′18″	H13.3.27 ～ H13.4.17	90	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
烏帽子形城跡	城館・生産	中世～近世	石組遺構 杭列	青磁碗	
太白遺跡	散布地	中世		土師質皿	
上原中遺跡	散布地	古墳・中世		土師質皿	
小塩遺跡	集落	縄文～中世	竪穴住居 掘立柱建物 土坑	須恵器 土師器 石器	
烏帽子形城跡	城館・生産	中世～近世		瓦質土器	
三日市北遺跡	集落	弥生時代		弥生土器 石器 瓦器	

河内長野市文化財調査報告書第45輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書 XXV

烏帽子形城跡
太白遺跡
上原中遺跡
小塩遺跡
三日市北遺跡

2006年３月31日発行

発行　大阪府河内長野市原町一丁目１番１号
河内長野市教育委員会
0721－53－1111
印刷　（株）近畿印刷センター